42540
教科書文庫
4
810
447-1934
2000.3.30
2116

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

資料

教科書文庫
4
810
44-1934
2000302116

375.9
Ka9

濟定檢省部文
書科教科語國校學業實　日七十二月二年九和昭

實業學校

國文新選

卷五

垣内松三
西尾實　編

株式會社
文學社

広島大学図書
2000302116

一　國語科の重要なる使命に鑑みて國民精神と國語教育の關聯に留意しました。

二　教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。

三　縱に學年を貫き横に學期を連ねて教材の編纂體系は組織的に排列しました。

廣島大學圖書之印

廣島大学教図書
39121

目次（卷五）

一　明るい生活……深作安文……四
二　大和國原……武田祐吉……一一
三　萬葉集鈔……（萬葉集）……一八
四　歌より物語へ……芳賀矢一……二四
五　かぐや姫……（竹取物語）……三五
六　都鳥……（伊勢物語）……四三
七　宇多の松原……紀貫之……四九
八　須磨の秋……紫式部……五五
九　春は曙……清少納言……五九
一〇　菅公の左遷……（大鏡）……六四
一一　法成寺の造營……（榮華物語）……七〇
一二　古今より新古今へ……尾上柴舟……七四
一三　光頼卿參内……（平治物語）……八一
一四　大原御幸……（平家物語）……八九
一五　方丈記鈔……鴨長明……一〇三
一六　新島守……（增鏡）……一〇五
一七　花はさかりに……吉田兼好……一一一
一八　鉢の木……（觀世謠本）……一一五
一九　萩大名……（狂言記）……一二四
二〇　自然愛の發達……土居光知……一四一
二一　奥の細道……松尾芭蕉……一四八
二二　曾我會稽山……近松門左衛門……一七〇
二三　太郎……芥川龍之介……一八二
二四　賴山陽……朝比奈知泉……一九二
二五　蘭學事始……杉田玄白……二〇二
二六　高瀨舟……森鷗外……二一〇
二七　福澤先生を悼む……島田三郎……二二五
二八　生活の中心……阿部次郎……二四八

附錄

日本文學年表（上古・中古・近古）
同（近世・現代）

深作安文 哲學者、文學博士。東京帝國大學教授。

一 明るい生活

深作安文

生活するものは個人であり、生活する所は社會である。從つて、如何にして生活を明るくすべきかの問題は、個人・社會兩方面から解決せられねばならぬ。けれども今は考察を個人の方面に限定する。

一言にしていへば、明るい生活は、理論からなり實行からなり確固たる自己の生活原理を見出だし、これによつて心の坐りを定め、その上に日々の生活を營んでゆくところに展開し來るものである。世には、現實の壓迫に堪へきれないで、極めて暗い人生觀に陷り、悲慘な生活を送るものもあるが、これは衷に依り賴むべき生活原理の確立がなく、從つて己が人格内に己を救ふべき力が準備されてゐないからである。

廣島大學圖書之印

明るい生活を實現する第一の方法は、日々に遭遇する事物を全體的に見ることである。一體事物を見るに二つの見方がある。即ち一はそれを全體的に見る見方であり、他はそれを部分的に見る見方であつて、前者は哲學の立場であり、後者は科學の立場である。哲學といひ、科學といひ、何れも知識を材料として築かれた殿堂であるが、我々の修養に深い關係のあるのは、科學よりも寧ろ哲學である。何故かといふに、科學は世界と人生とを部分的に眺めて研究するものであるが、哲學は兩者を全體的に眺めて思惟するものであつて、我々に兩者を大觀し達觀することを教へるからである。換言すれば、哲學は一段の高處・大處から我々の住みつゝある世界、生きつゝある人生を俯觀して、これを根本的に解釋することを教へるからである。勿論部分的に見た世界や人生も價値のないものではないが、特に修養の點からいへば、全

體的に見た世界と人生とは、我々に向つて、より確固たる生活原理を與へるものである。例へば、苦痛はそれ自身として單獨に考へる時は、單にいとはしいものに過ぎないが、これを全體としての人生に關係づけて見る時には、人生に於ける最も意義深いものの一つともなり得る。見よ、或る者は成功し、或る者は失敗し、成功には快樂が伴なひ、失敗には苦痛が伴なふが、しかも快樂に心驕る者は思はぬ損失や墮落を招き易く、苦痛に己を策勵する者には絶えざる向上と飛躍とが酬いられる。事實に於て、偉大なる人格・偉大なる事業は、苦痛の中からのみ鍛へ出されるといつても過言ではない有樣である。人生の波瀾こゝに於てかあり、世路の曲折こゝに於てかあるのである。されば理想實現の眞劍な活動は、快苦を貫いて、絶え間なく一心の努力をつゞけゆくものでなくてはならぬ。

かくして我々は哲學の立場に立つて、世界なり人生なりの全體的意義を捉へ、我々の全人格の要求を理論的にも滿足させる崇高な世界觀と健全な人生觀とを築き得た上は、日常經驗する小失敗・小蹉跌の如きは、さまで意とするに足りなくなる。從つて、現實の壓迫の中にもよく快活な心境を保ち、終始一貫、堂々と己が進路を邁進することが出來る。

明るい生活への第二の方法は、生活の根柢を宗教に求めることである。元來我々には宗教心と呼ぶべきものが本具してゐる。これは我々が坦々たる大道を濶歩してゐる間は意識の底深く潛んでゐるけれども、一旦病氣なり、災難なり、事業の失敗なりに逢つて、自己の弱さ・小ささを自覺する時、忽ち擡頭し來つて、我々を深く悶え苦しましめ、強きもの・偉大なるものを求めしめるのである。又人は、たとひ幸にして病氣や失敗から免れることが出

來ても、死といふ恐るべき運命には、とても抵抗することが出來ない。而してこの死こそは、病氣よりも、失敗よりも、人をして心の奥底から深刻な弱小感を湧出させるものである。こゝに我々が絶大なものを切實に求めざるを得ない原因が存する。かくて一旦絶對者・全能者を認め得れば、己は相對者のまゝで、この絶對者に冥合することが出來て、限りない力を得、隨喜・感謝の念を以て全人格を滿たされる。眞の信仰生活は、恐らくこの世に於ける最も明るい生活であらう。

第三の方法は「職業卽生命」の覺悟に立つことである。常識からすれば、職業は我々の生命を支へる爲の方便に過ぎない。これは一應正しい見方であつて、何等非難さるべき理由はない。けれども、職業なるものは、これにたづさはる者の生命となつて始めてその神髓に觸れ得るものである。いふまでもなく、一定の職業を

勤めて行くには、恪勤・專心・堅忍といふ如き道德的態度が必要であるが、眞にこれ等諸態度を確立する爲には、單に職業を生活の方便として考へるだけでは不十分である。職業が自己の生命そのものであるに至つて、始めて眞の恪勤・專心・堅忍が實現されるのである。世には生涯轉々として職業を變じ、遂に一事をも成就するに至らずして夢死する者もあり、又自己の職とする所に不熱心不忠實であつて、何等の業績をも擧げ得ずして終る者もあるが、これらは皆「職業卽生命」の意義に徹し得ないことから來る當然の結果に外ならぬ。之に反して一度「職業卽生命」の心境を體得するならば、先づ第一にその業務に熟達することが出來る。一度業務に熟達することが出來れば、必ずそこにいふべからざる興味が湧いて來る。業務に對する深い興味は、何よりも有效にその活動を捗らせる。かくして成績の擧らぬ筈はない。古人は「藝に

遊ぶ」といつた。これは己が職業に献身的努力を盡して來た結果として、利害を遙かに超脱した、職業卽ち我、我卽ち職業の遊戯三昧に自適する境地をいふのであつて、畢竟「職業卽生命」の他の表現に外ならぬ。

しかしながら、意義あり價値ある生活は、唯自己の努力によつてのみ創造せられるものであつて、決して他から與へられるものではない。從つてそれは、一面からいへば、我々の努力を要求することの最も多い生活である。我々が眞に明るい生活を建設しようとするならば、上敍の何れの方法によるにしても、そこには長い間の、熱意と修練と集中と工夫とが要せられるものであることを忘れてはならぬ。（「思想と國家」による）

武田祐吉　文學博士。東京の人。國學院大學教授。明治十九年生。

橿原　奈良縣高市郡白橿村の地。**高市・十市・磯城**　高市・磯城は奈良縣の郡。十市は今磯城郡に屬す

二　大和國原

武田祐吉

わが上代文學には、日本群島に居住してゐた諸民族の間に發生し生育した文化の痕跡を止めて居る。しかし古代に於てその諸民族が未だ溶合せずして、各地に分布して居た時に當り、大和の國に居を占めてゐた所謂大和民族の間には、既にその固有の文化が釀成せられてゐたので、その文學が遂に國文學の主流をなすに至り、爾來悠々三千年、わが國文學史を貫流したのである。

神武天皇が皇居を橿原の地に奠め給うてから、千三百數十年、歷朝おほむね高市・十市・磯城の三郡の中に都せられて、他鄕に移つたことは寧ろ稀であつた。當時の皇居は一代ごとに處を異にして宮殿を營んだのであるから、その造營も簡單であつた。皇居の所在地は必ずしも都邑を形成するのではなく、國民が集團を

泊瀬川　奈良縣宇陀・磯城の郡界より發し初瀬町を經て、西北流して佐保川に合す。

飛鳥川　奈良縣高市郡稻淵村に發し、飛鳥村を經て北流、大和川に合す。

曾我川　奈良縣高市郡に在り、眞菅村・金橋村間を流れ百濟川となりて大和川に注ぐ。

香具山　奈良縣磯城郡に在り。奈良盆地の南部の有名の山。

多武峯　奈良縣磯城郡に在り、山腹に談山神社あり。

なして點在した聚落に過ぎなかつた。故に皇居はその集團の散在してゐる範圍内に於て移動したのである。かくて泊瀬・飛鳥・曾我の三川の流域に居住した人々の間に原始文藝は養育せられたのである。泊瀬川・飛鳥川などの流域は、昔と今とは異なるであらう。これらの川は土砂を押流すので、大雨の後にはもとの河床が高く涸れて、あらぬ處に濁流の漲るのが常であつて、飛鳥川の淵瀬は古來變り易きものとせられてゐたのである。香具山の麓に海原の如き埴安の池のできたのも、それは多武峯から流れ落ちる倉梯川のいたづらであつたであらう。

飛鳥川の東に香具山・耳成山、西に畝傍山があつて鼎立してゐる。いづれも平野の中に孤立した美しい小山である。畝傍山はやや形が鋭い。その附近は昔から森林であつたと思はれる。耳成山は形がなだらかである。古來梔子の樹を以て有名であるが、今も

耳成山・畝傍山　奈良縣高市郡に在りて香具山と共に大和三山として有名なり。

梔子　アカネ科の常綠灌木。莖は二・三米、葉は長楕圓形で、對生す。花は白色大形で香氣あり。

齋瓮　古、酒を盛りて神に供へし陶器の壺。

三輪山　奈良縣磯城郡三輪町の東に在る山。

高取山　奈良縣高市郡の南境に峙ち吉野郡に跨る。

葛城山　奈良縣と大阪府との分界なる金

猶存してゐる。天の香具山はその背後に高い山を控へてゐるので、やゝ目立たない。然し古代から最も人事と交渉の多い山で、神事にはこの山の眞榊を根こじにし、又この山の土を取つて齋瓮を作つたのである。

この三山の地が古代文化の中心地であつた。更に東方には三輪山から續いて、泊瀬の山々が聳え、南には多武・高取の山、西方には葛城の連嶺が雲を凌いで、大和川を隔てて北方の生駒山脈に連なつてゐる。また多武・高取の彼方には吉野川を隔てて吉野の群山かそゝり立つてゐる。たゞ北方のみはやゝ開けて奈良・郡山の平原を控へてゐるが、それもその末は奈良山が霞をひいて遮つてゐる。かやうに四方山を以て圍まれた土地であるから、氣候は溫和であるが、寒暑の差はやゝ激しい。昨日まで青葉に茂つてゐた山も、一夜の雨に黃葉してしまふやうに感じられることも

剛山脈の一峯高さ九六〇米
大和川　水源は泊瀬川、奈良盆地を北西流して大阪灣に注ぐ。近畿第二の大河。
生駒山脈　奈良縣と大阪府との堺をなせる山脈、奈良縣生駒郡の西に在り。
吉野川　大臺ケ原山を發し奈良縣吉野郡を經て、和歌山縣に入りて紀川となりて海に入る。
奈良山　奈良市・添上郡佐保村・生駒郡都跡村の北なる丘陵の總稱
弓月が嶽　卷向山の高峯の名。卷向山は

少くない。併し京都ほどの氣象の激變はなく、雨量は少く、風もさして烈しくはない。晴れて雲の退くまゝに仰ぎ見れば、遙かなる吉野山に今朝は雪の白きを見る。月は卷向の弓月が嶽より出でて、玉くしげ二上山に沈む。この平和の鄕に古聖帝は皇居を奠められたので、そこに住む人々の溫和な心は、そのかみの埴輪の目鼻にも偲ばれるのである。

元明天皇の和銅三年、天皇は都を最北の奈良平原に遷して、ここに平城宮を造營せられた。爾來七代七十餘年の間、この地は帝都として榮えたのである。この南方は大和川を隔てて飛鳥・藤原の平野に接し、東には春日山・高圓山があり、佐保川はその溪谷の水を併せて、南流して大和川に注ぐ。北は奈良山を隔てて山城の國に接し、西は生駒の山脈を以て河内國に隣してゐる。その氣象や風光は三山の地と大差はないが、時の人は山遠き都と稱して、

奈良縣磯城郡纒向村の東嶽
二上山　金剛山脈の一峯。高さ四七四米
元明天皇　第四十三代（御在位一三六七—一三七五）
飛鳥　奈良盆地南部、今の高市郡岡村より飛鳥村の邊の一帶の稱。
藤原　奈良縣磯城郡香具山の山麓にありしと傳へらる
春日山　奈良市の東方。山麓に春日神社あり。
高圓山　春日山の南方に隣れる山。
佐保川　奈良市の東方高地を發し、市の北西方を經、

天空の開豁を喜んだのである。もゝしきの大宮人は佐保の內に邸宅を連ねて、馬醉木散る高圓の野邊に遊び、大君の三笠の山の親しき姿を仰ぎ見つゝ、ひたすら唐代の文物の移入に努めた。この間に古事記・日本書紀は成り、懷風藻は編せられ、律令は再び改修せられた。萬葉集の前身である多くの家集も、恐らくはこの時代の前半に成つたのであらう。時に都を山近き恭仁の宮、難波の京に移したこともあつたけれども、それも一時で、またもとの平城の京に還つた。時代はもう都を遷すには餘りに面倒な事情を伴なふやうになつてゐたのであらう。

青丹よし奈良の都は咲く花の薰ふが如しと歌はれてゐる。香具山のふりにし里は鶉鳴く里と荒れたけれども、夏草の茂みを分けて草深百合の花咲みに咲ますを尋ぬる人もあらう。それより高取の山を越ゆれば、山峽の間を流れて吉野川は遠白く西に

南西流して大和川に合す。**三笠の山**　蓋草山をいふ。春日山の北に在る全山美しき芝生の草山　**懷風藻**　一卷我が國最初の漢詩集。孝謙天皇の御代に成る。**恭仁の宮**　京都府相樂郡、今の瓶原・加茂の二村、木津町の邊一帶を稱す。**難波の京**　現在の大阪市東部の丘上。**青丹よし**　青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如くいまさかりなり。（萬葉集）**和歌の浦**　和歌山市の南四

走る。後の吉野朝の花は山上であるが、萬葉人の遊んだところは川の畔であつた。鮎子さばしる瀧つ河内に離宮を建てられたのは昔からのことで、天武・持統以後も屢この宮に行幸せられた。

萬葉集頃の人々の通路は、葛城山の麓なる巨勢の野を通つて吉野川の溪谷に出た。それより下り眞土の山を越えて紀伊の和歌の浦へも出た。難波への往還は、奈良からは生駒山脈を越えた。峰の上に匂へる花を仰ぎ見つゝ、風な吹きそと龍田の神に言擧げして峠に出れば、かゞやく難波の海は眼の前に廣げられて、遣唐の船舶も、その岸の住吉の神を祈つて眞楫しゞぬき漕ぎわかれたのである。奈良より北へ奈良坂を越えれば、泉川の清流は鹿背山の間を流れて來る。さざなみの近江の國へはこれから通ずるので、北國への旅には必ず越えねばならぬ峠であつた。

大君のましまします時は即ち都であるが、天皇の御心が一旦その

籾の海灣。**龍田の神**　風神たる天ノミヲノカミ・國ツクニノミヲノカミ・柱命・國柱命を云ふ。生駒郡三郷村立野に官幣大社龍田神社として祀る。**住吉の神**　古來、海路を守る神として漁業・航海業者の間に信仰ある神。**興福寺**　法相宗の大本山。奈良市公園の地内に在り。**立ち替りの歌**　萬葉集卷六に出づ。**大極殿**　大内裏八省院の中央にあり。天皇の朝政を見たまひまた即位の大典を行はせられし正殿。

地を離れて北へ奈良坂を越え給へば、さしもとことはにと思ひ定めて造られた奈良の都も、いつしか衰へて僅にその東部のみが興福寺の勢力の下に殘つた。これが現在の奈良市である。

立ち替り古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり

これは天平の中ごろに、都を一時奈良から山城の恭仁に移した當時の作である。今の奈良に旅する人は麥圃の間にそのかみの平城宮の大極殿の礎石の遺跡を見て、また同じ感慨に浸るであらう。併し工作物は亡びても、いにしへ人の生活の蹤は儼として今も殘つてゐる。古人の殘した文藝の力はたやすく吾人の心の上に古人の心を呼起さしめる。文化の故郷を偲び祖先の心情を懷かしむ者に取つては、大和の國の一草一石も意味ある存在である。（上代日本文學史）

萬葉集 二十卷。撰者不詳。仁德天皇の朝より淳仁天皇の朝に至る四百餘年間の和歌四千四百九十六首（短歌四千百七十三長歌二百六十二、旋頭歌六十一）を漢字の音訓を以て記錄せるもの

持統天皇 第四十一代（御在位一三四六—一三五七）

柿本人麿 傳不詳。持統・文武二朝に仕ふ。世に歌聖と稱す。

三 萬葉集鈔

短歌

春過ぎて夏きたるらし白たへの衣ほしたりあめの香具山　　持統天皇

ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春立つらしも　　柿本人麿

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたむきぬ

山部赤人 傳不詳。聖武天皇に仕ふ。柿本人麿と名を齊しうす。

和歌の浦 和歌山縣海草郡和歌浦町・紀三井寺村の江灣。

大伴旅人 養老二年、隼人を征して功あり。天平二年、大納言に任じ同三年（一三九一）歿、年六十七。

和歌の浦に潮滿ち來れば潟を無み葦邊をさして田鶴鳴きわたる　　山部赤人

むかし見しふるき堤は草ふかみ池のなぎさに水草おひにけり

ぬば玉の夜のふけゆけばひさぎ生ふる清き河原に千鳥しば鳴く

吾妹子が植ゑし梅の木見るごとに心むせつつ涙しながる　　大伴旅人

わが丘に秋萩の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人もがも

山上憶良 大寶三年入唐し、慶雲元年歸朝す。聖武天皇の朝筑前守に任じ、天平五年（一三九三）歳、年七十四。

大伴の御津 御津は難波（今の大阪）で大伴はその邊の總名なり。

大伴家持 旅人の子。延曆中中納言に任じ、征夷大將軍となりて蝦夷を征す。延曆四年（一四四五）歳。

山上憶良

憶良らは今は罷らむ子泣くらむその彼の母も吾を待つらむぞ
いざ子どもはやく日本へ大伴の御津の濱松待ちこひぬらむ

大伴家持

わが宿のいささ群竹吹くかぜのおとのかそけきこの夕かも
うららうらに照れる春日に雲雀あがりこころかなしもひとりし思へば

近江の荒都 滋賀縣滋賀郡の地に在りし天智・弘文兩朝の帝都大津宮。

橿原のひじり 神武天皇。

平山 奈良市の西北にある歌姫越。

天皇 天智天皇。

長歌

近江の荒都を過ぎし時作れる歌　柿本人麿

玉襷　畝火の山の　橿原の　ひじりの御世ゆ　あれましし　神のことごと　樛の木の　いや繼ぎ嗣ぎに
天の下　知らしめししを　天に滿つ　倭を置きて
青丹よし　平山を越え　いかさまに　念ほし食せか
天離る　夷には有れど　石走の　淡海の國の　樂浪
の大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の
神のみことの　大宮は　此處と聞けども　大殿は
此處と云へども　春草の　茂く生ひたる　霞立つ
春日の霧れる　百磯城の　大宮どころ　見れば悲し

反歌

辛崎 滋賀縣滋賀郡に在り。

田兒の浦 駿河國富士郡の沿海。

ささなみのしがの辛崎さきくあれど大宮人の船まちかねつ

ささなみのしがのおほわだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも

不盡山を望める歌　山部赤人

天地の　分れし時ゆ　神さびて　高くたふとき　駿河なる　不盡の高嶺を　天の原　ふりさけ見れば　わたる日の　影もかくろひ　照る月の　光も見えず　白雲も　いゆきはばかり　時じくぞ　雪はふりける　語りつぎ　言ひつぎ往かむ　不盡の高嶺は

反歌

田兒の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪は

山上憶良 大寶三年入唐し、慶雲元年歸朝す。聖武天皇の朝筑前守に任じ、天平五年（一三九三）歿、年七十四。

ふりける。

子等を思ふ歌　山上憶良

瓜はめば　子どもおもほゆ　栗はめば　ましてしぬばゆ　いづくより　來りしものぞ　まなかひに　もとなかかりて　安寢しなさぬ

反歌

しろ金もこがねも玉もなにせむにまされるたから子にしかめやも

芳賀矢一　國文學者。文學博士。昭和二年歿。年六十一。

平安朝　桓武天皇の延曆十三年（一四五四）平安遷都より、後鳥羽天皇の文治元年（一八四五）鎌倉幕府開創まで三百九十一年間。

清和　第五十六代の天皇。（御在位一五一八——一五三六）。

文德　第五十五代の天皇。（御在位一五一〇——一五一八）。

四　歌より物語へ

芳賀矢一

平安朝時代は支那文化の影響の次第にわが文化と融合したる時代にして、わが國特有の文化も亦次第に發展の氣運を見たる時代なりとす。所謂和魂漢才の語は、實にこの時代の造語なりしなり。就中文學上に最大の關係を有するは、假名文字の製作なり。奈良朝に於ては、漢字を音韻文字として使用せしが、この時代に至り、或は之を草體にし、或はその扁旁を割きて假名となし、音標文字として用ひたるより、漢文・漢詩の製作は朝廷の科學に必要なる科目たりしに關らず、一面に於て國語を以て記せる純國文學の發生を促し來り、當時の建築・彫刻・繪畫等が日本式の發達をなしたると同じく、文學も亦特殊の發達をなして、支那の强大なる文化に壓伏せられざりし我が國民の元氣を發揮せり。假名

延喜の朝　醍醐天皇の御代。

古今集　古今和歌集。二十卷、醍醐天皇の延喜五年（一五六五）四月、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑、勅を奉じて撰す。貫之の和文の序及び紀淑望の漢文の序あり。

後撰集　後撰和歌集。二十

文字を以て一般に國語を寫すに至りしは、清和・文德以後にあらんか。韻文としての和歌、散文としての物語は相前後して著しき發達をなし、平安朝の文學界を燦爛たらしめたり。

延喜の朝、始めて和歌勅撰集の擧あり。これを古今集とす。古今集は萬葉集以後の短歌を集め、尙當時の歌人の篇什を收む。萬葉集の歌には直覺の情を歌ひ、眼前の景色を敍せるもの多し。古今集の歌は、俯仰感懷、人生の無常を敍し、浮世の夢の如きを說く。三十一文字の歌體としては、頗る豐富なる內容を收め得たりといはざるべからず。萬葉集は概して敍景の歌に富み、古今集には、理窟の歌多し。修辭の法も、古今に至りては進步著しく、譬喩・緣語・懸詞等最も巧妙に使用せらる。奈良朝と平安朝との言語の相違は、亦その歌調の相違を感ぜしむること尠からず。萬葉集は初心な

卷。村上天皇の天曆五年（一六一一）十月、大中臣能宣・清原元輔等五人をして撰ばしめ給ひし歌集。萬葉集・古今集に入らざる新古の歌一三五六首を收む。**拾遺集** 拾遺和歌集。二十卷。古今集・後撰集に洩れたる歌一五三一首を收む。

紀貫之・土佐日記 第七課參照。

大堰河行幸和歌序 延喜五年九月宇多法皇の大堰川御幸の時、貫之

る趣ありて、簡古の味はひに富み、古今集は巧緻の境に進みて、勁健の趣なし。然り而して、自然と人生との融合はこの時代に確定せられ、春の鶯、夏の郭公、秋の蟲の音・鹿の聲、四時の景物に伴なふ禽獸も亦自ら一定し、春の花の盛りには、人生の樂しき朝を思ひ、萩の上の露には、はかなく消ゆる死の夕を悲しむ。和歌の約束悉くこゝに成立して、後の文學は皆これに則るに至れり。古今集に次ぎての撰集は後撰集にして、遺れるを拾へるものに拾遺集あり。相並びて三代集と稱す。

紀貫之は國文を以て始めて土佐日記を記し、大堰河行幸和歌序を記し、古今集の序文を作れり。かくの如きは、卽ち假名文をして漢文と併行せしむる新例を開けるものにして、貫之が功勞見識は實にこの點に存す。

其の他供奉の歌人の詠じたる和歌の序。**伊勢物語** 第六課參照。**在五中將** 在原業平。歌人。阿保親王の第五子。元慶四年（一五四〇）歿、年五十六。**古今六帖** 古今和歌六帖。十二卷。古今の名歌を六帖、二十餘題に分類して收む。貫之の女の撰といふ。**新撰萬葉集** 二卷。平安朝初期の短歌を萬葉假名にて書き、歌毎にその意を含める漢詩を添へたるもの。菅原道眞の撰と傳ふ。

伊勢物語は和歌に就いての傳說集なり。在五中將の初冠より書起して、その今はの時の歌を以て筆を收む。すべて歌を主として、その由來・境遇を敍述せるものなり。然れども篇中の歌は萬葉集・古今六帖・新撰萬葉集中に見ゆるもの尠からず。或は多少その句を變更したるものあり。業平以後の作者の歌も亦加はれり。要するに、人口に膾炙せる古今の名歌を基礎として、その歌の由來を說き、これに說話を附加したるものなり。伊勢物語の後に大和物語あり。同じく歌物語にして、當時の名歌に關する說話を收め、又弘く古代の和歌・傳說を收錄せり。その伊勢物語と相並びて後の歌人に尊崇せられたるは、故ありといふべし。

歌物語は歌を主とす。もし一身のこの種々の境遇を記述すれば卽ち日記となり、もしこの種々の境遇を總合して脚色を加ふれば卽ち物語となる。この種の日記の最も古きを蜻蛉日記とす。

大和物語 二卷。作者不詳。

蜻蛉日記 八卷。右大將藤原道綱の母の著。

和泉式部日記 一卷。著者和泉式部は大江雅致の女。和泉守橘道貞に嫁し、小式部内侍を生む。道貞の死後藤原保昌に嫁す

紫式部日記 二卷。紫式部が上東門院に宮仕せし時の記錄。

竹取物語 第五課參照。

うつぼ物語 二十卷。作者不詳。異本多し。

日記てふ名の下には、これより先、土佐日記あれども、こは紀行文なり。紀行文の日記も亦歌を主とせる事、尙歌物語の性質を失はずと雖も、女流日記の如く女子の生活を記したるものにあらず。和泉式部日記は、これと比較すれば、文辭も整はざるのみならず、輕佻浮華の本性はよくその筆端にあらはれたり。紫式部日記にも抒情の文多けれども、人事の筆を交へたる所尠からず。物語・日記の、上流社會の人の妻として家庭の樣を寫せるに反し、これは高家の召使として宮仕の樣を寫せり。前者が自己の情緒をのみ筆述せるに對し、これは主家の榮華めでたきさまを寫せり。

物語の祖と稱せらるゝ竹取物語は、月中女子の傳說を骨子として、後の物語類とはその性質を異にす。うつぼ物語の、主人公仲忠の父俊蔭の事を記するや、亦印度の宗教傳說によりて、奇怪の談多く、仲忠の生立、尋常ならざれども、以下は通常の搢紳・貴女等

落窪物語 四卷。作者不詳。

源氏物語 第八課參照。

紫式部 第八課參照。

の物語となり了れり。源氏以前の物語としては、恐らく最も大部なるものなりしならん。その他の小物語に至りては、實に多數なりしなるべけれども、今傳はれるもの尠し。落窪物語も亦源氏以前の物語にして、繼子傳說を骨子とす。かくの如き物語・册子の流行につれて源氏物語は成れり。源氏物語はこれらの物語を大成したるものといふべく、平安朝物語の白眉として、この時代の代表的傑作と見做すを得べし。

源氏物語は紫式部の著にして、前後五十四帖、前篇は光源氏を主人公とし、後篇の十帖は薫大將を主人公とす。卷數を以て、平安朝第一の大作たるのみならず、全篇貫通の脚色整然として紊れず。主人公を圍繞せる各種の人物の性格も明瞭に發揮せられ、局面の變化も亦頗る多し。平安時代の物語は宮廷を以て中心とす。源氏物語は實に平安朝の上流社會の心性を映寫し、艶美の筆、能

く宮廷を圍繞せる貴紳生活の面影を傳へたり。大體に於て事實にして、傳奇的ならず。うつぼ物語に比すれば、一層現實的となり、唯佛教の因果則を認めたるのみ。源氏の大作たる所以は、その人物の描寫に於けると同じく、その自然を描ける文辭の絢爛精妙なる點に在り。人事の描寫の後には必ず自然の背景を添ふ。上古以來人事と自然とを融合せる詩的思想は、こゝに至りて最大の發達をなせるなり。その半面は和歌の趣味にして、地の文には必ず歌の景情を含めり。源氏は卽ち和歌の最も大なるものなり。後世の歌人が源氏物語を以て歌人必讀の書となししも眞に故なきにあらず。

源氏物語の後に狹衣物語あり。源氏以後の物語として、この外に更科日記の著者、菅原孝標女の作といへる濱松中納言物語、及び藤原兼輔の作なりと稱せらるゝ堤中納言物語あり。作者に就

狹衣物語 四卷。大貳三位藤原賢子の作と傳ふ。

更科日記 一卷。著者は菅原孝標の女。

菅原孝標女 歌人。

濱松中納言物語 四卷。みつの濱松物語ともいふ。作者不詳。

藤原兼輔 歌人。從三位中納言。賀茂川堤上に居るを以て堤中納言といふ。承平三年（一五九三）歿、年五十七。

堤中納言物語 二卷。二種あり、一は堤中納言兼輔の事蹟を述べしもの、一は十篇の短篇物語を集錄せるものなり。

清少納言・枕

いては皆疑ふべし。文辭・脚色ともに源氏を凌駕すること能はず。

源氏物語と相並びて國文の雙璧と稱へらるゝものは、清少納言の枕草子なり。清少納言は、紫式部と時代を同じうし、紫式部が中宮の上東門院に仕へたる時、皇后定子の方に仕へ、その寵遇を蒙りたり。枕草子はその宮仕の時の見聞を記し、又種々の自然及び人事に關する觀察を記せるもの、着眼奇警にして文章才氣に富むこと、その人物を想見すべきものなり。しかれども、これはまた和歌との關係を離れず。平安朝の物語・日記が歌物語の發達といはば、この隨筆も同じく和歌と密接の關係あるものといふべし。その宮廷の事實を敍するや、尙日記と等しきものあるは姑くいはず、自然界に對する着眼は亦歌人としての着眼なり。春秋の景色・草木・禽獸に至るまで、和歌の題目に入るものを擧げて、これを類從せしなり。山河を始め地名・物名は、多く和歌によりてその

皇子 共に第九課參照。**上東門院** 藤原道長の女彰子。一條天皇の中宮。**皇后定子** 藤原道隆の女。一條天皇の皇后。

興味を聯想し來るものを擧げ、又その名稱の詩的なるもの、卽ち歌に入るべきものを擧げ來つて、その愛すべきをいへるは、全く歌人として天地・萬物を見たるなり。「うつくしきもの」「悲しきもの」「おそろしきもの」等、抽象的題目の下に、自然界のみならず、併せて人事界の各種の境遇を列擧せるも、歌の題としていづれの方面にも着眼したればなり。枕草子の妙はその隨筆たる點に在り。忽ちにして人事、忽ちにして自然、或は公事を評し、或は人物を評し、或は自己を誇り、或は皇后を褒む。その變化、その錯綜、こゝに始めて全篇の妙味を成し來る。一篇の文章の妙味も亦句法の錯綜にあり。或は長句、或は短句、忽ちにして花に及び、忽ちにして小兒に移り、更に草花を點じ來り、再び人事に返り、忽ちにして今、忽ちにして昔、時と場所とを右往左往し、天地間の萬物、人事と自然とを問はず、種々雜多に、想像の至るかぎり捕捉し來る。その變化轉

榮華物語 第一一課參照。**村上天皇** 第六十二代の天皇（御在位一六〇七—一六二七）**道長** 藤原兼家の子。一條・三條・後一條の三朝に仕し、攝政・關白・太政大臣

變の妙、卽ち人を魅するに足るなり。或事柄に執着固定せずして一時に多方面の興味を惹起すの妙機を捕へ得たるは、卽ちその文の輕妙洒脫の風を帶ぶる所以なり。この點に於て、後世の俳家に似たるところあり。頓智・機智を貴ぶは當時の和歌の贈遺に於ける特徵として、歌人の最も苦心せる所なり。淸少納言は才氣奔放、當意卽妙の才に富めり。その性質最もよくこれに適したるなり。語を換へていへば、直ちにその時代の性格を代表する人物なりしなり。

平安朝時代初期の歌物語、一變して小說的物語となり、日記となり、再變して歷史物語を生ぜり。歷史物語としては、卽ち榮華物語・大鏡等あり。榮華物語は全篇四十帖、村上天皇の月の宴に始まりて、紫野の卷に終るといへども、要は關白道長が一生の榮華を寫せるものなり。大鏡の藤原氏の榮華を寫すことは、全く榮華物

に至る。後一條天皇の萬壽四年（一六八七）歿、年六十二。
大鏡　第十課參照。
雲林院　今の京都市上京區大宮の地にありし寺。夙く荒廢に歸す。

語に等し。しかも雲林院の菩提講に來り合へる大宅世繼・夏山繁樹二人の老翁の談話としてこれをしるし、まゝ傍聽者の意見を挿み、全體の構造、文學的にして飽くまでも物語たる性質を失はず。その文稍勁健にして、筆端褒貶の意を含めるは、思ふに男子の作なるべし。この二書は、藤原氏時代の最後の文學として、藤原氏時代の最後の榮華を寫せるものなり。藤原氏の榮華は道長に至りて極まる。二書共に道長の盛世を寫すを主眼として、藤原氏の歷史を敍し來れるなり。

平安朝の世は平安の都の今を盛りと榮えたる時にして、上流の紳士は詩歌に、音樂に、舞踏に、風流閑雅の技を弄べり。その束帶の裾を引きて、頻繁なる年中行事に仕へし態や、如何に優美なりけん。これらの面影は各種物語の上に想見すべきなり。

（「國文學歷代選」による）

五　かぐや姫

春の初よりかぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。或人の、「月の顏見るは忌むこと」と制しけれども、ともすれば、人まには月を見ていみじく泣き給ふ。

七月の望の月に出でゐて、せちに物思へるけしきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫、例も月をあはれがり給ひけれども、この頃となりては、たゞごとにも侍らざめり。いみじく思し歎くことあるべし。よくよく見奉らせ給へ。」と言ふを聞きて、かぐや姫にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ、うましき世に。」と言ふ。かぐや姫、「月を見れば、世のなか心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき。」といふ。かぐや姫のある處に到りて見れば、なほ物思へるけし

きなり。これを見て、「あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ。」といへば、「思ふこともなし。物なむ心細く覺ゆる。」といへば、翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、物おぼすけしきはあるぞ。」といへば、「いかでか月を見ではあらむ。」とて、なほ月出づれば、出で居つゝ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月の程になりぬれば、なほ時々は打歎き泣きなどす。これを見て、使ふものども、「なほ物思す事あるべし。」とさゝやけど、親を始めて何事とも知らず。

八月の望ばかりの月に出でゐて、かぐや姫いといたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも、「何事ぞ。」と問ひ騒ぐ。かぐや姫泣く泣くいふ、「さきざきも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。さのみやはとて打出で侍りぬるぞ。おのが身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それを、昔の契ありけるにより

てなむ、この世界にはまうで來りける。今は歸るべきになりにければ、この月のもちに、かの本の國よりむかへに人々まうで來むず。さらずまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。」といひて、いみじう泣く。翁、「こはなでふ事をのたまふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、菜種の大きさおはせしを、わが丈たち並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや。」といひて、「われこそ死なめ。」とて、泣きののしること、いと堪へ難げなり。かぐや姫のいはく、「月の都の人にて、父母あり。片時の間とてかの國よりまうで來しかども、かくこの國には數多の年を經ぬるになむありける。かの國の父母の事もおぼえず、こゝにはかく久しく遊び聞えてならひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど、おのが心ならず罷りなむとする。」といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人

人も、年頃ならひて、立別れなむ事を、心ばへなどあてやかに、美しかりつることを見ならひて、戀しからむ事の堪へ難く、湯水も飲まれず、同じ心に歎かしがりけり。

かゝる程に、宵うち過ぎて子の時ばかりに、家のあたり晝の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりにて、在る人の毛の孔さへ見ゆる程なり。大空より、人、雲に乘りて降り來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ちつらねたり。これを見て、内外なる人の心ども、ものに襲はるゝやうにて、相戰はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を執りたてむとすれども、手に力もなくなりて痿えかゞまりたる中に、心さかしきもの、念じて射むとすれども、外ざまへ往きければ、荒れも戰はで、心地たゞしれにしれて守りあへり。

立てる人どもは、裝束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ

造麻呂　竹取翁の名。

具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、「家に造麻呂まうで來。」といふに、猛く思ひつる造麻呂も、物に醉ひたる心地して、うつぶしに伏せり。曰く、「汝、をさなき人、聊かなる功德を翁つくりけるによりて、汝が助にとて片時のほどとて降しし、そこらの年ごろ、そこらの金賜ひて、身を更へたるが如くなりにたり。かぐや姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許に暫しおはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く、能はぬことなり。はや返し奉れ。」といふ。翁答へて申す、「かぐや姫を養ひ奉ること二十年餘りになりぬ。片時と宣ふに、怪しくなり侍りぬ。又他處にかぐや姫と申す人ぞおはしますらむ。」といふ。「ここにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ。」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車を寄せて、「いざ、かぐや姫、穢なき處にいかでか久しくおはせむ。」といふ。たて籠め

たるところの戸、卽ちたゞあきにあきぬ。格子どもも、人はなくしてあきぬ。嫗抱きてゐたるかぐや姫、外に出でぬ。えとゞむまじければ、たゞさし仰ぎて泣き居り。

竹取心惑ひて泣き伏せる處に寄りて、かぐや姫いふ、「こゝにも、心にもあらでかく罷るに、昇らむをだに見送り給へ。」といへども、「何しに悲しきに見送り奉らむ。われをば如何にせよとて、捨てては昇り給ふぞ。具して率ておはせね。」と泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。文を書き置きて罷らむ。戀しからむをりをり、取出でて見給へ。」とて、打泣きて書くことは、「この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬる事、返す返す本意なくこそ覺え侍れ。脫ぎ置く衣を形見と見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見捨て奉りて罷る空よりも落ちぬべき心地す。」と書き置く。

竹取物語 一卷。かぐや姫物語、又は竹取の翁物語ともいふ。作者不詳。

天人の中に持たせたる筥あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。一人の天人いふ、「壺なる御藥奉れ。穢き處の物聞し召したれば、御心地あしからむものぞ。」とて持て寄りたれば、些か嘗め給ひて、少し形見とて、脫ぎ置く衣に包まむとすれば、ある天人包ませず、御衣を取出でて着せむとす。その時に、かぐや姫、暫し待て。」といひて、「衣着つる人は心異になるなり。物一言いひ置くべき事あり。」といひて文書く。

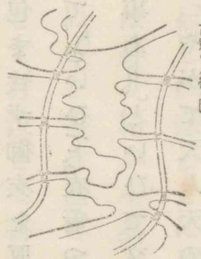
やがて天人、天の羽衣着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思も無くなりにければ、車に乘りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。その後翁嫗、血の涙を流して惑へど詮なし。あの書き置きし文を讀みて聞かせけれど、「何せむにや命も惜しからむ。誰が爲にか何事も益もなし。」とて、やがて起きも上らず病み臥せり。（「竹取物語」による）

八橋　愛知縣碧海郡。今の知立町の東。

六　都鳥

昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき國求めにとて往きけり。もとより友とする人一人二人して往きけり。道知れる人もなくて惑ひ往きけり。三河の國八橋といふ所に到りぬ。そこを八橋といひけるは、水行く河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といひける。その澤の邊の木の蔭におり居て、飯くひけり。その澤に杜若いとおもしろく咲きたり。それを見て、或人の曰く、「かきつばたといふ五文字を句の上に据ゑて、旅

古畫の八橋の圖



愛川神宮寺の八橋の模式

宇津の山　静岡縣安倍郡と志太郡との界。

の心を詠め。」といひければよめる。

から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人飯の上に涙落して、ほとびにけり。

往き往きて駿河の國に到りぬ。宇津の山に到りて、我が入らむとする道はいと暗う細きに、蔦楓は茂り、物心細く、すずろなる目を見ることと思ふに、修行者逢ひたり。かゝる道にはいかでかおはするといふを見れば、見し人なりけり。京にその人の許にとて、ふみ書きてつく。

駿河なるうつの山邊のうつつにもゆめにも人の逢はぬなりけり

富士の山をみれば、五月のつごもりに雪いと白う降れり。時しらぬ山はふじの嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の

比叡の山 京都の東北に峙ち、山城・近江兩國に跨る。高さ八百五十米。山上に延暦寺あり。

隅田川 角田・住田等とも書く。東京市の東方を流るる川。昔は利根川之に合流し川幅現在よりも廣かりしといふ。

ふるらむ

その山は、こゝに譬へば、比叡の山をはたちばかり重ねあげたらむほどして、なりは鹽尻のやうになむありける。

なほ往き往きて、武藏の國と下總の國との中に、いと大きなる川あり。それを隅田川といふ。その川の邊りに群れゐて思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守、はや舟に乘れ。日も暮れぬ。といふに、乘りて渡らむとするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と足とあかき、鴫の大きさなる、水の上に遊びつゝ魚を喰ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人み知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥。」といふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

惟喬親王 文德天皇の第一皇子。詩歌をよくす。貞觀十四年出家、寛平九年（一五五七）薨、御年五十四。

水無瀨 今の大阪府三島郡島本村。

右のうまのかみ 在原業平。阿保親王の第五子。貞觀の頃、右馬頭に任じ、元慶年中、右近衛中將に進み、相模守、美濃守を兼ぬ。元慶四年（一五四〇）歿、年五十六。

交野の渚の院

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

昔、惟喬親王とまをす皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀨といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花盛にはその宮になむおはしましける。その時右のうまのかみなりける人を常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩は懇ろにもせで、酒をのみ飲みつゝ大和歌にかゝれりけり。今狩する交野の渚の院、その櫻ことにおもしろし。その木の下におりて居て、枝を折りて挿頭にさして、上・中・下みな歌よみけり。うまのかみなりける人のよめる。

世の中にたえて櫻のなかりせば春のこころはのどけからまし

となむ詠みたりける。また人の歌、

散ればこそいとど櫻はめでたけれうき世になにかひさしかるべき

とて、その木の下は立ちて歸るに、日暮になりぬ。

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで酒飲み物語して、さてあるじの皇子醉ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隱れなむとすれば、かのうまのかみのよめる。

あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあらなむ

かくしつゝまうで仕うまつりけるを、おもひの外に御髪おろさせ給ひて、小野といふ處に住み給ひけり。正月に拜み奉らむとてまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうでて拜み奉るに、つれづれといと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、古のことなど思ひ出でて聞えけり。さて

大阪府北河内郡牧野村。

小野　京都市左京區小野町比叡山の西麓にあり。

も侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、え侍はで、夕暮に歸るとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

昔、男ありけり。身はいやしながら、母なむ宮なりける。その母、長岡といふ處に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。一人子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。

さる程に、師走ばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば、歌あり。こと言はなくて、

老いぬればさらぬわかれのありといへばいよいよ見まくほしき君かな

長岡　京都府乙訓郡向日町。

となむありける。これを見て馬にも乘りあへず參るとて、打泣きて道すがら思ひける。

世の中にさらぬわかれのなくもがな千代もといのる人の子のため

昔、月日のゆくをさへなげく男、三月のつごもりに、をしめども春のかぎりのけふの日の夕ぐれにさへなりにけるかな

聞き知る人もなしや。

昔、男わづらひて、心ち死ぬべくおぼえければ、つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

（伊勢物語）

伊勢物語　二卷。在五中將物語ともいふ。作者不詳。

七　宇多の松原

紀貫之

男もすといふ日記といふものを、女もして見むとてするなり。それの年の、師走の二十日あまり一日の日の、戌の時に門出す。そのよしいさゝかものに書きつく。

ある人、縣の四とせ五とせ果てて、例のことども皆しをへて、解由などとりて、住む館より出でて、舟に乘るべき處へ渡る。かれこれ知る知らぬ送りす。年ごろよく具しつる人々なむ、別れがたく思ひて、その日しきりにとかくしつゝのゝしるうちに夜更けぬ。

八日。　さはることありて、なほ同じ所なり。こよひ月は海にぞ入る。是を見て、業平のきみの「山の端にげて入れずもあらなむ」といふ歌なむおぼゆる。もし海べにてよまましかば、「波たちさへて入れずもあらなむ」ともよみてましや。今この歌を思ひいでて、或

紀貫之　歌人。古今集撰者。御書所預・大内記・土佐守・玄蕃頭・木工權頭に歷任。元慶九年（一六〇六）歿、年六十五。

それの年　朱雀天皇の承平四年（一五九四）

住む館　國守の館。土佐の國府は長岡郡にあり。

八日　承平五年正月八日。

人のよめりける。

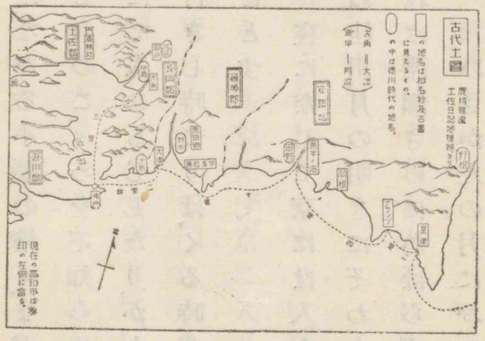
照る月の流るる見れば天の川出づるみなとは海にざりける

とや。

九日のつとめて、大湊より那波の泊を追はむとて漕出でけり。これかれ互に、國の境のうちはとて、見送りに來る人あまたが中に、藤原言實・橘季衡・長谷部行政等なむ、御館より出で給ひし日より、こゝかしこにおひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人人の深き志はこの海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれて行く。これを見送らむとてぞ、この人どもはおひ來ける。かくて漕ぎゆくまにまに、海のほとりに留まれる人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれば、この歌をひとりごとにしてやみぬ。

大湊 高知縣長岡郡。
那波 高知縣安藝郡。

おもひやる心は海をわたれどもふみしなければ知らずやあるらむ



かくて宇多の松原をゆき過ぐ。その松の數いくそばく、幾千年經たりと知らず。もと毎に浪うちよせ、枝毎に鶴ぞとびかふ。おもしろしと見るに堪へずして、舟人のよめる歌、

みわたせば松のうれ毎にすむ鶴は千代のどちとぞおもふべらなる

とや。この歌は、處を見るにえまさらず。かくあるを見つゝ漕ぎゆくまにまに、山も海も皆暮れ、夜更けて西東も見えずして、天氣の事楫取りの心に任せつ。男もならはぬはいとも心細し。まして女は舟底に頭

宇多の松原 高知縣香美郡岸本村宇田。

十六日　承平五年二月。
山崎　京都府乙訓郡大山崎村。
鳥坂　京都府乙訓郡向日町の西。
桂川　大堰川の下流。
飛鳥川　奈良縣高市郡稻淵山に發し、飛鳥村を經て北流、大和川に合す。世のなかは何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬となる（古今集）

をつきあてて、音をのみぞ泣く。

十六日。けふの夕つかた、京へのぼるついでに見れば、山崎のたなる小櫃の繪も、まがりのほらのかたもかはらざりけり。「賣る人のこゝろをぞ知らぬ」とぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人あるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。たちて行きし時よりは、くる時ぞ人はとかくありける。これにもかへりごとす。

夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。桂川、月の明きにぞわたる。人々のいはく、「この川飛鳥川にあらねば、淵瀬さらにかはらざりけり」といひて、あるひとのよめる歌、

ひさかたの月におひたる桂川そこなる影もかはらざりけり

又或人のいへる、

あまぐものはるかなりつるかつら川袖をひでてもわたりぬるかな

又或人よめり。

かつら川わが心にも通はねどおなじ深さにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞおほかる。夜ふけて、ところところも見えず。京に入りたちてうれし。

家にいたりて門に入るに、月あかければいとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれやぶれたる。家をあづけたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみてあづかれるなり。さるは、たよりごとに物も絶えず得させたり。こよひかゝることと、こわだかにものもいはせず。いとはつらく見ゆれど、こゝろざしはせむとす。

土佐日記　一巻。紀貫之が任地土佐國より京都に歸る時の日記。

さて池めいてくぼまり、水づける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年やすぎにけむ、片枝はなくなりにけり。今おひたるぞまじれる。おほかたみな荒れにたれば、あはれとぞ人人いふ。思ひ出でぬことなく思ひ戀しきがうちに、この家にて生れし女子のもろともにかへらねば、いかゞはかなしき。船人も皆子いだきてのゝしる。かゝるうちに、なほかなしみに堪へずして、ひそかに心しれる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものをわがやどに小松のあるを見るがかなしさ

とぞいへる。猶あかずやあらむ、又かくなむ。

見し人を松の千とせに見ましかば遠くかなしきわかれせましや

忘れがたくくちをしきこと多かれど、えつくさず。（土佐日記）

紫式部　藤原爲時の女。藤原宣孝に嫁す。宣孝の死後上東門院に仕ふ。

須磨　兵庫縣神戸市の地。

行平中納言　平城天皇の皇子阿保親王の第二子。弟業平と共に在原の姓を賜はる。

關吹き越ゆる　「旅人は袂すずしくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風」

八　須磨の秋

紫式部

須磨には、いとゞ心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の「關吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、夜々は實にいと近く聞えて、又無く哀れなるものはかゝる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、打休み渡れるに、一人目を覺して、枕を欹てて四方の嵐を聞き給ふに、波たゞ此處もとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに枕浮く許りになりにけり。琴を少し搔鳴らし給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、彈きさし給ひて、

戀ひ佗びて泣く音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらむ

と謠ひ給へるに、人々驚きて、めでたう覺ゆるに、忍ばれて、あいなう起き居つゝ、鼻を忍びやかにかみ渡す。實に如何に思ふらむ、我

千枝・常則 當時の繪師。傳不詳。

が身一つにより、親兄弟片時立ち離れ難く、程に付けつゝ思ふらむ家を別れて、斯く惑ひ合へると思すに、いみじくて、いと斯く思ひ沈む樣を、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれと戯言打宣ひ紛らはし、つれづれなる儘に、色々の紙を繼ぎつゝ手習をし給ひ、珍しき樣なる唐の綾などに、樣々の繪どもを書きすさび給へる屏風の面どもなど、いとめでたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有樣を、遙かに思し遣りしを、御目に近くては、實に及ばぬ磯のたゝずまひ、二なく書き集め給へり。「此の頃の上手にすめる千枝・常則など召して、作繪仕う奉らせばや。」と心許ながりあへり。

懷かしうめでたき御有樣に世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕う奉るを嬉しき事にて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前栽の花いろいろ咲き亂れ、面白き夕暮に、海見やらるゝ廊に出て給ひて、佇み給ふ御樣のゆゝしう清らなるに、所柄はましてこの世の物と

良清 播磨守の子、源良清。源氏の從者。

民部大輔 名は惟光。源氏

も見え給はず。白き綾のなよゝかなる、紫苑色など奉りて、濃やかなる御直衣、帶しどけ無く打亂れ給へる御樣にて、「釋迦牟尼佛弟子」と名告りて緩かに讀み給へる、また世に知らず聞ゆ。沖より舟どもの謠ひのゝしりて漕ぎ行くなども聞ゆ。仄かに、たゞ小さき鳥の浮かべると見やらるゝも心細げなるに、雁の連ねて鳴く聲、楫の音に紛へるを打眺め給ひて、御涙の零るゝを搔拂ひ給へる御手つき、黑木の御數珠に映え給へるは、故鄕戀しき人々の心、皆慰みにけり。

初雁はこひしき人のつらなれや旅のそら飛ぶ聲のかなしき

と宣へば、良清、

かきつらね昔の事ぞおもほゆる雁はその世の友ならねども

の從者。

前の右近丞 伊豫介の子。源氏の從者。

民部大輔、

心から常世を捨てて鳴く雁を雲の餘所にもおもひける

かな

前の右近丞、

常世出でて旅の空なる雁がねも列におくれぬ程ぞなぐ

さむ

「友惑はしては如何に侍らまし。」と言ふ。親の常陸になりて下りしにも誘はれて、參れるなりけり。下には思ひ碎くべかめれど、誇りかにもてなして、つれなき樣にしありく。

月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び戀しく、月の顏のみまもられ給ふ。「二千里外古人心」と誦じ給へる、例の涙も止められず。「夜更け侍りぬ」と聞ゆれど、なほ入り給はず。（「源氏物語」による）

二千里外 三五夜中新月の色、二千里外故人心。（白樂天）**源氏物語** 五十四帖。紫式部の作。

清少納言 清原元輔の女。一條天皇の皇后定子に仕ふ。

九 春は曙

清少納言

春は曙。やうやうしろくなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。

秋は夕ぐれ。夕日花やかにさして、山のはいと近くなりたるに、烏の寢どころへゆくとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まして雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風のおと蟲のねなど、いとあはれなり。

冬はつとめて。雪のふりたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭

櫃・火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

にくきもの　いそぐ事ある折に、長言するまらうど。あなづらはしき人ならば、「のちに」などいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯に髪の入りてすられたる。又墨の中に石こもりて、きしきしときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、験者もとむるに、例ある所にはあらでほかにある、尋ねありくほどに、待遠に久しきを、辛うじて待ちつけて、喜びながら加持せさするに、この頃物のけに困じにけるにや、居るまゝにすなはちねぶり聲になりたる、いとにくし。火桶・炭櫃などに、手の裏うち返し、皺おしのべなどしてあぶり居る者。いつかは若やかなる人などのさはしたりし。老いばみうたてあるものこそ、火桶のはたに足をさへもたげて、物いふまゝにおしすりなどもすらめ。

さやうの者は、人のもとに來て、居むとする所を、まづ扇して塵拂ひすてて、居もさだまらずひろめきて、狩衣の前、しもざまにまくり入れても居るかし。かゝる事は、いひがひなき者のきはにやと思へど、少しよろしき者の、式部の大夫・駿河の前司などいひしが、させしなり。

物うらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らせぬをば怨じそしり、又、わづかに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうにこと人にも語りしらべいふも、いとにくし。物聞かむと思ふほどに泣くちご。鳥の集りて飛びちがひ鳴きたる。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて顔のもとに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ。

物語などするに、さし出でてわれひとりさいまくる者、すべて

さしいでは、わらはも大人も、いとにくし。昔物語などするに、わが知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどする、いとにくし。鼠のはしりありく、いとにくし。あからさまに來たる兒ども、わらはべをらうたがりて、をかしき物など取らするにならひて、常に來て居入りて、調度やうち散しぬる、にくし。

うつくしきもの　ふりにかきたるちごの顏。雀の子のねずなきするにをどりくる。又、べにつけて居ゑたれば、親雀の蟲などもて來てくゝむる、いとらうたし。三つばかりなるちごの、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたるちごの、目に髮のおほひたるを搔きは遣らで、うちかたぶきて物など見る、いとうつくし。たすきがけに

ゆひたる腰のかみの、白うをかしげなるも、見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちごの、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寢入りたるもらうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいとちひさきを、池より取りあげて見る。葵のちひさきも、いとうつくし。何も何もちひさき物は、いとうつくし。いみじう肥えたるちごの二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍のうすものなど、衣長くて、たすきあげたるが這ひ出でくるも、いとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲をさなげにて文よみたる、いとうつくし。鷄の雛の足高に、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよひよとかしがましく鳴きて、人のしりに立ちてありくも、また親のもとにつれだちありく、見るもうつくし。かりの子。舍利の壺。瞿麥の花。（枕草子）

枕草子　異本多くして卷數一定せず。清少納言の隨筆。

時平　關白藤原基經の子。延喜九年（一五六九）歿、年三十九。

菅原のおとゞ　菅原道眞。是善の子。延喜三年（一五六三）謫地に歿、年五十九。

昌泰　醍醐天皇の最初の年號。その四年七月延喜と改元（一五六一）

一〇　菅公の左遷

醍醐の帝の御時、時平のおとゞ左大臣の位にて、年いと若うておはします。菅原のおとゞは右大臣の位にておはします。その折、みかど御歳いと若くおはします。左右の大臣に、世の政行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり、左大臣御年二十八九ばかりなり。右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしけむ。共に世の政をせしめ給ひし程に、右大臣はざえ世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかしこくおはします。左大臣は御歳も若く、ざえもことの外に劣り給へるによりて、右大臣の御おぼえことの外におはしましたるに、左大臣安からず思したるほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御爲によからぬこと出で來て、昌泰四年正月二十五日、太宰權帥になし奉りて流され給ふ。

亭子の帝　宇多天皇。

この大臣、子ども數多おはせしに、女君たちは婿取し、男君だちは皆程々につけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君、女君たち、慕ひ泣きておはしければ、小さきはあへなむと、公も許さしめ給ひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。帝の御掟極めて生憎におはしませば、この御子どもを、同じかたにだに遣はさざりけり。かたがたにいと悲しく思し召して、御前の梅の花を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ

又、亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れ行くわれは水屑になりはてぬ君じがらみとなりてとどめよ

なき事によりて、かく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やが

て山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくゆくもかくるるまでにかへりみしはや

また播磨の國におはしましつきて、明石のうまやといふ處に、御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らせ給へる詩、いと哀し。

驛長無驚時變改　一榮一落是春秋

かくて筑紫におはしまし着きて、あはれに心細く思さるゝ夕べ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶりなげきよりこそ燃えはじめけれ

また、雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山崎　今の京都府乙訓郡大山崎村山崎。

明石　兵庫縣明石市。

山わかれ飛びゆく雲の歸り來るかげ見るときぞなほたのまるる

さりともと、世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたたへる水の底までもきよきこころは月ぞてらさむ

これ、いとかしこくあそばしたりかしげに月日こそはてらし給はめとこそはあめれ。

筑紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居所は遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして、作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色　觀音寺只聽鐘聲

これは、文集の白居易が「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看」とい

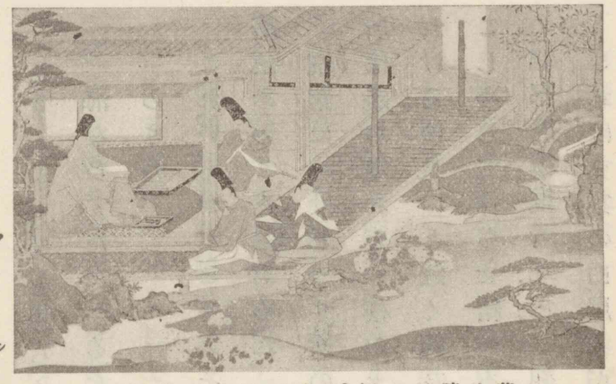
大貳の居所　太宰府の官宅。時の太宰大貳は藤原興範。

觀音寺　正しくは觀世音寺。太宰府の東二百米程の所にありし眞言宗の寺。夙く荒廢に歸す。

文集　白氏文

集。七十一卷。白居易の詩文集。

白居易。字は樂天、唐の詩人。官、刑部尚書に至る。



菅公謫居の圖（松崎天神緣起繪卷）

ふ詩にもまさゞまに作らしめ給へりとこそ、昔の博士どもは申しけれ。

またかの筑紫にて九月十日、菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月の今宵、內裏にて菊の宴ありしに、この大臣の作らしめ給へりける詩を、御門かしこく感じ給ひて、御衣を給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞその折思しめしいでて、作らせ給ひける。

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

後集　菅家後集。一卷。菅家文草の續篇。

北野の宮　官幣中社。京都の西北隅北野にあり。

安樂寺　福岡縣筑紫郡太宰府町。

大鏡　八卷。世繼物語ともいふ。文德天皇より後一條天皇に至る百七十餘年間の歷史物語。

この詩いと畏く、人々感じ申されき。このことども、只散り散りなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを、書きて一卷とせしめ給ひて、後集と名づけられたり。また折々の歌を書きおかせ給へりける、自ら世に散りきこえしなり。

また雨の降る日、うちながめ給ひて、

あめの下かわける程のなければや着てしぬれぎぬひる
よしもなき

やがて、かしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野にそこらの松をおほし給ひて、渡り住み給ふをこそは、唯今の北野の宮と申して、あら人神におはしますめれば、おほやけも行幸せしめ給ふ。いとかしこくあがめ奉り給ふめり。筑紫のおはしましし所は安樂寺といひて、おほやけより別當・所司などなさせ給ひて、いとやむごとなし。（大鏡）

法成寺 京都の東北隅、京極土御門に道長の建てし寺。

攝政殿 藤原頼通。道長の長子、世に宇治關白と稱す。承保元年（一七三四）歿、年八十三。

殿の御前 藤原道長。

二　法成寺の造營

今は御心地例ざまになりはてさせ給ひぬれば、御堂の事思し急がせ給ふ。攝政殿、國々まで、さるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂のことを先に仕うまつるべき仰言のたまふ。殿の御前も、「この度生きたるは別ことならず、この願の協ふべきなめり。」とのたまはせて、他事なくたゞ御堂におはします。

方四町をこめて、大垣にして瓦葺きたり。さまざまに思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心もとなく、日の暮るゝも口惜しうおぼされて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池を掘るべきやう、木を栽ゑなべさせ、さるべき御堂御堂、方々さまざま造りつゞけ給へり。御佛はなべての樣にやはおはします。丈六の金色の佛を數も知らず造りなべ、そなたをば北南と馬道をあけて、道をと

とのへ造らせ給ひて、廊・渡殿かず多く作らせなむと思し給ふに、鷄の鳴くも久しくおぼされ、宵曉の御行も懈らず、やすきいも大殿どもらず、たゞこの御堂のことのみ深く御心にしませ給へり。

日々に多くの人々參り罷で立ちこむ。さるべき殿ばらを始め奉りて、宮々の御封・御莊どもより、一日に五六百人、千人の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば賢きことに思したち、國々の守ども、地子・官物は遲なはれども、只今はこの御堂の夫役・材木・檜皮・瓦など多く參らすることを、我も我もと競ひ仕うまつる。大方近きも遠きも參りこみて、品々方々、あたりあたりに仕うまつる。

或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかり並み居て仕うまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のぼり居て、大きなる木どもには太き綱をつけて、聲を合はせてえさまさと引き上げさわぐ。

御堂の内を見れば、佛の御座造りかゞやかす。板敷を見れば、木賊・椋の葉などして、四五十人手ごとに並み居て磨き拭ふ。檜皮葺・壁塗・瓦作なども數をつくしたり。又年老いたる翁などの、三尺ばかりの石を心に任せて切りとゝのふるもあり。池を掘るとて四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼり立ち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて叫びのゝしり引きもてのぼる。鴨河の方を見れば、筏といふものに榑・材木を入れて、棹さして心地よげに歌ひのゝしりてもてのぼるめり。大津・梅津の心地するも、「西は東」といふことはこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來れど沈まず。すべていろいろ樣々いひ盡くし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍造りけむもかくやありけむと見ゆるを、冬の室、夏の風、各ことごとなり。

大津 滋賀縣大津市。
梅津 京都市右京區。
須達長者 釋迦在世當時の舍衛國の富者。波斯匿王の大臣。
祇園精舍 須達長者が建てて佛に奉りし中印度の寺。
長谷寺 奈良縣磯城郡初瀬町にあり。文武・聖武二帝の御願によりて建てられし寺。
天王寺 聖德太子が大阪に建てられし四天王寺。
榮華物語 四十卷。主として藤原氏の榮華を記せし歷史物語。作者につきては諸說一定せず。

かゝる御勢にそへて、入道せさせ給ひて後は、いとゞ勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有樣かなと、近う見奉る人はたふとみ、遠う見奉る人は遙かに拜み參らす。今はこの御堂のあたりの木草ともならむと思へる人のみ多かり。そなたざまに赴けば、海の浪も柔かに立ちて、この御堂の物をもて運ばせ、河も水澄みて、快く浮かべもて參ると見ゆ。猶なべてこの世の事とは見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして寐たりける夢に、大きにいかめしき男の出で來て、「何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興隆の爲に生れ給へるなり。」とぞ見えさせ給ひける。又天王寺の聖德太子の御日記には、「王城より東に佛法弘めむ人を我と知れ。」とこそは書きおかせ給ふなれ。いづれにてもおろかならぬ御事なり。（榮華物語）

尾上柴舟　名は八郎。文學博士。東京女子高等師範學校教授。

古今和歌集　二十卷。醍醐天皇の延喜五年四月、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑等勅を奉じて撰す。

躬恒　凡河内躬恒。延喜十一年、淡路權守に任ぜらる。

忠岑　壬生忠岑。藤原定國の隨身。攝津大目となる。

友則　紀友則。貫之の姪。土佐掾となり、後小内記より大内記に轉じ六位を授けらる。

寛弘　一條天皇の年號（一六六四―一六七二）

金葉和歌集　十卷。源俊頼が白河法皇の院宣を受けて撰進したるもの。

俊頼　源俊頼。堀河・鳥羽・崇德の三朝に仕へ、左近衛少將兼木工權頭左京大夫たり。歌學上の著に無名抄・俊頼口傳等あり。

基俊　藤原基俊。官は左衛門佐に至る。歌學上の著に悅目抄あり。

顯輔　藤原顯輔。皇后宮亮に至る。崇德上皇の詔を奉じて詞花和歌集を撰す。

俊成　藤原俊成。後白河天皇の勅を奉じ

一三　古今より新古今へ

尾上柴舟

平安朝時代の歌風を完成したのは延喜の頃で、古今和歌集を以て代表せらるべき貫之・躬恒・友則・忠岑等の活躍した時代である。その歌風は舊套を脱し、新旗幟を樹立したもので、技巧と情緒とを巧みに結合した抒情詩である。こゝに形式も思想の範圍も大抵一定して、以後はこの外に出るものはなかつたのである。

その後、寛弘の頃に至つて漸く新傾向が起り、從來の抒情詩的傾向に敍景的趣味を加へ、更に又排技巧の傾向を生じたが、なほ前期の權威は盛んなもので、容易にその範疇を脱することが出來なかつた。とはいへ新進の氣は到底制せられるものではなく、漸次に古典的から現代的に移らうとして、こゝに一種の新派を生じた。金葉和歌集を撰んだ俊頼がその中心である。この新派は、

舊套中にありながら、俗語をも用ひて一種の新味を加へたものであるが、古典的な反對黨は基俊を代表としてこれに抗爭した。この間に又折衷派とも云ふべき顯輔の一派も生れて、歌界は餘程複雜になつた。併し要するに過去を理想とするものと現代を主とするものとの爭であつた。亂が極まれば英雄が出る。時代は遂に俊成を生んだ。俊成は基俊に學び、しかも俊頼を慕ひ、又顯輔の傾向をも考へたのである。俊成の撰進した千載和歌集には、この三派併合の結果に成つた所の典雅があり、清新があり、殊に洗練せられた趣味の多い語句に富んでゐた。

この傾向はやがて定家が覇を唱へた鎌倉時代の初期に於て、技巧的な含蓄の深い歌となつて現れるに至つた。これを選集したのが新古今和歌集である。政權は既に武士に歸したとはいへ、それが爲に堂上は閑暇であつたので、公卿を中心とした歌道は

て千載和歌集を撰す。元久元年（一八六四）歿、年九十一。

千載和歌集　二十卷。文治三年九月、藤原俊成撰進す

定家　藤原定家。俊成の子。新古今和歌集・新勅撰和歌集の撰者。仁治二年（一九〇一）歿、年八十。

新古今和歌集　二十卷。建仁元年十一月後鳥羽上皇の詔を承けて、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・僧寂蓮等が元久二年撰進せるもの。

愈、その粹を發揮し、こゝに新古今和歌集は古今を綜合し千載に光被するの意氣を以て撰ばれ、歌道の發達を極めたのみならず、多大の影響を後世にまで及ぼしたのである。從來歌人に經典と崇められてゐた古今和歌集に新の字を冠せしめたのは、その撰者等の意氣を窺ふに足るものではないか。

平安朝時代ほど季節の變化を歌の題材とした時は無い。これは畢竟當時の歌人である公卿たちの生活に原因するのである。これらの歌人は殆ど都以外に足を踏出すことがなく、宮仕と遊樂と物詣とのみに日を過し月を送つて居たのであるから、季節とそれに伴なふ變化とが大事件となつて目に映つたのである。その季節に應じて咲き、散り、啼き、歌ふ花木・禽鳥がまた驚喜と悲嘆との好材料であつた。春の詩材としては鶯・梅・櫻を主とし、若菜・霞・柳・藤・山吹などの優美纖麗なものが選ばれた。秋には風の音・蟲

の聲・月の色・露の光・星・女郎花・紅葉・菊などの哀感を寄せるのに都合のよい纖細巧麗なものが主となつた。鐵を鎔かさんばかりの暑さ、篠を束ぬる夕立などは、當時の人の詩材とするには餘りに峻烈であつた。冬は引籠りの候で、見るものの少い時節である。杜宇と雪とが夏と冬とに於て詩人の感興を惹いた殆ど全部であつたのである。

勿論季節に拘らぬものもあるが、概して前代にあつた所の材料の中で纖細なもののみを取り、殊に美しい麗しい方面を取つて詠じたのであるから、題材の範圍は非常に縮小し、貧弱とならざるを得なかつたが、この題材の範圍はその後永く斯道に嚴守せられたのであつた。併しその一つ一つの觀察に於ては、隨分微に入り細を穿つてゐた。

同じ道を何處までも進む。これに倦怠せぬ人は無いであらう。

必ず何か違つたものを求めて止まない。平安末期には既に自然の美の眞解と、漢詩の影響と、單調を厭ふ心と、繪畫の影響とが錯綜交雜して多くの客觀詩を出すに至つたのである。自然の美を認めてそれに深く思ひ入る。こゝに感ずるものは自分の身の幸不幸ではない、窮通ではない。奥の分らぬ味はひである。如何に名づくべきか、はた如何にして極むべきか、自分には分らない。たゞ語の幽趣微韻によつてのみその幾分を表はし得るのである。その情態を直寫してこゝに客觀詩は生じ、それに對する感想を披瀝してこゝに主觀詩は生じたのである。

鎌倉時代の繪畫は平安朝時代のそれに比して、單に山川草木を寫すのみではなく、その中に含まれてゐるものを寫す所にまで進んでゐた。これに對しこれに接して居れば、その得る所のものは決して淺薄な感想ではない。必ず深い何ものかがある。當時

の繪はその形體・傳彩から客觀詩を起したと共に、幽遠の趣致をも起したのである。

更にこれらの他に當時の人心に深く浸染したものは、榮枯盛衰が眼前に車輪の如く迅速に廻轉したことである。盛者必衰諸行無常が事實として現示せられた當時の人々は、また別種の感觸を起さざるを得ない。幾種の新宗教が唱道せられ、多くの渴仰者が忽ちに出來たことは、當時の人々が宗教希求の念の如何に熱烈であつたかを說明してゐる。その心を心とした當時の歌は、たゞ表面だけ宗教者めかして、無常らしいことを云ひ、悟了したらしいことを云ふ歌とは自ら選を異にせねばならぬ。その全體を通じて、美しい中に暗い趣、深い味はひの見えるのは自然である。乃ち幽玄の趣致は又この佛教の弘通よりも現れたのである。

而してこの幽玄の趣致は源を人の思想と感情との深遠な處

六歌仙　在原業平・僧正遍昭・喜撰法師・大伴黒主・文屋康秀・小野小町をいふ。

に發するのであるから、その深遠の度が進むと共に普通の辭句では發表し得ないこととなる。乃ち從來の發表の仕方では靴を隔てて痒きを搔くが如く、到底十分に述べ盡くすことが出來なくなるのである。こゝに於て從來の制約を破り、更に新しい表現法を用ひて、極めて大膽に自己の思想感情を發表するものが現れた。此等の歌人の態度こそ實に敬服すべきものである。

平安朝時代に新旗幟を樹立した功に於て、典型を千載に殘した功に於て、吾人は古今和歌集を尊び、その撰者や六歌仙を始め當時の歌人等を重んずる。それと共に又、紛亂の後を受けてこれを平定し、更に新しい典型を作り、歌をして至上の發達をなさしめた意氣に於て、新古今和歌集を崇め、その撰者を始め當時の歌人を尊敬して止まないのである。（「古今と新古今」による）

允賴　藤原顯賴の子。權大納言正二位に進み、剃髮して光然と稱す。高倉天皇の承安三年（一八三三）歿、年五十。

同じき十九日　二條天皇平治元年（一八一九）十二月。

信賴　藤原忠隆の子。光賴の姪。後白河上皇の寵を蒙る。平治の亂、事敗れて斬らる。年二十七。

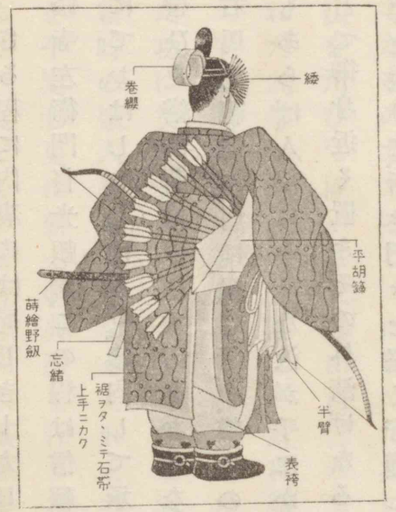
一三　光賴卿參內

さる程に、內裏には同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衞門督光賴卿、この程は信賴卿の振舞過分なりとて、不參にておはしましけるが、「參內して承らん。」とて、殊にあざやかに束帶ひき繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、傅子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雜色の裝束にいでたゝせ、「自然の事もあらば、人手にかくな、汝が手にかけて、光賴が首をば急ぎ取れ。」とて、御身近く置き、その外淸げなる雜色四五人めし具して、大軍陣を張りて、所々門々を堅く守護しけるを事ともせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。

紫宸殿の後を經て殿上を廻りて見給へば、信賴卿一座して、そ

裏の正殿、一名南殿。**殿上**　清涼殿の殿上間。**長方**　藤原顯長の子。光頼と從兄弟。

の座の上蔦たち皆下にぞ着かれたる。光頼卿「こは不思議のことかな。人はいかに振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には着くまじきものを。」と思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそ、世にしどけなう見え候へ。」と色代して、しづしづと歩み、信頼卿の上にむずと着き給ふ。光頼卿は信頼卿の爲には母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿あなあさましと見給ふに、光



武官束帯の圖

十日　十二月十日。信頼が事を起しし翌日。

頼卿下襲の尻ひき直し、衣紋繕ひ、笏とり直し、氣色して、「今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらんものをば死罪に行はるべしとやらん承りて、參内するところなり。抑、何事の御諚ぞ。」と問ひけれども、信頼卿の言も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿つい立ちて、「惡しう參つて候ひけり。」とて、しづしづと歩み出でられけり。

文官束帯の圖

庭上に充ち滿ちたる兵ども、これを見奉りて、「あはれこの殿は大剛の人かな。去んぬる十日より、多くの人出仕し給ひつれども、

頼光 源滿仲の子。驍勇を以て聞ゆ。治安元年（一六八一）歿。

頼信 頼光の弟。永承三年（一七〇八）歿。

小部 清涼殿の上の戸の方にある小窓。

見參の板 鳴板ともいふ。清涼殿弘廂の南端の板敷。

荒海障子 清涼殿の弘廂の北にある布障子。

惟方 光頼の弟。初め信頼に黨せしも、後、經宗と計り二條帝を奉じて大内を脱す。

先日 十二月十四日。

少納言入道 藤原通憲。入道信西。平治の亂に信頼の命によりて斬首せらる。

神樂岡 京都市上京區吉田町の東。

勸修寺内大臣 藤原高藤。

三條右大臣 藤原定方。

延喜 醍醐天皇の御代の年號。（一五六一！一五八三）

右衞門督殿の座上に着く人、一人もおはしまさざりつるに、仕出したる事よ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれこの人を大將として合戰せば、いかばかりか頼もしからん。」と申せば、傍なるもの、「昔、頼光・頼信とて、源氏の名將おはしましき。その頼光を打返して光頼と名のりたまへば、これも剛にましますぞかし。」といへば、又傍より、「などその頼信を打返して信頼と附き給ふ右衞門督殿は、あれ程臆病にはおはしますぞ。」といへば、「壁に耳、天に口。」といふことあり。恐ろし、恐ろし。聞かじ。」といひながら皆忍び笑に笑ひけり。

光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小部の前、見參の板高らかに踏鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしけるを招き寄せ宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職、然るべき人どもなり。その内に入らんこと甚だ面目なるべし。さても、先日右衞門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に神樂岡へ向はれけることはいかに。以ての外然るべからざる振舞かな。近衞大將・檢非違使別當は他に殊なる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乗り給ふ事、先蹤もいまだ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならず。」と宣へば、別當、「それは天氣にて候ひしかば。」とて赤面せられたり。

光頼卿重ねて、「こはいかに勅諚なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖、勸修寺内大臣・三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣又十一代、承り行ふことは、皆これ德政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄には

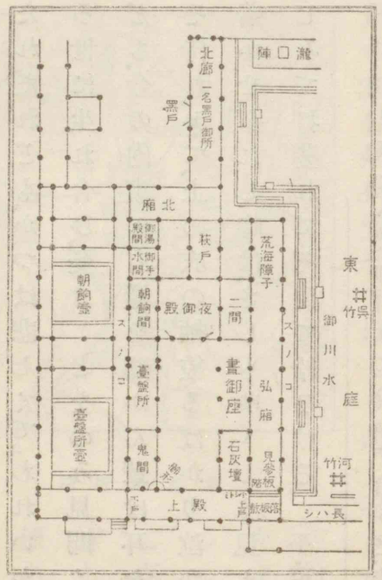
清盛 十二月四日熊野參詣に出發。
切目 和歌山縣日高郡切目村。
主上 二條天皇。
上皇 後白河上皇。
黑戸御所 清涼殿の北方にあり。
一本御書所 建春門内、侍從所の南にあり。世間よりの獻本を納められしところ
内侍所 神鏡

あらざれども、偏に有道の臣に伴なひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝ程のことはなかりしに、御邊始めて暴惡の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。大貳清盛は、熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳せのぼるなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人等待ちうけて大勢にてあなる。信頼卿が語らふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をやめぐらすべき。もし又火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかに況や、君臣ともに自然の事もあらば天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申し合はするとこそ聞ゆれ。相構へて相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに、思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。「黑戸御所に。」「上皇は。」「一本御書

溫明殿 紫宸殿の東にあり。
夜の御殿 清涼殿の中央にあり。
朝餉 主上の御食事の所。夜の御殿の西方にあり。
櫛形の穴 清涼殿の御(オンモヤ)屋の南壁と東の間との中間の柱を挾みて設けられたる櫛形をなせる窓。櫛形窓。

所に。」「内侍所は。」「溫明殿に。」「劍璽は何處に。」「夜の御殿に。」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

又「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、「それには右衛門督住み候へば、その方ざまの女房などぞかげろひ候らん。」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、「世の中は今はかくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黑戸御所に遷しまゐらせたり。末代なれども、さすが日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神・正八幡宮は王法をいかゞ守り給ひぬるぞ。異



清涼殿の圖

許由 箕山の隱士。帝堯の國を讓らんといへるを聞き、耳汚れたりとて、潁川の水に耳を洗ひたりといふ。**平治物語** 三卷。作者不詳。

國にはかやうの例ありと雖も、我が朝には未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろのろしげに憚る所なく口說き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よに凄まじげにて立たれたれども、かつは悲しくて、「われいかなる宿業に依つてかゝる世に生れ合ひ、憂きことをのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の內裏の有樣を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信賴卿の座上に着かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出で給ひける。（平治物語）

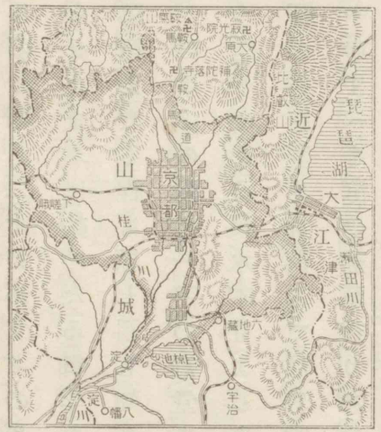
黑戶は小松御門位につかせ給うて、昔たゞ人におはしまし
し時、まさな事せさせ給ひしを忘れ給はで、常にいとなませ
給ひける間なり。御薪にすゝけたれば、黑戶といふとぞ。

（徒然草）

淺皇 後白河法皇。建禮門院の御舅に當らせらる。**文治二年**（一八四六）後鳥羽天皇の御代。**建禮門院** 高倉天皇の中宮。平清盛の女德子。安德天皇の御生母。**大原** 京都府愛宕郡の山村。**北祭** 賀茂の祭。四月の中の酉の日。今は五月十五日。**清原深養父** 清少納言の祖父。歌人。**補陀落寺** 京都府愛宕郡靜原にありし寺。**小野皇太后** 關白藤原敎道

一四 大原御幸

かゝりし程に、法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居御覽ぜまほしう思し召されけれども、二月・彌生のほどは嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつらゝもうち解けず。かくて春過ぎ夏立つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奧へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人人には公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通りの御幸なりければ、かの清原深養父が補陀落寺、小野皇太后宮の舊跡叡



京都附近圖

の女歌子。後冷泉帝の皇后出家して小野に住まる。

寂光院 大原村大字草生。天台宗延暦寺の別所。現在尼寺なり。

甍破れて 出所不明。

覽あつて、それより御輿にぞ召されける。遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜しまるる。頃は卯月二十日あまりの事なれば、夏草の茂みが末をわけ入らせたまふに、始めたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られてあはれなり。

西の山の麓に一宇の御堂ありず。なはち寂光院これなり。ふるう造りなせる泉水・木立、よしあるさまの處なり。「甍破れては霧不斷の香を焚き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ。」とも、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉交りの遲櫻、はつ花よりも珍しく、岸の山吹さき亂れ、八重立つ雲のたえ間より、山郭公の一聲も、君のみゆきを待ちがほなり。法皇これを叡覽あつて、かうぞあそばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて波の花こそさかりなりけれ

舊りにける岩の絶間より落ち來る水の音さへ、ゆゑびよしある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及び難し。さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦、朝顏はひかゝり、しのぶ交りの忘れ草、瓢簞屢空し、草顏淵が巷にしげく、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕す。」ともいひつべし。杉の葺き目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野べ、いさゝ小笹に風さわぎ、世に立たぬ身のならひとて、うきふし茂き竹柱、都の方の言づては、間遠に結へるませ垣や、わづかに言問ふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら・青つゞら、くる人稀なる處なり。

瓢簞屢空草滋ニ顏淵之巷一藜藿深鎖雨濕ニ原憲之樞一（橘直幹の申文）

五戒 一に不殺生、二に不偸盗、三に不邪婬、四に不妄語、五に不飲酒。
十善 不殺生・不偸盗・不邪婬・不妄語・不悪口・不両舌・不綺語・不貪慾・不瞋恚・不邪見。
捨身の行 捨身他生必生ニ浄國。（觀無量壽經）

法皇「人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申すものもなし。やゝあつて老い衰へたる尼一人参りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この上の山へ、花つみに入らせ給ひて候。」と申す。「さこそ世を厭ふ御習とはいひながら、さやうの事に仕へ奉る人もなきにや、御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒・十善の御果報盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜しませ給ひ候べき。」とぞ申しける。この尼の有様を御覽ずれば、身には絹・布のわきも見えぬ物を結びあつめてぞ着たりける。あの有様にてもかやうのことを申す不思議さよとおぼしめして、「抑汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、この尼さめざめと泣いて、しばしは御返事にも及ばず。やゝあつて涙をおさへて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申すもの

故少納言 俗名藤原通憲。前課參照。
紀伊の二位 紀伊守藤原範元の女朝子。藤原通憲の妻後白河法皇の御乳母。

にて候なり。母は紀伊の二位、さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せむ方なうこそ候へ。」とて、袖を顔に押當てて忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇、「げにも汝は阿波の内侍にてあるぞざんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、只夢とのみこそ思し召せ。」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿・殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、理にて申しけりとぞ、各感じあはれける。

さてかなたこなたを叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかかりつゝ、そともの小田の水越えて、鳴立つひまも見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子をひきあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊在します。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚並に先帝の御影を

來迎の三尊 阿彌陀如來。觀世音菩薩。勢至菩薩。
中尊 こゝにては阿彌陀如來。

普賢 菩薩の名。諸佛の理德を表はす。
善導和尚 唐代の名僧。他力信仰の確立者。
八軸の妙文 法華經八卷。
九帖の御書 善導大師の著なる觀經疏四帖、淨土法事讃二卷。觀念法門一卷、往生禮讃一卷、般舟讃一卷。これを合せて九帖の書といひ、又五部九卷といふ。
鳥飼の中納言 藤原盛國の子

かけ、八軸の妙文・九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に麻の御衣・紙の衾など懸けられたり。さしも本朝・漢土の妙なる類、數をつくしし綾羅錦繡の裝も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり見奉りしことども今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞られける。

やゝあつて、上の山より濃き墨染の衣着たりける尼二人、岩の崖路を傳ひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇「あれはいかなる者ぞ。」と仰せければ、老尼涙をおさへて、「花がたみ臂にかけ、岩つつじ取具して持たせ給ひて候は、女院にて渡らせ給ひ候。爪木に蕨折添へて持ちたるは、鳥飼の中納言維實が女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言の佐の局。」と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿・殿上人も皆袖をぞ

大納言の佐の局 大納言國綱の女、平重衡の室、輔子。

濡らされける。女院は、世を厭ふ御習といひながら、今かゝる有樣を見えまゐらせむずらむ恥かしさよ。消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき。宵々ごとの閼伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起きの袖の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせ給ひけむ、山へも返らせ給はず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましたる處に、內侍の尼參りつゝ、花筐をばたまはりけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。はやはや御見參ありて、還御なし參らせ候へ。」と申されければ、女院御涙をおさへて御庵室に入らせおはします。「一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思ひの外の御幸かな。」とて御見參ありけり。

やゝあつて女院涙をおさへて申させ給ひけるは、「今かゝる身

になり候ことは、一旦の歎申すに及び候はねども、後生菩提のためには悅とおぼえ候なり。いつの世にも忘れ難きは先帝の御面影忘れむとすれども忘られず、忍ばむとすれども忍ばれず。たゞ恩愛の道ほど悲しかりけることはなし。されば彼の御菩提のために、朝夕のつとめ怠ること候はず。これも然るべき善知識とおぼえ候。」と申させ給へば、法皇仰せなりけるは、「人間のあだなる習、今更驚くべきには候はねども、御有樣見參らせ候に、せん方なうこそ候へ。」とて御涙せきあへさせ給はず。

女院重ねて申させ給ひけるは、「我が身平相國の女として、天子の國母となりしかば、一天四海は皆掌のまゝなりき。されば拜禮の春のはじめより、色々の衣がへ、佛名の年の暮、攝籙以下の大臣・公卿にもてなされし有樣は、六慾・四禪の雲の上にて八萬の諸天に圍繞せられ候らむやうに、百官悉く仰がぬものや候ひし。清涼

平相國 太政大臣平清盛。

佛名 佛名會。往時禁中及び寺院にて、十二月十九日より三日間、三世諸佛の名號を稱へて罪業を懺悔せし法會。

六慾・四禪 佛教にいふ慾界中の六慾天と色界中の四禪天。共に人間以上の境界なり。

南殿 紫宸殿の別稱。

蓬萊 支那傳說にて渤海中にありといふ仙山。

壽永 安德天皇の御代の年號（一八四二—一八四五）

木曾義仲 源義賢の子。頼朝の從弟。

須磨 兵庫縣神戸市。

明石 兵庫縣明石市。

紫宸の床の上、玉の簾の內にもてなされ、春は南殿の櫻に心をとめて日を暮し、九夏三伏の暑き日は泉をむすびて心を慰め、秋は雲の上の月を獨り見む事を許されず、玄冬素雪の寒き夜は裾を重ねて暖かにす。長生不老の術を願ひ、蓬萊に不死の藥を尋ねても、たゞ久しからむ事を思へり。明けても暮れても樂しみ榮え候ひしこと、天上の果報もこれには過ぎじとこそ覺え候ひしか。さても壽永の秋の初、木曾義仲とかやに襲はれて、一門の人々、住み馴れし都をば雲居のよそに顧みて、故郷を燒野が原とうち詠め、古は名をのみ聞きし須磨より明石の浦づたひ、さすがに哀に覺えて、晝は漫々たる大海に浪路を分けて袖をぬらし、夜は洲崎の千鳥と共に泣きあかす。浦々、島々よしある處を見しかども、故郷の事をば忘られず。

さても筑前の國太宰府とかやに着いて、少し心を延べしかば、

維義 緒方三郎維義。大分縣大野郡緒方村に宅趾あり。

清經 平重盛の三男。壽永二年福岡縣企救郡柳が浦にて海に投じて死す。

鎭西 筑紫の稱。

餓鬼道 餓鬼の世界。餓鬼とは常に饑渴の苦を受くる一類の鬼。

室山 兵庫縣加東郡市場村の南、加古川に臨む山。

水島 岡山縣淺口郡柏崎村の海邊。

維義とかやに九國の內をも追出され、山野廣しと雖も立寄り休むべき處もなし。同じ秋の暮にもなりしかば、昔は九重の雲の上にて見し月を、八重の潮路に詠めつゝ、明し暮し候ひし程に、神無月の頃ほひ、清經の中將が『都をば源氏がために攻落され、鎭西をば維義がために追出さる。網にかゝれる魚の如し。いづくへ行かば遁るべきかは。ながらへ果つべき身にもあらず。』とて海に沈み候ひき。これこそ憂き事の始にて候ひしか。波の上にて日を暮し、船の中にて夜をあかす。貢物もなければ供御を備ふる事もなく、たまたま供御を備へむとすれども水なければ參らず。大海に浮かぶといへども潮なれば飲む事なし。これ又餓鬼道の苦しみとこそ覺え候ひしか。

かくて室山・水島二箇度の軍に勝ちしかば、一門の人々少し色直つて見え候ひし程に、攝津の國一ノ谷とかやに城郭を構へ、各直

一谷 兵庫縣神戸市須磨。

修羅 鬪爭を事とする一種の鬼神。常に帝釋と戰を交ふ。

帝釋 忉利天の主。

門司 福岡縣門司市。下關海峽の南岸にあり。

赤間 山口縣下關市のこと。下關海峽の北岸にあり。

壇浦 山口縣豐浦郡。下關海峽東口の北岸にあり。

二位尼 平清盛の妻。從二位時子。

衣・束帶を引替へて、鐵をのべて身にまとひ、明けても暮れても軍よばひの聲の絕ゆることもなかりしは、修羅の鬪諍、帝釋の爭もこれには過ぎじとこそ覺え候ひしか。一ノ谷を攻落されて後、親は子におくれ、妻は夫にわかる。沖に釣する舟をば敵の舟かと肝を消し、遠き松に白鷺の群れゐるを見ては、源氏の旗かと心を盡くす。かくて門司・赤間・壇ノ浦の軍に、既に今日を限りと見えしかば、二位の尼泣く泣く申し候ひしは、『此の世の中の有樣、今はかうと覺ゆるなり。今度の軍に男の命の生き殘らむことは、千萬が一もありがたし。たとひ又遠きゆかりは、おのづから生き殘ることありといふとも、妾が後生弔はむ事もありがたし。昔より女は殺さぬ習なれば、如何にもしてながらへて、主上の御菩提を弔ひ、われらが後生をも助け給へ。』と申し候ひしを、夢の心地して覺え候ひし程に、風忽ちに吹き、浮雲厚くたなびき、つはものどもの心を迷は

し、天運盡きて人の力にも及びがたし。

既にかうと見えしかば、二位の尼先帝を抱き參らせて舷に出でし時、あきれたる御有樣にて、『抑尼前、われをばいづちへ具して行かむとするぞ。』と仰せければ、二位の尼、涙をはらはらと流して、幼き君に向ひ參らせて、『君は未だ知し召され候はずや。前世の十善戒行の御力によつて、今萬乘の主とは生れさせ給へども、惡緣に引かれて、御運既に盡きさせ給ひ候ひぬ。まづ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮伏し拜ませおはしまし、その後西方淨土の來迎に預らむと誓はせおはしまして、御念佛候べし。この國は粟散邊土と申して、心憂き境にて候。あの波の底にこそ、極樂淨土と申してめでたき都の候。それへ具し參らせ候ぞ。』とやうやうに慰め參らせしかば、山鳩色の御衣に、びんづら結はせ給ひて、御涙におぼれ、ちひさう美しき御手を合はせ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神

西方淨土　阿彌陀佛の淨土又極樂淨土ともいふ。

宮に御暇申させ給ひ、其の後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位の尼、先帝を抱きまゐらせて、海に沈みし有樣、目もくれ心も消えはてて、忘れむとすれども忘られず、忍ばむとすれども忍ばれず。かくて生き殘りたる者どものをめき叫びし有樣は、叫喚、大叫喚、無間阿鼻、焰の底の罪人も是には過ぎじとこそ覺え候ひしか。さても武士どものあらけなきにとらはれて、都にこそ上り候へ。」とぞ仰せける。

さる程に寂光院の鐘の聲、今日も暮れぬとうち知られ、夕陽西に傾けば、御名殘盡きせず思し召されけれども、御涙をおさへて還御ならせたまひけり。女院はいつしか昔をや思し召し出でさせ給ひけむ、しのびあへぬ御涙に袖のしがらみせきあへさせ給はず、御後を遙かに御覽じ送つて、還御もやうやう延びさせ給へば、御庵室に入らせたまひけり。（平家物語）

叫喚・大叫喚　無間　共に八熱地獄の一。阿鼻は梵語、漢譯して無間といふ。無間阿鼻とは漢梵重ねいへるなり。

平家物語　十二卷。異本多し。平氏の興起より滅亡までを記す。作者不詳。

鴨長明 通稱菊太夫。鎌倉時代の歌人。歿年不詳。

かつ消えかつ結びて云々 こゝに消えかしこに結ぶ水のあわうき世にめぐる身にこそありけり（藤原公任）

朝に死し 朝有ニ紅顏一誇ニ世路一、暮爲ニ白骨一朽ニ郊原一。（和漢朗詠集）

一五 方丈記鈔

鴨長明

行く川のながれ

行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家とまたかくの如し。玉敷の都の中に、棟を並べ甍を爭へる、たかき卑しき人の住居は、代々を經てつきせぬものなれども、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年燒けて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死に、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

朝顏の露云々 何かおもふなにかはなげく世の中はたゞ朝顏の花の上のつゆ（新古今集）

一期の月影云々 ながむれば月かたぶきぬあはれ我がこの世の程もかばかりぞかし（後拾遺集）

三途 火途（地獄道）・刀途

知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。又知らず、假のやどり、誰が爲にか心を惱まし、何によりてか目を悅ばしむる。そのあるじと住家と無常を爭ふさま、いはば朝顏の露に異ならず。あるは露おちて花殘れり。殘るといへども朝日に枯れぬ。あるは花萎みて露なほ消えず。消えずといへども夕を待つことなし。

一期の月影

そもそも一期の月影傾きて、餘算、山の端に近し。忽ちに三途の闇に向はむとす。何のわざをかこたむとする。佛の敎へたまふ趣は、事にふれて執心なかれとなり。今草庵を愛するも科とす。閑寂に著するも障なるべし。いかゞ用なき樂しみをのべて空しくあたら時を過ぐさむ。靜かなる曉、此のことわりを思ひ續けて、自

（餓鬼道）・血途（畜生道）。十惡業を作りし者の赴く所。

淨名居士 維摩詰。釋迦と同時代の印度の人。方丈の室に住し、在俗のまゝにて道を樂しみし大悟の士。

周梨槃特 釋迦弟子中第一の魯鈍者。

方丈記 一卷。鴨長明の隨筆。

ら心に問ひて曰く、世を遁れて山林にまじはるは、心を修めて道を行はむがためなり。しかるを汝が姿は聖に似て、心は濁にしめり。住家は卽ち淨名居士の跡をけがせりといへども、保つところは僅かに周梨槃特が行にだに及ばず。もしこれ貧賤の報の自ら惱ますか、はた又妄心の至りて狂はせるか。其の時心更に答ふることなし。たゞかたはらに舌根をやとひて、不請の念佛兩三返を申して止みぬ。（方丈記）

石川やせみの小川の清ければ月もながれを尋ねてぞすむ　鴨長明

六月 仲恭天皇の承久三年。（一八八一）

泰時 北條義時の長子。後鎌倉二代の執權となる。

時房 北條義時の弟。

一六　新島守

いつの年よりも五月雨霽間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻めのぼる武者どももあやしく艱めり。かゝれども、遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出立つ。其の勢六萬餘騎とかや。宇治・瀨田へ分ち遣はす。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落下り、すべて安げなく騷ぎみちたり。いかゞあらむと、君も御心亂れておぼし惑ふ。豫ては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたる樣ども、頼もしげなし。

六月二十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂に味方の軍敗れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂

本院　後鳥羽院。

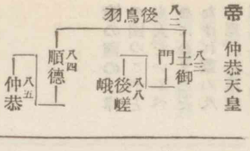
鳥羽殿　離宮。宮址は京都市伏見區竹田・下鳥羽兩町に跨る。

ものにもがな　とりかへすものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ。（源氏物語河海抄箒木）

信實　藤原氏。右京權大夫。繪卷物・肖像畫をよくす。

七條院　典侍藤原殖子。後鳥羽天皇の御生母。

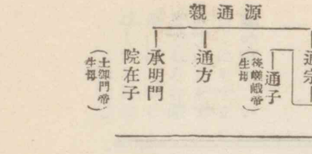
新院　順德上皇。



中院　土御門上皇。

幡多　高知縣幡多郡。

若宮　邦仁親王。後に後嵯峨天皇。



れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下、たゞ物にぞ當り惑ふ。

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍計らひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院・宮々、處々におぼし惑ふこと更なり。本院は隱岐の國にはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせたまふ。今日を限りの御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや。」と、おぼさるゝもかひなし。その日、やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせたまふらむ。まだいと惜しかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はむとなり。かくて同じき十三日に御船に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心地、この世の同じ御身ともおぼされず。いみじういかなりける代々の報にかとうらめし。新院も佐渡の國に遷らせ給ふ。まことや七月九日、帝をもおろし

奉りき。この卯月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にておりたまへるためしも、これや初なるらむ。さて上達部・殿上人、それより下、はた殘りなく、この事に觸れにし類は、重く輕く罪に當る樣いみじげなり。

中院は初よりしろしめさぬ事なれば、東にも咎め申さねど、父の院遙かにうつらせたまひぬるに、のどかにて都にあらむことといと恐ありとおぼされて、御心もて、その年閏十月十日、土佐の國の幡多といふ處に渡らせたまひぬ。去年の二月ばかりにや、若宮いできたまへり。承明門院の御兄人に、通宗の宰相中將とて、若くて失せたまひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に、通方といふ人の家に留め奉りたまひて、近く侍ひける北面の下臈一人、召次などばかりぞ御供仕うまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせたまふ。道すがら雪かきくらし、風吹荒れ、吹雪

六つにて 後鳥羽院。

津の國の 津の國のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重葦（和泉式部）

して、來しかた往く先も見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

うき世にはかかれとてこそ生れけめことわり知らぬわがなみだかな

「せめて近き程に。」と、東より奏したりければ、後には阿波の國に遷らせたまひにき。

六つにて位に卽きたまひて、十三年おはしましき。下りたまひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じことなりしかば、すべて三十六年が程この國のあるじとして、萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を從へたまへりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有樣にて、遠きをあはれみ、近きを撫でたまふ御惠、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざらむことをおぼし

蓐姑射の山 上皇の御所。

仙洞 仙洞御所。

霞の洞 仙洞御所。

柴の庵の いづくにもすまれずばただすまであらむ柴のいほりのしばしなる世に（西行）

き。蓐姑射の山の峯の松も、やうやう枝をつらねて千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を經ても空ゆく月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありありてよしなきひとふしに、今はかく花の都をさへ立ち別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからこと問ふものとては、浦に釣するあま小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わが故郷のしるべかとばかり眺めすごさせたまふ御すまひどもは、それまでと月日をかぎりたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて何時をはてとか廻り逢ふべき限りだになく、雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡くし給ふべき御樣ども、口惜しといふもおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少し引入りて、山蔭にかたそへて、大きやかなる巖のそばだて

水無瀬殿 本院の造らせられし殿舎。今の大阪府三島郡島本村廣瀬

增鏡 十卷。後鳥羽天皇より後醍醐天皇に至る約百五十年間の史實を記せり。作者不詳。

るをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。誠に「柴の庵のたゞしばし。」と、かりそめに見えたる御宿りなれど、さるかたになまめかしく、故づきてしなさせたまへり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになむ。はるばると見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹きくるを聞しめして、

われこそは新島守よおきの海のあらき波風こころして吹け

（增鏡）

後鳥羽院御製

たらちねの消えやらで待つ露の身を風よりさきにいかでとはまし

八百萬神もあはれめたらちねのわれ待ちえむとたえぬ玉の緒

吉田兼好 本姓卜部氏。後村上天皇の正平五年（一〇一〇）歿、年六十九。**垂れこめて** 垂れこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし櫻も移ろひにけり（古今集、藤原因香）

一七 花はさかりに

吉田兼好

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を戀ひ、垂れこめて春のゆくへ知らぬも、猶あはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見所おほけれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散りすぎにければ。」とも、「障る事ありてまからで。」なども書けるは、「花を見て。」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひは、さる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝、散りにけり。今は見所なし。」などはいふめる。

よろづの事も、はじめ終こそをかしけれ。望月の隈なきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の

祭 賀茂神社の祭。四月、中の酉の日。

影、うちしぐれたる叢雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都戀しう覺ゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家をたち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢ寄りたち寄り、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大きなる枝、心なく折取りぬ。泉には手足さし浸して、雪にはおり立ちてあとつけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。

さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなかりき。見ごといと

遲し。そのほどは棧敷不用なり。」とて、奥なる屋にて、酒飲み、物くひ、圍碁、雙六など遊びて、棧敷には人を置きたれば、「渡り候。」といふ時に、各肝つぶるゝやうに爭ひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾はり出でておし合ひつゝ、一事も見もらさじとまもりて、「とあり、かゝり。」と、物毎にいひて、渡り過ぎぬれば、「また渡らむまで。」といひておりぬ。唯物をのみ見むとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは、睡りていとも見ず。若く末々なるは、宮仕に立ちゐ、人の後にさぶらふは、樣惡しくも及びかゝらず、わりなく見むとする人もなし。

何となく葵かけわたしてなまめかしきに、

賀茂祭の圖（年中行事繪卷）

明けはなれぬほど、忍びてよする車どものゆかしきを、それかかれかなど思ひよすれば、牛飼・下部などの見知れるもあり。をかしくも、きらきらしくも、さまざまにゆきかふ、見るもつれづれならず。暮るゝ程には、たてならべつる車ども、所なくなみゐつる人もいづかたへか行きつらむ程なくまれになりて、くるまどものうがはしさもすみぬれば、簾・疊もとりはらひ、目の前にさびしげになりゆくこそ、世のためしも思ひ知られて、あはれなれ。大路みたるこそ、祭見たるにてはあれ。（徒然草）

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き　芭蕉

徒然草　二卷　兼好法師の隨筆。

「語る部分。詞といふ。

『謠ふ部分。

次第　序歌ともいふべきもの。一曲の氣分情調を表はす。

道行　叙景抒情を加へつゝ旅程を述ぶる歌詞。

歌　謠ふ部分の一種。上音に始まるを上歌、下音に始まるを下歌といふ。

クセ　曲舞節にて謠ふ部分

ロンギ　僧家の論義より出で、問答の體をなす部分。

地　役者以外の數人（地方）合唱する部分

一八　鉢の木

人物

シテ　佐野常世　　後ワキ　最明寺時頼

ツレ　同　妻　　ワキヅレ　時頼の近侍

ワキ　旅僧（最明寺時頼）　狂言　從者

所

前段　上野國佐野

後段　相模國鎌倉

時

鎌倉中期　前段は十二月

ワキ　次第　『行方定めぬ道なれば、來し方もいづくならまし。

ワキ　「これは一處不住の沙門にて候。われこの程は信濃の國に候

ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづこの度は鎌倉に上り、春になり修行に出でばやと思ひ候。

ワキ道行『信濃なる、淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき伴の里、今ぞ浮世を離坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡りに着きにけり。

ワキ「急ぎ候ほどに、上野の國佐野の渡りに着きて候。あら笑止や、また雪の降り來りて候。此の所に宿を借らばやと思ひ候。

「いかに此の屋の内へ案内申し候。

ツレ「誰にてわたり候ぞ。

ワキ「これは修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ。

ツレ「易き御事にて候へども、主の御留守にて候ほどに、お宿は叶ひ候まじ。

ワキ「さらば御歸りまで是に待ち申さうずるにて候。

大井山・伴の里（伴野庄）・離坂・碓氷川・板鼻　信濃より碓氷峠を經て上野高崎に到る途中の地名。

佐野の渡り　群馬縣群馬郡佐野村。

ツレ「それはともかくもにて候。わらはは外面へ出でむかひ、此の由を申さばやと思ひ候。

シテ「あゝ降つたる雪かな。いかに世にある人の面白う候らん。それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を着て立つて徘徊すといへり。されば今ふる雪も、もと見し雪に變らねども、われは鶴氅を着て立つて徘徊すべき『袂も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥の、今日の寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。

「あら思寄らずや、この大雪に何とて是に佇みて御入り候ぞ。

ツレ「さん候。修行者の御入り候が、一夜のお宿と仰せ候ほどに、御留守の由申して候へば、御歸りまで御待ちあらうずるよし仰せ候ほどに、是まで參りて候。

雪は鵝毛に　「雪似ニ鵝毛一飛散亂、人被ニ鶴氅一立徘徊。」（白氏文集）

細布衣　陸奥希絺（けふ）の産。

シテ「さてその修行者はいづくに渡り候ぞ。

ツレ「あれに御入り候。

ワキ「我等が事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪にて前後を忘じて候程に、一夜のお宿を御かし候へ。

シテ「やすき御事にて候へども、餘りに見苦しく候程に、お宿は叶ひ候まじ。

ワキ「いやいや、見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を御貸し候へ。

シテ「泊め申したくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる體にて候ほどに、中々お宿は思ひもよらぬ事にて候。是より十八

山本の里　群馬縣群馬郡八幡村邊の舊名。

町あなたに、山本の里とてよき泊の候。日の暮れぬさきに一足もはやく御出で候へ。

ワキ「さてはしかとお貸しあるまじいにて候か。

シテ「御痛はしくは存じ候へども、お宿はまゐらせがたう候。

ワキ「あら曲もなや、よしなき人を待ち申して候ものかな。（退く）

ツレ『あさましや、我等かやうに衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ、後の世の便りともなるべけれ。然るべくは御宿を參らさせ給ひ候へ。

シテ「さやうに思しめさば、何とて以前には承り候はぬぞ。いや此の大雪に遠くは御出で候まじ。某追つつきとめ申し候べし。

「なうなう、旅人、お宿參らせうなう。餘りの大雪に申す事も聞えぬげに候。痛はしの御有樣やな。もと降る雪に道を忘れ、今ふる雪に行き方を失ひ、一所にたゝずみて、袖なる雪を打拂

駒とめて 藤原定家の歌。（新古今集）

三輪が崎 奈良縣磯城郡。

ひ打拂ひしたまふ氣色、『古歌の心に似たるぞや。駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし「佐野の渡りの雪の夕暮。かやうによみしは大和路や、『三輪が崎なる佐野のわたり、

地下歌『是は東路の、佐野のわたりの雪の暮に、迷ひ疲れ給はんより、見苦しく候へど、一夜は泊り給へや。上歌『げに是も旅の宿、假初ながら値遇の緣、一樹の蔭のやどりも、此の世ならぬ契なり。それは雨の木蔭、是は雪の軒ふりて、憂き寢ながらの草枕、夢より霜や結ぶらん。

シテ「いかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ、參らせうずる物もなく候はいかに。

ツレ「折ふしこれに粟の飯の候程に、苦しからずは參らせられ候へ。

盧生 獨の國に盧生といふ貧しき青年あり、邯鄲の旅舍にて道士呂翁の枕を借りて眠り、榮華五十年の夢を見しが、そは僅に主人が黃粱を炊ぐ間に過ぎざりしと。

シテ「さらばその由申し候べし。

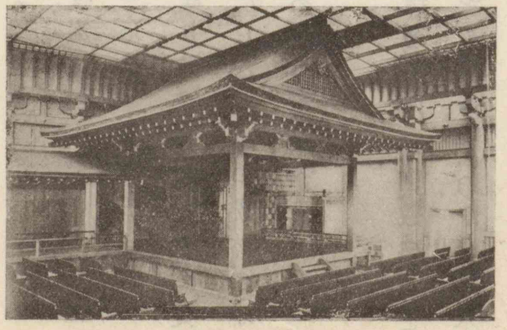
「いかに申し候。お宿をば參らせて候へども、何にても參らせうずる物もなく候。折ふしこれに粟の飯のある由申し候。苦しからずはきこし召され候へ。

ワキ「それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。

シテ「なう、きこし召されうずると仰せ候。急いで參らせられ候へ。

ツレ「心得申し候。

シテ「總じてこの粟と申す物は、いにしへ世にありし時は、歌によみ、詩に作りたるをこそ承りて候に、今はこの粟を以て身命を繼ぎ候。げにや盧生が見し榮華



能舞臺（寶生能樂堂）

の夢は五十年、その邯鄲の假枕、一炊の夢のさめしも粟飯炊ぐ程ぞかし。あはれや、げに我もうちも寢て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、『なう御覽ぜよ、かほどまで

地『住みうかれたる故郷の、松風寒き夜もすがら、寢られねば夢も見ず。何思ひ出のあるべき。

シテ「夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあてまゐらせ候べき。や、思ひ出だしたる事の候。鉢の木を持ちて候。これを切り、火に焚いてあて申し候べし。

ワキ「げにげに鉢の木の候よ。

シテ「さん候。それがし世にありし時は、鉢の木に好き、數多木を集めもちて候ひしを、かやうの體にまかりなり、いやいや木好きも無用と存じ、皆人に參らせて候。さりながら、今も梅・櫻・松を持ちて候。あの雪もちたる木にて候。某が祕藏にて候へど

も、今夜のおもてなしに、これを火に焚きあて申さうずるにて候。

ワキ「いやいや、これは思ひもよらぬ事にて候。御志はありがたう候へども、自然又おこと世に出で給はん時の御慰にて候間、なかなか思ひもよらず候。

シテ「いや、とても此の身は埋木の、花咲く世にあはんこと、今この身にてはあひがたし。

ツレ『たゞ徒なる鉢の木を、御身の爲に焚くならば、

シテ「これぞまことに難行の法の薪とおぼしめせ。

ツレ『しかもこの程雪降りて、

シテ「仙人に仕へし雪山の薪、

ツレ『かくこそあらめ。

シテ『われも身を

埋木の花咲く　埋木の花さくこともなかりしに身のなるはてぞあはれなりける。（源頼政）

雪山　印度北境に聳ゆる大山。釋迦過去世に於て苦行せしといふ山

窓の梅の北面 池凍東頭風吹解、窓梅北面雪封寒。（和漢朗詠集）

見じといふ 山里の折かけ垣の梅の花いかなる人の見じといふらむ。（春家後集）

松はもとより 原作には「松はもとより煙にて、薪となるも理や」とあり。徳川時代に改作せしもの。

地『捨人のための鉢の木、切るとてもよしや惜しからじと、雪うち拂ひて見れば、面白や、いかにせん。まづ冬木より咲きそむる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木よりまづさきだてば、梅を切りやそむべき。見じといふ人こそ憂けれ、山里の折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜みしに、今更薪になすべしとかねて思ひきや。

地クセ『櫻を見れば春ごとに花少し遲ければ、此の木や佗ぶると心を盡し育てしに、今はわれのみ佗びて住む、家櫻切りくべて、緋櫻になすぞ悲しき。

シテ『さて松はさしもげに、

地『枝をため、葉をすかして、かゝりあれと植ゑ置きし、そのかひ今は嵐吹く、松はもとより常磐にて、薪となるは梅、櫻、切りくべて今ぞ御垣守、衞士の焚く火はおためなり、よくよりてあ

御垣守 御垣守衞士の焚く火の夜は燃え盡は消えつゝ物をこそ思へ（詞花集）

たり給へや。

ワキ「近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候。

シテ「御出でにより我等も火にあたりて候。

ワキ「いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ぞ、承りたく候。

シテ「いや、某は名字もなき者にて候。

ワキ「何と仰せ候とも、唯人とは見え給はず候。自然の時の爲にて候。何の苦しう候べき。御名字を承り候べし。

シテ「この上は何をかつゝみ候べき。是こそ佐野の源左衞門尉常世がなれる果にて候。

ワキ「それは何とてかやうの散々の體にはなり給ひて候ぞ。

シテ「その事にて候。一族どもに横領せられて、かやうの身となりて候。

ワキ「なう、それは何とて鎌倉へ御上り候ひて、その御沙汰は候は

最明寺殿 北條時頼。鎌倉五代の執權。剃髪して最明寺入道といふ。弘長三年（一九二三）歿、年三十七。

只頼め なほ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらむ限りは（新古今集）

ぬぞ。

シテ「運の盡くる處は、最明寺殿さへ修行に御出で候上は候。かやうにおちぶれては候へども、御覽候へ、是に物の具一領、長刀一えだ、又あれに馬をも一匹つないで持ちて候。これは、唯今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりともこの具足取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、痩せたりともあの馬に乘り、一番に馳せ參じ、着到につき、『さて合戰始らば、

地『敵大勢ありとても、一番に破つて入り、思ふ敵と寄りあひ、打ちあひて死なん此の身の此のまゝならば、徒に飢に疲れて死なん命、なんぼう無念のことさふぞ。

ワキ『よしや身の、かくては果てじ、只頼め、われ世の中にあらん程、

ロンギ

シテ『またこそまゐり候はめ。暇申して出づるなり。

ツレ『名殘惜しの御事や。はじめはつゝむ我が宿の、さも見苦しく

候へど、しばしは留りたまへや。

ワキ『留る名殘のまゝならば、さて幾度か雪の日の、

シテ

ツレ『空冴え寒きこの暮に、

ワキ『いづくに宿をかり衣、

シテ

ツレ『今日ばかりとまりたまへや。

ワキ『なごりは宿にとまれども、暇申して、

シテ

ツレ『御出でか。

地『さらばよ、常世。

シテ

ツレ『またお入り。

地『自然鎌倉に御のぼりあらばお尋ねあれ。けうがる法師なり。かひがひしくはなけれども、披露の緣になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふなと言捨てて、出で船のともに名殘や惜しむらん。（中入）

東八箇國 相模・武藏・安房・上總・下總・常陸・上野・下野

後ジテ『いかにあれなる旅人、「鎌倉へ勢の上るといふはまことか。なに、おびたゞしく上る。さぞあるらん。東八箇國の大名・小名、思ひ思ひの鎌倉入り、さぞ見事にて候らん。白金物打つたる絲毛の具足に、金銀を展べたる太刀・刀、飼ひに飼うたる馬にのり、乘替・中間きらびやかに、うち連れうち連れのぼる中に、常世が常にかはりたる、馬・物の具や打物の、物そのものにあらざる氣色、『さぞ笑ふらん。さり乍ら、所存は誰にも劣るまじと、心許りは勇めども、勇みかねたる痩馬の、あら道おそや。

地『急げども急げども、弱きに弱き柳の絲の、

シテ『よれによれたる痩馬なれば、

地『うてどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乘り力なければ追ひかけたり。

後ワキ「いかに誰かある。

ワキ「國々の軍勢どもは皆々來りてあるか。

ワキヅレ「御前に候。

ワキ「その諸軍勢のなかに、いかにもちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、痩せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いでこなたへ來れと申し候へ。

ワキヅレ「畏つて候。

「いかに誰かある。

狂言「御前に候。

ワキヅレ「君よりの御諚には、諸軍勢のなかに、ちぎれたる具足を着、錆びたる長刀を持ち、痩せたる馬を自身ひかへたる武者あ

るべし。急いで尋ねて御前へ參れとの御ことにて候。

狂言「畏つて候。

「いかに申し候。

シテ「何事にて候ぞ。

狂言「上意にて候。急いで御前へ御參り候へ。

シテ「何と、某に御前へ參れと候や。

狂言「なかなかの事。

シテ「あら思ひよらずや。これは定めて人たがへにて候べし。

狂言「いやいや、そなたの事にて候。その仔細は、諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者をつれて參れとの御事にて候が、見申せば、其方ほど見苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候。急いで御參り候へ。

シテ「何と、たとへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に參れ

と候や。

狂言「なかなかのこと。

シテ「さては某が事にて候べし。畏つたると御申し候へ。

狂言「心得申し候。

シテ「げにげにこれも心得たり。某が敵人、叛謀人と申し上げ、御前へめし出だされ、頭を刎ねられんためな。よしよし、それも力なし。いでいで御前に參らんと、『大床さして見渡せば、

地『今度の早打に上り集まる兵、きら星の如く竝み居たり。さて御前には諸侍、その外數人竝み居つゝ、目をひき、指をさし、笑ひあへるその中に、

シテ『横縫のちぎれたる

地『古腹卷に錆長刀やうやうに横たへ、わるびれたる氣色もなく、參りて御前にかしこまる。

ワキ「やあ、いかにあれなるは佐野の源左衞門尉常世か。これこそいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ。見わすれてあるか。いで、汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事あるならば、ちぎれたりともその具足取つて投げかけ、錆びたりともその長刀を持ち、痩せたりともあの馬に乘り、一番に馳せ參るべきよし申しつる、言葉の末を違へずして、參りたるこそ神妙なれ。まづまづ今度の勢づかひ、全く餘の儀にあらず。常世が言葉の末、眞か僞か知らん爲なり。又當參の人々も、訴訟あらば申すべし。理非によつてその沙汰いたすべきところなり。まづまづ沙汰のはじめには、常世が本領佐野の庄、三十餘郷返し與ふるところなり。又なによりも切なりしは、大雪ふつて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火にたきあてし志をば、いつの世にかは忘るべき。いでその時の鉢の木

梅田　石川縣河北郡森本村大字梅田。
櫻井　富山縣下新川郡三日市町邊の舊名。
松井田　群馬縣碓氷郡松井田。

は梅・櫻・松にてありしよな。その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、あはせて三箇の庄、子々孫々にいたるまで、相違あらざる自筆の狀、『安堵に取り添へたびければ、

シテ『常世はこれを賜はりて、

地『三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ、始め笑ひしともがらも、これほどの御氣色、さぞ羨ましかるらん。さて國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、古里へとてぞ歸りける。

シテ『その中に常世は、

地『よろこびの眉を開きつゝ、今こそ勇め、この馬に打乘りて、上野や佐野の船橋、とりはなれし本領に安堵して歸るぞうれしかりける。

（「觀世謠本」による）

能狂言　狂言の詞章は、謠曲と共に室町文學の中心をなし、我が國の滑稽文學の前驅をなすもの。多くは短篇にして、全篇は對話と獨白とより成り、當時の口語を用ひたり。

大名　立烏帽子、素襖、袴、小さ刀。**冠者**　半袴。**亭主**　長袴。

西山　京都市の西方に連なれる一帶の山地。

東山　京都市の東方に連なれる一帶の山地。

下京　京都市の南部。

上京　京都市の北部。

一九　萩大名

大名「罷り出でたるは隱れもない大名。この中御前に詰めてあれば、心が何とやら屈してござる。太郎冠者を呼出し、何方へぞ遊山に參らうと存ずる。あるかやい。冠者「御前に。大名「汝を呼出すは別儀ではない。何方へぞ遊山に行かうと思ふが、何とあらう。冠者「は。内々は御意なうても、申し上げたう存ずる所に、一段でござりませう。大名「よからうな。冠者「は。大名「何と、西山・東山はいつもの事。樣子の違うた所へ行きたいが、何處もとがよからうな。冠者「まことに御意の通り、西山・東山はいつもの事でござる。されば何處もとがようござりませうぞ。はあ、思ひつけてござる。これよりも下京邊に、心やさがたな御方がござる。殊の外の庭ずきでござる。これへの御遊山がようござりませう。大名「おう、これが一段よかろ。それへ向けて行かうぞ。冠者「は。さりながら、これへござればお歌をなされねばなりませぬ。大名「それは如何やうなことを詠むぞ。冠者「三十一文字の言の葉を傳へた事でござる。大名「あゝ、こりやなるまいに。冠者「は。申し上げまする。大名「何とした。冠者「某上京邊を通つてござれば、若い衆の見物にござらうとあつて、萩の花について句づくろひをなされたを聞いて參りましてござる。御前に教へませう。大名「やい冠者。其の庭にも萩の花があらうかな。冠者「殊に亭主好きまするのが萩でござりまする。大名「ふん。其の儀ならば急いで教へい。冠者「畏つてござる。『七重八重九重とこそ思ひしにとよ咲出づる萩の花かな』と申す事でござる。大名「ふん。してそればかりか。冠者「はあ。大名「いや、これほどの事ならば詠まうほどに、急いで來い。冠者「畏つてござる。大名「來い來い。やい冠者。して今の歌のいひ出しは何であつたぞ。冠者「忘れさつしやれてござ

るか。『七重八重』でござりまする。大名「おう、それぢや。して、其の後は。冠者「申し、殿様。これではなりますまい。大名「おう、なるまいわい。急いで戻れ。冠者「申し、殿様。大名「何ぢや。冠者「さりながら、ものによそへたら覺えさつしやれませうか。大名「よそへものによつて覺えうず。冠者「卽ち扇の骨によそへませう。『七重八重』と申す時に、七本八本廣げませう。『九重』と申す時に九本廣げませう。『とよ咲き』と申す時に、皆廣げませう。大名「おう、これはよいよそへものぢやわい。やい、して又其の後があるぞよ。冠者「はあ。これは猶よそへものがござる。大名「それは何によそへるぞ。冠者「すなはち身共をば、臑脛ばかり伸び居つてと、厚く折檻なされまする。其の脛をば思ひ出さつしやれませう。大名「おう、是が一段ぢや。來い來い。冠者「疾つとござりました。すなはちこれでござりまする。それに待たしやれませ。大名「やい、冠者。亭主に、大名ぢやほどに、これへ迎へ

に出よといへ。冠者「畏つてござる。御亭、内にござるか。亭主「いえ冠者殿、何としてござつたぞ。冠者「其の事でござる。賴うだ人が此方の庭を聞及うで、見物にでござる程に、表へ迎へに出さつしやれい。亭主「心得ましてござる。はつ。これは又、見苦しい所へ御腰掛けられうとござりまする。辱うこそござりますれ。大名「やい冠者。ありや亭主か。冠者「はあ。大名「御亭、不案内におぢやる。かう通りまする。亭主「はつ。大名「やい太郎冠者。床机、床机。冠者「はつ。大名「やい、亭主にこれへ出られいといへ。冠者「はつ。御亭これへ出さつしやれい。亭主「畏つてござる。大名「御亭、御亭。聞及うだよりも、いかう庭が見事でおぢやる。亭主「はつ。この中は手入もいたさぬによつて、いかう汚穢うござりまする。大名「いやいや、さうもおぢやらぬいの。なう御亭。あの向うな松は、女松でおぢやるか、男松でおぢやるか。亭主「いや、あれは男松でござりまする。大名「ふん、いかう見事でおぢや

る。やい、冠者。見事なな。冠者「はつ。大名「あの左の方へすつと出た枝を見たか。冠者「なかなか。見ましてござる。大名「鋸おくせいびつ切つて心に立てうに。冠者「はゝ。大名「はゝ。御亭、不案内におぢやる。亭主「これこれ。冠者「何でかござるぞ。亭主「いや、あの殿様に仰しやれませうには、いづれもの御腰掛けられては、あの萩の花につけて短冊を掛けさつしやる。殿様にも遊ばしませいと仰しやれい。冠者「心得ましてござる。申しまする。大名「何とした。冠者「亭主申しまするのには、いづれもが短冊をなされまする程に、花につけてお歌をば詠まつしやれいと申しまする。大名「ふん、亭主にこれへ出よといへ。冠者「はつ。大名「御亭。只今は歌を詠めと仰しやる。久しう詠まぬが何とおぢやろ。一つ詠まうか。亭主「遊ばしませう。大名「かうもおりやろか。『七重八重九重とこそ思ひしにとへ咲きいづる萩の花かな。』亭主「あゝこれはいかう出來さつしやれてござりま

する。大名「亭主。身は歌よみで居りやるいの。亭主「あゝ、いかう出來さつしやれてござる。大名「やい冠者。亭主が出來たてていかう喜ぶわ。汝は何方へぞ行け。暇を出すほどに、緩りと行て寛いで來い。冠者「畏つてござりまする。亭主「申し殿様。大名「御亭、何でおぢやるぞ。亭主「只今短冊に書きまする。も一度吟じさつしやれませう。大名「おう心得ておぢやる。『七重八重九重とこそ思ひしに、とへ咲出づる、出づる。』いや、冠者奴はどこもとに居るぞぢやまでい。亭主「申し殿様。御歌に冠者はいりますまい。急いで後を詠まつしやれませい。大名「して短かうおぢやるか。亭主「なかなか、字が足りませぬ。大名「したらば、出づるを幾つも書いて置きやれ。亭主「いや、それではなりませぬ。大名「はて、冠者奴がはやう戻り居らいで。亭主「申し殿様。急いで詠まつしやれませい。大名「こゝな奴は諸侍に手を掛け居つて、憎い奴の。亭主「でも

狂言記 五卷、和泉流の狂言五十番を收む。（狂言に大藏流・鷺流・和泉流の三派あり）。

字が足りませぬ。大名「あゝ思ひ付けたは。亭主「何と。大名「ものと。亭主「何と。大名「太郎冠者が向臑に某が鼻の先。」亭主「何でもないこと。とつとといかしませ。（「狂言記」による）

狂言は「をかしみ」を感じさせる手だてであるが、最初から笑はせようとしてはならぬ。ただその筋を述べ、場面の次第を一座にわからせるのが第一である。一體この「をかしみ」は數人が笑ひ崩れるのが、その風體であるが、心では笑みの中に娛みを含むのが面白く嬉しいので、見物人がこの心に和して、思はずにつこりするのが眞の「をかしみ」である。（世阿彌の言葉）

土居光知 東京帝國大學英文科出身。東北帝國大學教授。

山部赤人 歌人。聖武天皇に仕ふ。傳未詳。

西行 俗名佐藤義清。鳥羽院の北面。出家して圓位といひ、又西行といふ。歌集を「山家集」といふ。後鳥羽天皇の建久元年（一八五〇）歿、年七十三。

芭蕉 第二十一課參照。

田子の浦 靜岡縣庵原郡

二〇 自然愛の發達

土居光知

わが國最初の自然詩人は山部赤人である。西行や芭蕉もこの點に於て赤人を祖としてゐる。赤人の歌を讀んで特に注意されることは、「瀨の音ぞ清き」「清き白濱」等「清き」といふ語が續出することである。彼が愛したのは清淨な自然である。

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ富士の高嶺に
雪は降りける

の歌に於て彼が讃美したのも清淨な神々しさであつて、今日の登山家が喜ぶやうな、偉大な力の感じを中心にした山岳美ではなかつた。彼以前に歌はれた自然は、人生の裝飾或は背景としての自然、官能的に快感を與へる自然であつた。赤人が始めて清き自然を、汚れたる人生に對立するものとして愛したのである。彼

が西行及び芭蕉の先達となり、最初の自然詩人とせられるのは、彼がかくの如き精神的な自然の發見者であるからである。かくて彼の自然の歌は、曾てなき清新幽玄なるものとなつた。

烏羽玉の夜のふけ行けば久木生ふる清き河原に千鳥しばなく

春の野に菫つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける

西行は人を想ふ心をそのまゝに移して自然を愛した。

吉野山梢の花を見し日より心は身にもそはずなりにき

ひとりすむ片山かげの友なれや嵐にはるる冬の夜の月

彼はかく自然を友として愛すれば愛する程寂しくなつた。そ

吉野山 奈良縣吉野郡。

してこの心に調和する淋しき自然を友としようとした。

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮

訪ふ人も思ひたえたる山里の寂しさなくば住みうからまし

彼は寂しさを友とし、その奥深くたどつて行つたのであるが、寂しさの奥には尚深刻な寂しさがあるのみであつた。

雪ふれば野路も山路も埋もれて遠近知らぬ旅の空かな

秋ふかみ弱るは蟲の聲のみか聞く我とてもたのみやはある

かくの如く西行は寂しさの奥へ奥へとたどつて行つたが、それは輝く光明の道ではなかつた。何となれば當時の時代思潮に

於て、人間性の愛と自然の愛とは相對立するものであつて、自然の愛は、心情の願の否定であつたからである。西行はこの寂しさにたへかねて、また「人」をなつかしく思つた。

淋しさにたへたるひとのまたもあれな庵並べむ冬の山里

花も枯れ紅葉も散りぬ山里は淋しさをまた訪ふ人もがな

しかし當時の厭世觀のうちに育ち、それを超越することのできなかつた彼は、人間の愛に歸つてゆくことができなかつた。

わだの原はるかに波をへだて來て都にいでし月を見るかな

吉野山やがて出でじとおもふ身を花散りなばと人やまつらむ

かくて彼はまばゆき光明にも、大なる歡喜にも、力強い信仰にも接することなく、未來に對する淡い希望と、自然の寂しい慰藉とのうちに生を終へたのである。

もろともに我をも具して散りね花うき世を厭ふ心ある身ぞ

ねがはくは花の下にて春死なむそのきさらぎのもち月のころ

西行の偉大なる點は、厭世脱俗の態度を誇示し瘠我慢をすることなく、かゝる自然の愛によつて慰められずして、「人間」を慕ひ、何物かを眞に愛さなければゐられなかつた點に、心の奥底から寂しがつた點にある。これは安價な、愛なきさとりに安住し、寂しさを弄び、寂しさを茶化し、或はまた洒落でごまかしたりする人達とは比較にもならぬ。さびしいといふことは愛せずにはゐら

れない詩人の運命である。要するに西行の自然愛は、赤人が歌つた如き清淨なる自然としての愛と、人間愛の感情を移入した自然の愛とが合一されたものであつたと云ふことができよう。

うき我をさびしがらせよ閑古鳥
この道やゆく人なしに秋の暮

の如き句をのこした芭蕉の途も、西行のたどつた道とあまり變らなかつた。たゞ態度の推移がある。私はこゝに二三の簡單な例歌を以て赤人・西行・芭蕉の態度を説明してみよう。

春の野に菫つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜
ねにける（赤人）

かきわけて折れば露こそこぼれけれ淺茅にまじる
撫子の花（西行）

山路きて何やらゆかし菫草（芭蕉）

赤人の自然に對する態度は素樸であつて、自然との融合が自らできる。西行の愛は、感傷的である。彼は愛の對象であるものを捉へようとするが、それは露のやうにこぼれてしまふ。その露も彼には涙として、感じられる。美は彼の心を憬れしめ誘つて行くが、捉へられるものではなく、いつまでも滿足を與へない。芭蕉の心は、西行の抱いてゐた如き感傷的な愛の否定を經てきた。この否定は個物に對する執着の否定であつて、愛そのものを殺したのではない。いま彼の心には對象のない曠やかな愛が動いてゐる。彼はもはや菫を摘まうとも、撫子を折らうともせぬ。彼は菫を透して普遍を眺める。そして彼の愛は菫草に一刹那の間依存して、ゆかしさの漣波を起す。その漣波が彼の俳句である。

（「文學序説」による）

奥の細道 一卷。芭蕉が弟子曾良を伴なひ、元祿二年三月江戸を發し、東北を廻り、越後・越中加賀・美濃に至るまでの六百里程、百五十日間の紀行。

松尾芭蕉 俳諧正風の祖。伊賀に生る。元祿七年（二三五四）歿、年五十一。

月日は 天地ハ者萬物之逆旅ナリ光陰者百代之過客ナリ。（李白）

二 奥の細道

松尾芭蕉

門出

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず。海濱にさすらひ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取るもの手につかず。股引の破れをつゞり、笠の緒付けかへて、三里に灸すうるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅にうつるに、

草の戸も住替る代ぞ雛の家

去年秋 元祿元年九月。

江上の破屋 深川の芭蕉庵。

そゞろ神 そぞろに人の心を誘惑する神。

道祖神 道の神。

松島 後出。

杉風 芭蕉の門人。鯉屋藤左衛門。

上野・谷中 東京市下谷區。

千住 東京市足立區。

鳥啼き魚の目は涙 鳥ハ悲ミ林ニ啼ク魚ハ思ヒ故淵ニ沸ク。（陶淵明）

日光 栃木縣

空海 弘法大師。眞言宗開

面八句を庵の柱に懸置く。彌生も末の七日、明ぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、不二の峯かすかに見えて、上野・谷中の花の梢又いつかはと心細し。睦まじきかぎりは宵よりつどひて、船に乘りて送る。千住と云ふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙を濺ぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

是を矢立の初として、行く道なほすゝまず。人々は途中に立ちならびて、後かげの見ゆるまではと見送るなるべし。

日光

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔此の御山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時、日光と改め給ふ。千歳未來をさとり給ふにや。今この御光一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵のすみか穩かなり。猶憚多くて筆をさしおきぬ。

瓢。仁明天皇の承和二年（一四九五）寂、年六十三。

黑髮山　男體山ともいふ。日光山の主峯

曾良　芭蕉の門人。寛永六年（一三六九）歿、年六十二。

夏　偶偶が舊曆四月十六日より七月十五日迄九十日間外出を禁じ、坐禪修學を勵むこと。

あらたふと青葉若葉の日の光

黑髮山は霞かゝりて、雪いまだ白し。

剃捨てて黑髮山に衣がへ　曾良

曾良は河合氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。このたび松島・象潟の眺め共にせんことを悅び、且は羈旅の難をいたはらんと、旅立つ曉、髮を剃りて墨染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす。仍つて黑髮山の句有り。更衣の二字力ありて聞ゆ。

二十餘丁山を登りて瀧あり。岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身をひそめ入りて、瀧の裏よりみれば、うらみの瀧と申し傳へ侍るなり。

しばらくは瀧にこもるや夏のはじめ

那須野　栃木縣那須郡中央の大平原。

羽黑　那須郡黑羽町。

那須の黑ばねと云ふ所に知る人あれば、是より野越にかゝりて直道をゆかんとす。遙かに一村を見かけて行くに、雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中を行く。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこになげきよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬにはあらず。いかゞすべきやゝ。されども此の野は縱横にわかれて、うひうひしき旅人の道ふみたがへん、あやしう侍れば、此の馬のとゞまるところにて馬を返し給へ。」と貸し侍りぬ。ひさきものふたり馬の跡したひて走る。一人は小姬にて名をか

芭蕉旅行地圖（其一）

淨法寺何がし 本名高勝、通稱圖書。
桃翠 鹿子畑豐明、通稱善太夫。
玉藻の前 傳說上の人物。三國渡來の妖狐、化して近衛天皇の寵姫となれりといふ。
八幡宮 那須郡金田村にあり。今那須神社といふ。
別しては 平家物語、源平盛衰記「扇の的」の條。
光明寺 那須の餘瀧といふ處にありし修驗道の寺。
行者堂 修驗道の開祖、役

さねと云ふ。聞きなれぬ名のやさしかりければ

かさねとは八重撫子の名なるべし　曾良

やがて人里に至れば、あたひを鞍つぼに結ひつけて馬をかへしぬ。

黑羽の館代、淨法寺何がしの方に音づる。思ひかけぬあるじの悅び、日夜語りつゞけて、其の弟桃翠などいふが朝夕勤めとぶらひ、自らの家にも伴なひて、親屬のかたにも招かれ、日をふるまゝに、一日郊外に逍遙して犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣づ。與市扇の的を射し時、「別しては我が國氏神正八幡。」とちかひしも此の神社にて侍ると聞けば、感應殊にしきりに覺えらる。暮るれば桃翠が宅に歸る。

修驗光明寺と云ふあり。そこにまねかれて行者堂を拜す。

行者の像を安置する堂。
雲岸寺 臨濟宗の名刹、雲巖寺。那須郡東山にあり。
佛頂禪師 始め深川長慶寺に住す。芭蕉參禪の師。正德五年（一三七五）寂、年八十七。
妙禪師 原妙禪師のこと。南宋の高僧。
法雲法師 梁代の高僧。

夏山に足駄を拜む首途かな

當國雲岸寺のおくに、佛頂和尚山居の跡あり。

堅横の五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩に書付け侍りと、いつぞや聞え給ふ。其の跡見んと雲岸寺に杖を曳けば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人多く道のほどうちさわぎて、おぼえず彼の麓に至る。山は奥あるけしきにて、谷道遙かに、松杉黑く、苔したゝりて、卯月の天今猶寒し。十景盡くる所、橋をわたつて山門に入る。さてかの跡はいづくのほどにやと、後の山によぢのぼれば、石上の小庵岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室を見るがごとし。

木啄も庵はやぶらず夏木立

と、とりあへぬ一句を柱に殘し侍りし。

殺生石　那須溫泉湯本附近。

清水ながるゝ　道のべに清水ながるゝ柳蔭しばしとてこそ立ち止りつれ（新古今集西行法師）

蘆野の里　那須郡蘆野町。

白川の關　福島縣磐城郡白河の附近にあり。

いかで都へ　たよりあらばいかで都へ告げやらむ今日白川の關は越えぬと（拾遺集・平兼盛）

三關　念珠（泉）・白川・勿來を東國の三關といふ。

是より殺生石に行く。館代より馬にておくらる。此の口付のをのこ、短册得させよと乞ふ。やさしき事を望み侍るものかなと、

野を横に馬ひきむけよほととぎす

殺生石は溫泉のいづる山かげにあり。石の毒氣いまだほろびず。蜂・蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほど重なり死す。又清水ながるの柳は、蘆野の里にありて田の畔に殘る。此の所の郡守戸部某の、此の柳見せばやなど、折々にのたまひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日此の柳のかげにこそ立ちより侍りつれ。

田一枚うゑて立去る柳かな

白　川

心許なき日かず重なるまゝに、白川の關にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へと便り求めしもことわりなり。中にも此の關は三關の一にして、風騷の人心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤に

秋風を　都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關（後拾遺集能因法師）

紅葉を　都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の關（千載集、源頼政）

古人冠を正し　竹田大夫國行の故事。

清輔　藤原氏二條天皇の頃の歌人。續詞花和歌集撰者。

阿武隈川　奥羽地方の東南部を流る。

會津根　磐梯山。福島縣岩代郡。

岩城・相馬・三春の庄　岩城

して、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとゞめおかれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな　曾良

とかくして越え行くまゝに、あぶくま川を渡る。左に會津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸・下野の地をさかひて山つらなる。かげ沼と云ふ所を行くに、今日は空曇りて物影うつらず。ずか川の驛に等躬といふものを尋ねて、四五日とゞめらる。先づ白川の關いかにこえつるやと問ふ。長途のくるしみ身心つかれ、且は風景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。

風流のはじめやおくの田植うた

無下にこえんもさすがにと語れば、脇第三とつゞけて三卷とな

は平町を、相馬は中村町を、三春は三春町を中心とする地方。何れも福島縣にあり。
かげ沼　福島縣岩瀬郡須賀川町の南方。
須賀川　白河より二十六粁。
等躬　須賀川の人、相良氏。通稱伊右衛門。芭蕉の弟子。
僧　可伸。俳號は栗齋。等躬の詩友。
鹽がまの明神　宮城縣宮城郡鹽釜町の西北今國幣中社。
國守　伊達政宗。
文治三年　後鳥羽天皇の御

しぬ。此の宿の傍に大きなる栗の木蔭をたのみて、世をいとふ僧あり。橡拾ふ深山もかくやと閑に覺えられて、ものに書付け侍る。其の詞、

栗といふ文字は、西の木と書きて西方淨土に便ありと、行基菩薩の、一生杖にも柱にも此の木を用ひ給ふとかや。

世の人の見付けぬ花や軒の栗

松島

早朝、鹽がまの明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九仞に重なり、朝日あけの玉がきをかゞやかす。かゝる道のはて、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ、我が國の風俗なれといと貴けれ。神前に古き寶燈有り。かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の俤、今目

代（一八四七）
和泉三郎　藤原秀衡の三男忠衡。父の遺命により義經に味方し、兄泰衡に殺さる。
松島　宮城縣宮城郡。
雄島の磯　松島灣内竹浦の東南、御島ともかく。歌枕。
洞庭・西湖　洞庭湖は支那湖南省、西湖は浙江省にあり。
浙江　浙江省にあり。錢塘江ともいふ。
大山つみ　大山津見神。伊弉諾・伊弉冉二神の御子。山を司る。

の前にうかびてそゞろに珍らし。彼は勇義忠孝の士なり。佳名今に至りてしたはずといふ事なし。まことに人能く道を勤め義を守るべし。名もまた是にしたがふと云へり。日既に午にちかし。船をかりて松島にわたる。其の間二里餘、雄島の磯につく。

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に耻ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數をつくして、欹つものは天を指さし、伏すものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり三重にたゝみて、左にわかれ右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。其の氣色窅然として美人の顏を粧ふ。ちはやぶる神の昔、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を盡くさん。

雲居禪師 京都妙心寺の僧。寛永十三年伊達忠宗に聘せられて瑞巖寺を中興す。萬治二年（一三一九）寂、年七十八。

別室 把不住軒といふ亭。

素堂 山口信章、芭蕉の友人。

原安適 江戸深川の醫師。芭蕉の友人。

濁子 中川氏。美濃の人。芭蕉の門人。

瑞岩寺 松島村松島にある妙心寺派の寺

眞壁平四郎 僧名法身。入宋歸朝の後、北條時賴の命により入山。

雄島が磯は地つゞきて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有り。はた、松の木蔭に世をいとふ人も稀れ稀れ見え侍りて、落穗松笠など打ちけぶりたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とはしられずながら、まづなつかしく立寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求むれば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほととぎす　曾良

予は口をとぢて眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり、原安適、松がうらしまの和歌をおくらる。袋を解いてこよひの友とす。かつ杉風・濁子が發句あり。

十一日、瑞岩寺に詣づ。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す。其の後に雲居禪師の德化に依つて、七堂

見佛聖 見佛上人。鳥羽天皇の頃雄島に庵居せし高德

平泉 岩手縣西磐井郡、

あねはの松 岩手縣栗原郡澤邊村にありきと。

緒だえの橋 宮城縣志田郡古川町にある小板橋。

雉兎・菊蕊 孟子、梁惠王下「文王之囿方七十里、芻蕘者往、雉兎者往。」

石の卷 宮城縣牡鹿郡。

こがね花咲く すめらぎの御代榮えむとあづまなるみちのくやまにこがね花さく

甍改りて金壁莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼の見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。

平泉

十二日、平泉と心ざし、あねはの松・緒だえの橋など聞傳へて、人跡稀に、雉兎・菊蕊の往きかふ道そこともわかず、終に路ふみたがへて石の卷といふ港に出づ。こがね花咲くとよみて奉りたる金花山海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて竈の煙立ちつゞけたり。思ひがけず斯る所にも來れるかなと、宿からんとすれど更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又しらぬ道まよひ行く。袖のわたり・尾ぶちの牧・まのの萱はらなどよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸井廻といふところに一宿して平泉に至る。其の間廿餘里程とおぼゆ。

（萬葉集、大伴家持）

金花山　牡鹿半島の東南の小島。

袖のわたり　北上川に臨み、石巻の北にあり。歌枕。

尾ぶちの牧　石巻の東にありし牧場。

まのの茅はら　歌枕。石巻の東北。

戸井麻　歌枕。今の登米郡登米町。

三代　藤原清衡・基衡・秀衡。

金雞山　高館の西南。

高館　衣川館。平泉驛の北。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野に成りて、金雞山のみ形を殘す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。偖も義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな　曾良

兼て耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢と成るべきを、四面新たに圍んで、甍を覆うて風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはな

衣川　平泉の北を東流し、高館の北にて北上川に合す。

和泉が城　和泉三郎の居城

泰衡　秀衡の二男。

衣が關　關趾　衣川の東北にあり。

南部口　平泉地方より盛岡地方へ通ずる關門。

國破れて　國破山河在ル城春草木深シ感時花濺レ涙恨レ別鳥驚レ心

烽火連三月ニ家書抵ル萬金白頭搔ケバ更ニ短シ渾ベテ欲レ不レ勝レ簪ニ（杜甫）

甍屋　棕尾十

れり。

五月雨のふり殘してや光堂

尿前の關

南部道遙かにみやりて、岩手の里に泊る。小黑崎・みつの小島を過ぎて、なるこの湯より尿前の關にかゝりて、出羽の國に越えんとす。此の道、旅人稀なる所なれば、關守にあやしめられて、漸うとして關をこす。大山をのぼりて日既に暮れければ、封人の家を見かけて舍りをもとむ。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿するまくらもと

あるじの云ふ、是より出羽の國に大山を隔てて道さだかならざれば、道しるべの人を賴みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて人を賴み侍れば、究竟の若者、反脇差をよこたへ、樫の杖を携へて我々が先に立つて行く。けふこそ必ず危き目にもあふべき日

郎兼房。義經の老臣。白髮を亂して奮戰こゝに死す。

經堂 天仁二年（一七六九）清衡の建立。

光堂 又金色堂。天仁二年清衡の建立。

三將・三代 清衡・基衡・秀衡。

三尊 彌陀三尊。

岩手の里 宮城縣玉造郡。平泉より西南五十六粁餘。

小黑崎・みつの小島 共に岩手山より鳴子に至る沿道の小驛。

なるこの湯 今の鳴子溫泉玉造郡溫泉村

尿前 鳴子の

なれと、辛き思をなして後について行く。あるじの言ふにたがはず、高山森々として一鳥聲きかず、木の下闇茂りあひて夜行くがごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏分け踏分け、水をわたり岩に蹶きて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せしをのこの云ふやう、此の道必ず不用の事有り、恙なう送りまゐらせて仕合したりと、悅びてわかれぬ。跡に聞きてさへ胸とどろくのみなり。

立石寺

山形領に立石寺と云ふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に淸閑の地なり。一見すべきよし人々のすゝむるによりて、尾花澤よりとつてかへし、其の間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。麓の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音きこ

西二粁、舊驛。

大山 鳴子より羽前へ越ゆる中山越といふ山路。

一鳥聲きかず 一鳥不レ鳴山更幽。（王安石）

雲端に土ふる 已入二風埃一霧二雲端一（杜甫）

最上の庄 山形縣最上郡新庄。

立石寺 山形縣東村山郡山寺村。天台宗。

慈覺大師 名は圓仁。天台第二の座主。

尾花澤 山形縣北村山郡。

ごてん 御殿林。山形縣東田川郡。

はやぶさ 隼

えず。岸をめぐり岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみおぼゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

最上川

芭蕉旅行地圖（其二）

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。ごてん・はやぶさなど云ふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。これに稻つみたるをや稻舟といふならし。白絲の瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人堂岸に臨みて立つ。水みなぎりて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

の瀧・東村山郡鹽川の北。**板敷山** 山形縣最上・東田川兩郡の界。**酒田** 山形縣飽海郡酒田港。**稻舟** 最上川のぼればくだる稻舟のいなにはあらずこの月ばかり（古今集、東歌）

白絲の瀧 最上川四十八瀧中、最も著名なるもの。**仙人堂** 最上郡古口村外川にあり。義經の臣常陸房海存を祀ると。**五月雨を** 最上川はやさぞまさる雨雲ののぼれば下る

象潟

江山水陸の風光數をつくして、今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごをふみて、其の際十里、日影やゝかたぶく頃、汐風眞砂を吹上げ、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に摸索して、雨も又奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蜑の苫屋に膝をいれて、雨の晴るゝを待つ。其の朝天能く霽れて、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟を浮かぶ。先づ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡を訪らひ、むかふの岸に舟を上れば、花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ。寺を干滿珠寺と云ふ。此處に行幸ありし事いまだ聞かず、いかなる事にや。

此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其の蔭うつりて江にあり。西はむやむやの關

五月雨の頃。（兼好法師集）**象潟** 秋田縣由利郡鹽越村。**鳥海の山** 山形縣飽海郡の北境の山。**雨も又奇** 水光瀲灩晴偏好、山色空濛雨亦奇。（蘇東坡）**能因島** 能因法師の住みし所といふ。**花の上こぐ** きさがたの櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつりぶね（西行の歌と傳ふ）**干滿珠寺** 蚶滿寺。延曆中、慈覺大師の建立。今曹洞宗。**むやむやの關**

路をかぎり、東に堤を築きて秋田に通ふ道遙かに、海北にかまへて浪打ち入る所を汐ごしと云ふ。江の縱横一里ばかり、俤松島にかよひて又異なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはへて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

佐渡

酒田の名殘日を重ねて、北陸道の雲に望む。遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國一ぶりの關に到る。此の間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天の川

山形縣飽海郡と秋田縣由利郡との境なる三崎峠にありしと。歌枕。

象潟や 前掲蘇東坡の詩の後聯、若把二西湖一比二西子一、淡粧濃沫總相宜。

西施 支那越の國の美女。

加賀の府 石川縣金澤市。

關の關 山形縣西田川郡念珠ケ關村。

一ぶりの關 市振關。實は越中境なる越後の地。

卯の花山 富山縣礪波郡藪波村の南にあり。

くりからが谷 石川縣と富山縣の境にあり。

金澤

卯の花山・くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日なり。爰に大阪よりかよふ商人何處といふ者あり。それが旅宿を俱にす。一笑と云ふものは此の道にすける名のほのぼの聞えて、世に知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其の兄追善を催すに、

塚も動け我が泣く聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて、

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中吟、

あかあかと日は難面もあきの風

全昌寺

曾良は腹を病みて、伊勢の國長島といふ所にゆかりあれば、先立ちて行くに、

縣の境にあり。

何處 猿蓑集中の作者。姓名不詳。

一笑 金澤の人、小杉氏、通稱茶屋新七、芭蕉の門人。元祿元年一月十六日歿、年三十六。

長島 三重縣桑名郡長島村。

ゆきゆきて いづくにか眠り眠りて倒れふさんと思ふ悲しき道芝の露（山家集）

雙鳧の 雙鳧俱北飛。一鳧獨南翔。子當留二斯館一、我當レ歸二故鄉一（漢書、蘇

ゆきゆきてたふれ伏すとも萩の原　曾良

と書置きたり。行くものの悲しび、殘るもののうらみ、雙鳧のわかれて雲にまよふが如し。予も亦、

けふよりや書付消さん笠の露

大聖寺の城外、全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地なり。曾良も前の夜此の寺にとまりて、

終宵秋風聞くやうらの山

芭蕉旅行地圖（其三）

と殘す。一夜の隔て千里に同じ。吾も秋風を聞きつゝ衆寮に臥せば、明ぼのの空近う讀經聲すむまゝに、鐘板鳴つて食堂に入る。けふは越前の國へと心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙・硯をかゝへ階のもとまで追ひ來る。折ふ

武別三李陵一詩）

大聖寺 石川縣江沼郡大聖寺町。

全昌寺 大聖寺町の南方にある禪宗の小寺。

種の濱 福井縣敦賀郡敦賀灣の西岸。

ますほの小貝 汐染むるますほの小貝ひろふとて色の濱とはいふにやあるらむ（山家集）

天屋何某 姓名不詳。俳名大翅なるものの祖父なりと。

法華寺 日蓮宗の寺。

路通 忌部氏。美濃の人。芭蕉の門人。

し庭中の柳ちれば、

庭掃いて出づるや寺に散る柳

とりあへぬさまして草鞋ながら書捨つ。

種の濱

十六日、空霽れたれば、ますほの小貝拾はんと、種の濱に舟を走らす。海上七里あり。天屋何某と云ふもの、破籠・小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時のまに吹きあげぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、侘しき法華寺あり。爰に茶を飲み酒をあたゝめて、夕ぐれのさびしさ感に堪へたり。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

浪の間や小貝にまじる萩の塵

大垣

路通も此の湊まで出むかひて、美濃の國へと伴なふ。駒にたす

大垣庄 岐阜縣大垣市。

越人 越智氏。越後の人。名古屋に住し芭蕉十哲の一人。

如行 近藤氏。大垣藩士、芭蕉の門人。

前川子 津田氏。大垣の人。芭蕉の門人。

荊口 宮崎氏。又東宇とも號し大垣藩士、蕉門の老參。子に此筋・千川・文鳥あり。

蛤の 今ぞ知る二見の浦の蛤を貝合せとておほふなりけり（山家集）

けられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より來り合ひ、越人も馬をとばせて、如行が家に入り集る。前川子・荊口父子、其の外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふが如く、かつ悦びかついたはる。旅のものうさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮拜まんと又舟にのりて、

蛤のふた見にわかれ行く秋ぞ

あやめ草足に結ばん草鞋の緒　芭蕉

暑き日を海に入れたり最上川　同

むざんやな甲の下のきりぎりす　同

石山の石より白し秋の風　同

月清し遊行のもてる砂の上　同

曾我會稽山　一册。近松門左衛門の著。享保三年七月初めて興行す。「國姓爺合戰」「雪女五枚羽子板」と共に近松の三傑作と稱せらる。

近松門左衛門　本名杉森信盛。新淨瑠璃の創始者。享保九年（一七二四）歿、年七十二。

富士の御狩　建久四年（一八五三）。

祐成　曾我十郎。幼名一萬。伊東祐泰の子。父の死後曾我祐信に養はる。建久四年歿、年二十二。

三　曾我會稽山

近松門左衛門

名に高き富士の裾野の御狩の御遊、鎌倉の騷動にて、急ぎ歸御あるべしとの時刻も雨に事延びて、假屋の騷ぎもいつしかに、辻の篝も影薄く、晝の疲の手枕に、短き夜半を鐘の聲、夢より夢を結びけり。

時節よしと曾我殿原、出立つ祐成が裝束は、母上より給はりし、秋の野に草盡し縫うたる練貫の單衣、村千鳥の直垂の袖を結んで肩にかけ、黑鞘卷の太刀を佩き、竹子笠の紐強く、上に下部の青合羽、陣松明に道照らさせ、先に進めば五郎時致、是も母より給はつたる、白綾に鶴の丸縫うたる袷、揚羽の蝶の直垂、赤木の柄の腰差、源氏重代友切丸、肩に打ちかけ紙合羽、しめたる笠の怯れじと、後に續いて出立つたり。

二。時致　幼名筥王。兄と共に父の復讐を遂げて死す。年二十。

友切丸　源頼光以來の源家の重寶。

御寮　頼朝公。

蒲殿　源範頼。

祐經　工藤左衛門尉祐經。伊東祐次の子

天魔　第六天の魔王。其の名を波旬といふ。無量の眷屬あり。常に佛道を障礙す。破旬は梵語の轉訛。殺者惡者と譯す。

いかに時致、母の御恩を徒らに、今宵敵を討たずんば、不幸といひ世の人口、生きたる甲斐もあるまじきに、天の惠か降る雨に、御寮の御立ちは延引す、狩場の用意も事靜まる、殊には蒲殿の貸し給はつたるこの割符、頼朝公の膝元へも、通路自由と聞くなれば、祐經を討つは案の内、雨はいつも降りながら、今宵の雨ぞ身には染む、討死せしと聞えなば、思ひ切つたる御心にも、母の歎はいかばかり、悲しさよと涙ぐむ。仰にや及ぶべき、祐經は籠中の鳥、網代の魚、やはか洩し候べき、恐らくはこの時致、天魔破旬に出合ふとも、ちつとも怯まぬ魂、今宵の雨は身にかゝり、そつこん徹つてわぢわぢと、物悲しう罷りなる、敵に出合ひ働かば、所々の死を遂げんも計られず、最期の盃一つ飲うで給はれと、腰に付けたる懸烏帽子に、降來る雨を受溜めて、祐成が手に渡せば、なう、七度結びて兄となり六度契りて弟となると傳へ聞く、死に變り生き變り兄

秩父　秩父の住人畠山重忠。**本田次郎**　重忠の臣。一谷の戰に戰功ありし人。

弟の緣は切るまじと、さらりと乾して指しければ、時致とつて押戴き、兄は親にて候へば、母上の御盃も是に籠り、天の甘露、仙家の漿、この酒に勝らんやと、受けて飲みけるその中に、五月雨のいつか一しきりおだやみて、空さりげなく清々と、北斗の光鮮かに晴れ渡る。斯る所に假屋俄に騷ぎ立ち、お先手は發足の御觸あり、馬よ鞍よと犇けば、兄弟彌氣も急かれ、祐經が假屋とてもさぞあらん、これ迄忍びし甲斐もなく、此の雨の降止む事、神明にも見放され、よつく武運に盡きしかと、拳を握り齒を鳴らし、虛空を睨んで立つたる所に、秩父の執權本田の次郎近經、小具足に身を固め、本陣の夜廻りしてけるが、曾我殿原と見るよりも近々と歩み來る。

兄弟誰そと咎むれば、波に搖らるゝ沖津船、知る邊の磯は此方ぞと、囁く聲に祐成はつと嬉しく、重忠公の御情、又は御身の御懇情、この度に限らねども、御禮申す事もなく、禮儀知らずとや思さ

會稽の恥　越王勾踐の父、吳王闔閭に破らる。勾踐因りて闔閭を破る。闔閭の子夫差勾踐を會稽山に破り、勾踐和を乞ふ。之を會稽の恥といふ。其の後勾踐、范蠡を謀臣とし、臥薪嘗膽の苦を積み、遂に夫差を敗りて會稽の恥を雪ぐ。**伊東**　名は祐親。曾我兄弟の祖父。

れん、今宵年來の大望達せんと存ずる所、俄に雨晴れ假屋假屋は出足の用意、この騷ぎには覺束なし、この儘歸つていつの時をか期すべき、無二無三に切込んで、兄弟屍を晒す所存、重忠公へ一生積る御禮は、貴殿の執成賴み入ると言ひければ、兄弟の耳に口を寄せ、氣遣ひばしし給ふな、祐經は明日君の御馬の御供、それ故假屋も寢靜まる、此方へ此方へ靜かにと、道の案內の杖柱、嬉しさ類ひはなかりけり。是こそ祐經が臥床なり、心靜かに本意を遂げ、會稽の恥を雪がれよと、いと懇ろの詞に縋り、御案內の程、五百生の體を燒くともいかでか報じ盡くすべき、隨つて通路のこの割符、蒲殿より密かに拜借せしかど、御切腹のあとなれば、返辨申さん樣もなし。我々が死骸にあれば、蒲殿こそ御勘氣の伊東が末の曾我に與し、反逆の族よと、死後の虛名に御骸を瀆さん事、御恩を却つて仇にて報ずる理、近經殿に預け置く、然るべく賴み存ずると、

二枚の小札を手に渡せば、尤も尤も、近經に任されよ、主人重忠惡しくは計らひ申されまじ、老母の事もゆめゆめ麁略候まじ、今暫くと存ずれども、役目なれば知らぬ顏、弓矢の禮儀これまでと、本田は假屋に入りにけり。

今は何をか期すべきと、兄弟合羽なぐり捨て、本田が教へし敵の假屋は是なりと、木戸・駒寄せを飛超え跳超え、兄弟莞爾と打笑ひ、天にも上る心地にて、難なく臥床に討つて入る。次に臥したる宿直の侍、足音に目を覺し、すは盜人よと呼ばはつて逃出づる。假屋假屋に聞付けて、そりや盜人よ御立ちよと、騷ぎの上に又混亂、相圖響かす大鼓・鉦、かんかんどんどん、どんくさい、又雨が延びて來たお立ちが降ると入るもあり、雨の足音さつさつさ、人の足音どろどろどろ、右往左往にもてかへす。其の隙に兄弟は、敵工藤祐經を思ひのまゝに討ちおほせ、門外に走り出て、袂を絞つて喉を

河津の三郎
名は祐泰
工藤家次

- 工藤祐家
- 伊藤祐親
- 河津祐泰
- 曾我祐成
- 曾我時致
- 伊東祐次
- 工藤祐經

濕し、勢猛に立つたりし、心のうちこそ嬉しけれ。

かくて二人等しく大音上げ、伊豆の國の住人伊藤の次郎祐親の孫、河津の三郎が二人の子、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致、親の敵工藤左衞門祐經を討留めたり、賴朝公の御内に弓取はなきか、折合ひて打留めよと呼ばはつて邊を睨んで控へたり。

闇さは暗し雨は降る、假屋假屋にすは夜討と、弓一挺太刀一振に、五人三人取附いて、我よ人よと奪ひあひ、繫ぎ馬に鞭打つて、遲しとあせる所も有り、鎧に辷り兜に躓き、小手を臑當、草鞋を笠、上を下へと犇けば、それ松明出せと呼ばはつて、二千軒の假屋より、箙・靫・箙・竹笠・傘・箒に至るまで、火を付けて投出す。裾野の暗は忽ちに、百千の朝日影、一度に照らす如くなり。騷ぎの中より名乘掛け名乘掛け切つて出づれば、兄弟は小柴垣を小楯に取り、入れ替へ入れ替へ名乘替へ、火花を散らして雨まじり、揉立て揉立て戰ひ

人穴　富士西北の裾野、人穴村にある溶岩の洞穴。
仁田の四郎　新田忠常、四郎と稱す、伊豆の人。頼朝に仕へて親近せらる。

ける。腕首切られてひくもあり、頬先・肩先・尻こぶた、弓手の太股、馬手の足首、矢場に切られて死するもあり。されども兄弟薄手も負はず、血氣に進む時致は、假屋の人種たやさんと、御所の間近く切つて入り、祐成は柴垣の影に息をぞ休めける。

假屋假屋の松明も、降りくる雨に打消され、東西暗き木蔭より、緋縅の鎧着て、二尺餘の打刀、三尺五寸の大太刀横たへ、四十足らずの武者一人、のつさのつさと動ぎ出て、抑これは先年上意を蒙り富士の人穴に入つて、地獄の底まで名を顯はし、この度の狩倉には虎より猛き猪を乘留め、日本無雙を一天に輝かす、仁田の四郎忠常とは我が事、物々しき曾我殿原、思ふ敵は祐經一人、木の葉武者五十百切つたるとて何の益かある、仁田の四郎が手に懸り、御勘氣の者の末孫と、獄門の恥が受けたくば、いざ來いやつとぞ罵つたる。

おゝよい敵ござめり、仁田なればとて必ず勝つに極らず、人穴の地獄の鬼猪なんど相手にしたとは違ふべし、十郎祐成の手並を見よと打つて懸る。えゝ無分別者是非なしと、閃く太刀影、雨夜の星、電火を飛ばして切結ぶ。更に勝負もなかりし所に、花やかに鎧うたる武者一人、坂東聲を打揚げ、あら穢らはし、我が名を盜む曲者、高名を貪るか、伊豆の國の住人、仁田の四郎忠常とは我が事、見參せんと呼ばはつたり。祐成飛退り、六十餘州は廣けれども、頼朝の幕下に仁田ならで武士は無きか、あら仰々し、痩浪人一人か二人討たんとて、彼も仁田此も仁田、にたにたしき表裏者、二人ともに餘さじものと打つて懸る。

やあ後から出て仁田とは人眞似か、祐成は討たせじと懸隔たれば搔い潜り、打付くれば懸隔て、祐成一人に仁田は二人、入亂れて揉合ひしが、陽に開いて打つ太刀を、後の仁田が陰に閉ぢ、受流

して裾を薙ぐ。祐成が馬手の高股膝口かけて切落され、弓手ばかりの片足立、二打ち三打ち打つかひも、百手を碎く氣も弱り、犬居にどうと轉びしが、弟の時致はいづくにぞ、祐成こそ打たれたれ、死出の山にて待つべきぞ、言ふ事もこれまで、さあいづれなりとも首を打て、臆れたるかと聲懸くる。いや討手の實否紛らはしく、黄泉の障も悼はしし、誠の仁田が面を見せ、名字盜みを面縛させん、松明出せと呼ばはれば、忠常が下部ども、提灯取つて差上ぐる。

仁田と仁田が顔さし合はせ、やあ二の宮、以前仁田と名乘りつるは御邊よな、さて淺間しや、やい、兎死すれば狐是を悲しむとは、同じ類に禍の來らんことを悼む故、元緣者の端くれ、御咎の飛ばしる掛らん事を痛み、祐成を討つて一味せぬ身の言分とは、はて能い思案、女房を離別せしは他人に成つて、兄弟が力とならん心底、尤も斯くあるべき事と感心せしに、さては立身の爲の離別か、

獼猴が云々
愚人が賢者を罵る譬。帝釋天は佛敎に所謂六欲天の第二天（忉利天）の主にて須彌山の頂に居るといふ。

御分別御分別、由なき仁田呼ばはりが奇怪さ、思はず駈合はせ、あつたら若者を手に懸けし殘念さよと、大きに怒つて恥ぢしむる。

二の宮からからと笑ひ、獼猴が帝釋天を嘲るとやら、己が足らざるを以て、人の大智を計らんとして、却つて愚痴が顯はるゝ、二の宮が曾我を討たんと思はば、けふまで何の待つべきぞ、慇か功ある男子と思ひ、名字を借つて追散らし、某他人になつたる德、天下晴れて匿ひ置き、時節を待つて世に出さんと、手を取つて引かぬばかりにあしらへども、祐成たじろかねば詮方なし。手柄はしたし怖くはあり、二の宮が聲を後楯に駈合はせ、溢れ幸、指果報、あつたら若者を思はず討つて殘念などとは、義を知つた武士の言ふこと、猪に乘つて高名とする、獵師風情の言分には、過ぎた過ぎたと言はせも敢へず、やあ小舅をしとめんとする程の不仁もの、武士の情は存じも寄るまい、祐成が首は御邊急ぎ討つて手柄に

せい。いや人に貰うて手柄にする安清ならず、御邊討つて手柄にせい。いや二の宮討て、仁田討て、二の宮討てと責めかけられ、おゝ小舅の曾我を討つ刀、二の宮は持合はせず、これで討てれば御邊討てと、祐成と切合はせし、太刀をからりと投出す。

忠常おつ取り、提灯に透して見ればこは如何に、物打より切先まで刃を石にてたゝき潰し、打ちみしやいだる槌同前、むゝ最前よりこの太刀にて打つ眞似したるか、あつあ賴もしとも優しとも、弓矢取る身の手本ぞや、雜言御免二の宮殿、それこそ互、惡口御免、仁田殿、和殿の如く情ある友を持つたる五郎・十郎、御分の如く誠ある緣者を持つたる曾我殿原、一生花實も咲かざりし、天運の拙さよと、二人不覺の落涙に、鎧の袖をぞ絞りける。

今を限りの祐成起直り、緣者と申すも元は他人の二の宮殿、よしみなき仁田殿御芳志は、五百生生き變り死に變るとも忘るま

じ、御手に懸り討たるゝこと、祐成はなんぼう果報の者、首討つてたべ疾く疾く、といへども二人涙に暮れ、さし俯いて居るところに、御所の方より聲々に、曾我の五郎時致、御前近く亂れ入り、御所の五郎丸が組みとめ、御假屋安穩なりと呼ばはる聲に、祐成、あれ聞き給へ、時致は召捕られしとや、祐成が最期いかにと案ずべし、疾く首討つて、兄が最期清かりしと、悅ばせてたべ仁田殿賴み入る、南無阿彌陀佛、彌陀佛と、首さし伸べて目を閉づる。

名ざしの上は承る、御心易かれと、太刀拔持つて後に廻り、振上ぐれば、祐成が首は前にぞをちかたに、はや曉の八つの鐘、鳥も啼く啼く人も泣く、ねをなく千鳥の直垂に、首よ涙よ包みても、洩れて名高き富士の嶽、曾我兄弟が會稽山、骸は裾野に埋めども、譽は三穗の松の風、他の國まで吹傳へ、昔語を今の世の、人のねぶりを覺しける。（曾我會稽山）

會我會稽山
曾我兄弟の復讐を骨子として作れる淨瑠璃。

芥川龍之介　東京帝國大學英文科出身。俳號我鬼、小說家。昭和二年歿、年三十六。

崔山　渡邊氏。通稱は登。名は定靜。三河國田原侯の臣。幕末の志士・畫家。天保十二年（一八四一）歿、年四十八。

八犬傳　南總里見八犬傳。百六卷。

二三　太郎

芥川龍之介

崔山が歸つた後で、馬琴はまだ殘つてゐる興奮を力に、「八犬傳」の稿を續けるべく、平生のやうに机に向つた。先を書續ける前に、昨日書いた所を一通り讀返すのが、彼の昔からの習慣である。そこで、今日も彼は細い行の間へ、べた一面に朱を入れた何枚かの原稿を、氣を付けてゆつくり讀返した。

すると、何故か書いてあることが自分の心持とぴつたりしない。字と字との間に不純な雜音が潛んでゐて、それが到る處で全體の調和を破つてゐる。彼は最初それを彼の癇が昂ぶつてゐるからだと解釋した。

「今の俺の心持が惡いのだ。書いてあることは、どうにか書切れる所まで書切つてゐる筈だから。」

さう思つて、彼はもう一度讀返したが、調子の狂つてゐることは、前と一向變りがない。彼は老人とは思はれないほど、心の中で狼狽し出した。

「このもう一つ前はどうだらう。」

彼は其の前に書いた所へ眼を通した。すると、これも亦徒らに粗雜な文句ばかりが、雜然として散らかつてゐる。彼は更に其の前を讀んだ。さうして又その前の前を讀んだ。

併し、讀むに從つて、拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して來る。そこには何等の映像をも與へない敍景があつた。何等の感激をも含まない詠嘆があつた。さうして又何等の理路をも辿らない論辯があつた。彼が數日を費して書上げた何回分かの原稿は、今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に心を刺されるやうな苦痛を感じた。

弓張月 椿説弓張月三十卷。

南柯の夢 三七全傳南柯の夢。六卷。

端溪 支那廣東省にある硯石の名產地。

蹲踞 蹲まれる蹲（みづち）

「これは初から書直すより外はない。」

彼は心の中で斯う叫びながら、忌々しさうに原稿を向うへ突きやると、片肘ついてころりと横になつたが、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼は此の机の上で「弓張月」を書き、「南柯の夢」を書き、さうして今は「八犬傳」を書いた。この上にある端溪の硯、蹲踞の文鎭、墓の形をした銅の水差、獅子と牡丹を浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、さういふ一切の文房具は、皆久しい以前から彼の創作の苦しみに親しんでゐる。それらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな、彼自身の實力が根本的に怪しいやうな、忌はしい不安を禁ずることが出來ない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると人並に己惚の一つだつたかも

遼東の豕 遼東有レ豕、生レ子、白頭異而獻之、行至河東、見群豕皆白、懷慙還。（後漢書朱浮傳）

知れない。」

かういふ不安は、彼の上に何よりも堪へ難い、落莫たる孤獨の情を齎した。

彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜であることを忘れるものでないが、それだけに、又同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に飽くまでも不遜である。その彼が、結局自分も彼等と同じ能力の所有者だつたといふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことを、どうして易々と認められよう。而も彼の強大な「我」は「悟り」と「諦め」とに避難するには、餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破船の船長のやうな眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戰ひ續けた。若し此の時、彼の後の襖がけたゝましく開け

放されなかつたら、さうして、「お祖父様只今。」といふ聲と共に柔かい小さな手が彼の頸へ抱付かなかつたら、彼は恐らく此の憂鬱な氣分の中に何時までも鎖されてゐたことであらうが、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供だけが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よく飛上つた。

八犬傳抑絵

「お祖父様只今。」

「おゝ、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に「八犬傳」の著者の皺だらけの顏には、別人のやうな悅が輝いた。

茶の間の方では、癇高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が、賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から伜の宗伯も歸り合はせたらしい。太郎は祖父の膝に跨がりながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顏をして天井を眺めた。外氣にさらされた頰が赤くなつて、小さな鼻のまはりが息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅の小さな紋付を着た太郎は、突然かう言出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを怺へようとする努力とで、靨が何度も消えたり出來たりする。それが馬琴には自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日？」

「御勉強なさい。」
馬琴はとうとう噴出した。しかし、笑の中ですぐ又語を繼ぎながら、
「それから？」
「それから、えゝと癇癪を起しちやいけませんつて。」
「おやおやそれきりかい。」
「まだあるの。」
太郎は斯う言つて、絲鬢奴の頭を仰向けながら、自分も亦笑ひ出した。眼を細くして白い齒を出して、小さな醫を寄せて笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて世間の人間のやうな憐むべき顏にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながら、こんなことを考へた。さうして、それが更に又彼の心をくすぐつた。

「まだ何かあるかい？」
「まだね、いろんなことがあるの。」
「どんなことが？」
「えゝと、お祖父様はね、今にもつと偉くなりますからね。」
「偉くなりますから？」
「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」
「辛抱してゐるよ。」
馬琴は思はず眞面目な聲を出した。
「もつと、もつと、ようく辛抱なさいつて。」
「誰がそんなことを言つたのだい。」
「それはね。」
太郎は惡戲さうに、ちよいと彼の顏を見た、さうして笑つた。
「だあれだ？」

「さうさな、今日は御佛參に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰を擡げながら、顎を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「淺草の觀音樣がさういつたの。」

かう言ふと共に、この子供は家內中に聞えさうな聲で嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛退いた。さうして、うまく祖父をかついだ面白さに、小さな手を叩きながら、轉げるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心中に、嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは此の時である。彼の脣には幸福な微笑が浮かんだ。それと共に、彼の眼には何時か涙が一杯になつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が敎へてやつたのか、それは彼の問ふ所でない。この時この孫の口から斯ういふ語を聞いたのが不思議なのである。

「觀音樣がさう言つたか。勉强しろ。癇癪を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歲かの老藝術家は涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。（傀儡師）

十一月二十三日　辛未

八犬傳八輯一の卷の內、本文四丁之を稿す。尤も書おろしのみなり。こゝに至りて本文二十二丁まで殘らず稿し畢る。今夕例の如く四つ時就寢。（馬琴日記天保二年）

朝比奈知泉　元東京日日新聞主筆。評論家。
チョーサー　Chaucer (1340-1400)　英國の詩人。
スペンサー　Spenser (1552-1599)　英國の詩人。
ミルトン　Milton (1608-1674)　英國の詩人。
シェークスピア　Shakespeare (1564-1616)　英國の劇作家

二四　賴山陽

朝比奈知泉

徳川氏の季年は、それ猶歐洲第十七世紀の末葉の如きか。彼に在りては、文學再興して、古文辭その盛行の極に達したれども、近世國語の文辭は猶幼稚なるを免れず。我に在りては、戰國の餘習已に脫して、文教は靡然として海隅に遍く、漢土の儒學・詞藝その秀を鍾め、その華を競ひたれども、わが近世文學は纔かに萌芽を發したるのみ。若しこの時に方り、一世の偉才を生じて以て我が文學を振ふものあらんか、その風動は全國に影響して、感化は到る處に行はれ、或は奬勵せられ、或は誘導せられ、或は挑發せられて、才俊の士は彬々として輩出し、以て文藝の圃に遊ぶべく、我が文學の黃金時代は必ず三四十年前に來りしならん。

つらつら各國文運の振興を考ふるに、その先を作すものは大

ゲーテ　Goethe (1749-1832)　獨逸の詩人。
シルレル　Schiller (1759-1805)　獨逸の劇詩人
レッシング　Lessing (1729-1781)　獨逸の文學者批評家
ダンテ　Dante (1265-1321)　伊太利の詩人
ペトラルカ　Petrarch (1304-1374)　伊太利の詩人

抵詩人ならざるはなく、その衰を振ふもの亦詩人ならざるはなし。チョーサー・スペンサー・ミルトン・シェークスピアの英文學に於ける、ゲーテ・シルレル・レッシングの獨逸文學に於ける、ダンテ・ペトラルカの伊太利文學に於ける、皆然らざるはなし。乃ちわが文學を振へる張本も亦詩人に求めざるべからず。余は古體詩家に於て眞淵・景樹二翁を得、近體詩家に於て近松・竹田二叟を得たれども、出づるに或はその時を得ず、學或はその道に適せず、才或はその志に合はず。是を以てその勢力の及ぶところ局限せられて、未だ文學の全體に向つてその積衰を振ふこと能はざりしを見る。余はかの諸家の外に於て、その才學よく權度を得て、恰當の時世に遭遇しながら、稀世の偉才を抱いてその用處を誤りたるが爲に、日本文學の泰斗たる名譽を得そこなひ、徒らに史家なり、策家なり、文家なり、詩家なりといはれたるのみにて、冠するに絕

眞淵 賀茂氏。號は縣居。前出。
景樹 香川氏。號は桂園。天保十四年（一五〇三）歿、年七十六。
近松 通稱門左衛門。號は巢林子。前出。
竹田 初代出雲掾の子。
賴山陽 名は襄。字は子成、久太郎と稱す。安藝の人。天保三年（一四九二）歿、年五十三。
老博士 儒者榮野栗山。文化四年（一四六七）歿、年七十四。

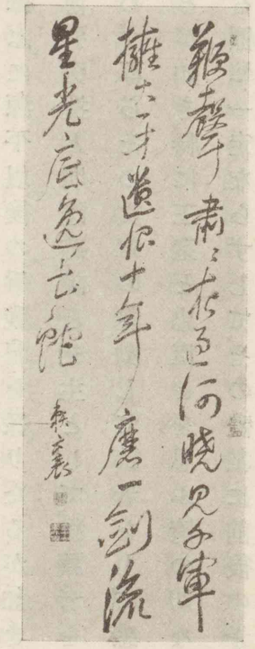
世・絶代の文豪を以てせらるゝに至らず、萬能達して一心足らず。」といふが如き嘲をも受くるに至りたる一人物を發見し、未だ曾てその人と、その才とを痛惜せずんばあらず。余は今日世人が猶その人を崇拜するを見て、聊か自ら慰むる所なきにしもあらずといへども、退いてこれを再考すれば、更に深く惜しむ所なかるべからず。その人を誰とかする。山陽賴氏是なり。

「詩は別才なり。」といひ、「詩人は生る、成るにあらず。」といふは、東西一般の金言なり。今山陽の一生を考ふるに、その性格といひ、その言行といひ、その著作といひ、一として詩ならざるはなし。その童歳に當り、夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり。その父母を懷ふに厚く、その王室を懷ふに厚く、天下・國家を懷ふに厚く、情の熱するところ、常に理の冷かなるに勝ちたるは詩なり。その北馬南船、行李卸さざるところなく、春花秋月、遊屐遍からざるところ

政記 日本政記。十六卷。神武天皇より後陽成天皇に至る二千二百年間の編年史。
外史 日本外史。二十二卷。源平二氏より德川氏に至る武家諸代の歷史。
山陽筆蹟 鞭聲肅々夜過ル河。曉見千軍擁ス大牙。遺恨十年磨ス一劍。流星光底逸ス長蛇。賴襄

なきは詩なり。その畛域を撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王侯に接するは詩なり。山陽の性格・言行、誰かこれを詩にあらずといはん。

試にその著作の史篇を見よ。政記の一書は固より多とするに足らず。外史何の取る所ぞ。その議論は平凡のみ。その事實は謬誤のみ。その體裁は偏失のみ。然れどもその筆墨の靈妙活動、殆ど天馬空を行く趣あり。敍事或は精、或は疎、或は短、精にして長なるときは、微として穿たざるなく、細として及ばざるなし。疎にして短なる時は、或は脈々の餘情を含み、或は嫋々の餘韻を



山陽筆蹟

存す。爭戰を敍すれば讀者をして汗を握らしめ、別離を敍すれば讀者をして涙に咽ばしむ。而してその敍論の如き、俯仰低回、感慨淋漓、誠に讀者をして一唱三歎せしむるものあり。是等の文字、是等の思想、果して如何なる天才より流出したるものぞ。その題目を擇ぶに源平以後の爭戰記を採りたるが如き、その事實に於ては博引旁搜と明證確說とを主として、猶讀者を了悟せしむるを務めず、專らその文章の靈動して讀者をして感激せしめんとしたるが如き、特に王室と忠臣とを思ふ情の切なるより、正記を立つる標準一定ならずして、その體裁に前後の矛盾を來せるを顧みざりしが如き、半生の精力を費して編述したる二十二卷の外史は、看來れば一篇無韻の敍事詩たるのみ。

試にその論策・文章を見よ。民政といひ、市糴といひ、水利といひ、邊防といひ、迂疎空濶にして實用に施すべからざるもの比々と

今樓　花よりあくるみ吉野の、春の曙見渡せば、もろこし人も高麗人も、大和心になりぬべし。

して皆是なれども、その熱情の溢れたる、その文勢の壯なる、頗る少年の大聲放語するに似たるものあり。而して外史以前の文章に就きてその精華を求むるに、その寸鐵人を殺すの妙、多くは小品の文字にあり。その形體は卽ち論策たり、文章たり。その本質は卽ち想像のみ、詩詞のみ。去りてその詩を見よ。雄健なるものあり、典雅なるものあり、遒麗なるものあり、輕妙なるものあり。而してその最長を見るは歌行にあり、樂府にあり。料を史傳に取りてこれを詩詞に寓したるものにあり。山陽亦自ら以て得意とし、「余不欲詠物。詠物不若詠史。史中有無數好題目。隨讀淺深皆可成眞詩。舍之而曰雁字鷺梭無爲也。」とはその平常の持論なりき。亦以てその才の日本の文學を振ふに足りしを見るべきなり。余嘗てその戲に作れる今樣を讀み、その跌宕飄逸、自ら不群の趣あるに服し、思へらく、この詩才に加ふるに彼の史傳の嗜好あり。もし馳騁縱横、

李北地 名は夢陽。明代復古學の大家、詩人。
嚴海珊 名は遂成。海珊はその號。清の詩人。

奇想を天外に飛ばし、その事實に拘泥することなく演義述作する所あらしめば、その造詣何ぞ唯、李北地・嚴海珊にして止まんや。わが史傳は未だ多く題詠に入らず。潛心好案を求め、研精妙句を探り、その外史に灑ぎたる心血を傾倒して、これを詩賦に注がんか、儼然たる敍事詩を作りて、わが文學世界を風靡せんこと難からざりしならん。惜しいかな、漢土の詩に僻して固有の天才を萎縮し、經濟の學に志を奪はれて專ら功力を詩に用ひざりしこと。

余が山陽の專ら詩人とならざりしを惜しむ理由頗る多し。今且く之を擧げんか。詩は別才なり。而して詩才敏妙、その天稟に出づ。これ一なり。詩人は料を取るに自ら新機軸を求むべし。而して史傳を以て料とすることその卓識に發す。これ二なり。詩人は愛情の熱肺腸なかるべからず。而して尊王の誠と忠臣義士を思ふ情とは、面に溢れて背に浹し。これ三なり。而して余が特に表彰せ

江木鰐水 名は戩、山陽の門人。明治十四年歿、年七十二。
前兵兒謠 衣至レ肘、袖至レ腕。腰間秋水鐵可レ斷。人觸レバ斬レ人、馬觸レバ斬レ馬。十八結レ交健兒社。北客能來何以酬。彈丸硝藥是膳羞。客若不ニ鬨壓。好以ニ寶刀一加ニ彼頭一。
蒙古來 日本樂府の一。弘安四年蒙古人寇の事を詠じたるもの。
古賀穀堂 名は壽。佐賀藩

ざるべからざる第四の理由あり。余曾て江木鰐水の作りたる山陽先生行狀を讀み、その「常曰『謂ニ我才子一未レ悉レ我者也。謂ニ我能刻苦一者、眞知レ我矣。』」といふに至り、竊にその實を失へるにあらざるかを訝りしが、後、かの「前兵兒謠」並に「蒙古來」の原稿を見るに及び、その苦心經營一句も苟もせざりし實跡を審にし、かつその古賀穀堂を訪ひ、初、その千言立ちどころに成る敏才に驚きしが、數月を隔てて再び訪ひたる時、その文稿の依然として改刪する所なかりしを見て、茲に與し易きのみの念を起したりしといふ逸事を聞き、その意匠慘澹、勉勵刻苦の勞を厭はざる忍耐あるを明認し、坐ろに景慕の情を催したり。蓋し創意の才は必ず刻苦の力と相俟ちて後、始めて絢爛の華彩を發すべし。余が山陽を惜しむ第四の理由とするは、即ち斯の經營刻苦の氣力のみ。

又山陽が當時の儒者の如くに經義に耽り、章句・訓詁の末を爭

の儒者。天保七年（一八三六）歿、年五十九。

ふ風なかりしは、頗るその才の發達に便なりしなるべしと雖も、かの經濟實用を以て學問の唯一本旨なりと考ふるに至りては、山陽亦その常套を襲ふを免れず。つらつら山陽の才幹を窺ふに、政治・吏務はその長ずる所にあらざりしが如し。則ち早く自ら計をなし、區々たる論策を作るを輟め、大いに詩に奮はば、その成功何ぞ啻に今日の名聲に止るのみならんや。人或は謂はん、「山陽は外史を著して一世を鼓舞し、大いに尊王の氣象を喚起して、遂に維新中興の遠因をなせり。若し外史を作らざる一詩人にて止まんか、何ぞ斯の大功を奏するを得ん。」と。嗚呼、これ詩を知らざるものの言のみ。詩の人心を感發するは、その勢力遙かに散文に過ぐ。外史果して能く維新中興の遠因をなせりといはば、外史中の事實を敷衍して之を詩にせるもの、亦豈その遠因となる能はざらんや。且外史の如きはその文章如何に靈妙なりとも、今日の史學

父　春水。名は惟寛。幕府の儒官。文化十三年（一八二六）歿、年七十一。

より之を見れば、小說と實錄との間に横たはる一種の不可思議物たり。史の名目を以てしては、決して完璧なりといふ能はず、上乘なりといふ能はず。焉ぞ始めより純然たる詩篇たるの愈れるに若かんや。柴野博士は山陽童時の詩を見て嘆賞し、「實材たらしむべし、詞人たらしむべからず。」とて、山陽の父に勸めて史を學ばしめたりといへり。博士の見、亦時流を脫せずと雖も、その史を學ばしめたるは可なり、その遂に修史の業に志すに至らしめたるは、余輩が山陽の爲に再四歎惜する所なり。（今世名家文鈔）

題山陽

十有三春秋　逝ク者ハ已ニ水ノ如シ
天地始終無ク　人生生死有リ
安ンゾ古人ニ類シテ　千載青史ニ列スルヲ得ンヤ

蘭學事始 二卷。杉田玄白著。文化十二年（二四七五）成る。明治二年刊行。

杉田玄白 名は翼。醫師。蘭學者。文化十四年歿、年八十五。

その日 明和八年（二四三一）三月四日。

良澤 前野氏。享和三年（二四六三）歿、年八十一。

淳庵 中川氏

二五 蘭學事始

杉田玄白

さて、その日の解剖事終り、とてものことに骨骸の形をも見るべしと、刑場にありし骨共を拾ひとりて、數々を見しが、すべて舊說とは相違にして、たゞ和蘭圖に差へる所なきに、皆驚嘆せるのみなり。

歸路は、良澤・淳庵と翁との三人同行なり。途中にて語り合ひしは、「偖々今日の實驗、一々驚き入る。且これまで心付かざりしは恥づべき事なり。苟も醫の業を以て互に主君主君に仕ふる身にして、その術の基本とすべき吾人の形體の眞形をも知らず、今まで一日一日とこの業を勤め來りしは面目もなき次第なり。何とぞ、この實驗に基づき、凡そにも身體の眞理を辨へて醫をなさば、この業を以て天地間に身を立つるの申譯もあるべし。」と、共々に嘆

ターフル-アナトミア Tafel Anatomia. 和蘭語の人體解剖書。「解體新書」の原書。

息せり。良澤も「げに、尤も千萬、同情の事なり。」と感じぬ。その時、翁申せしは「何とぞこの『ターフル-アナトミア』の一部新たに飜譯せば、身體内外の事分明を得、今日療治の上の大益あるべし。いかにもして通詞等の手をからず、讀み分けたきものなり。」と語りしに、良澤曰く、「予は年來蘭書よみ出だし度き宿願あれど、これに志を同じうする良友なし。常々これを慨き思ふのみにて日を送れり。各、がたいよいよこれを欲し給はば、我が前の年長崎へもゆき、蘭語も少々は記憶し居れり。それを種として共々よみ掛かるべしや。」といひけるを聞き、「それは先づ喜ばしきことなり。同志に力を戮せ給はらば、憤然として志を立て、一精出し見申さん。」と答へたり。良澤これを聞き、悅喜斜めならず。然らば善はいそげといへる俗說もあり、直ちに明日私宅へ會し給へかし。如何やうにも工夫あるべし。」と、深く契約して、その日は各、宿所宿所へ別れ歸りたり。

十年の長　この時良澤四十九才、玄白三十九才。

二十五字　アルファベット。

その翌日、良澤が宅に集り、前日のことを語り合ひ、先づ、彼の『タ
ーフル・アナトミア』の書にうち向ひしに、誠に艫舵なき船の大海
に乘り出だせしが如く、茫洋として寄るべきなく、只あきれにあ
きれて居たるまでなり。されども、良澤は豫ねてよりこの事を心
に掛け、長崎までもゆき、蘭語並に章句・語脈の間の事も少しは聞
き覺え、聞きならひし人といひ、齢も翁などよりは十年の長たり
し老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐ事となしぬ。翁は、
いまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちし事なれば、漸くに
文字を覺え、彼の諸言をもならひしことなり。

さてこの書を讀み、如何樣にして筆を立つべしと談じ合ひし
に、とても始より内象の事は知れがたかるべし。この書の最初に
仰伏全象の圖あり。これは表部外象の事なり。その名處は皆知れ
たる事なれば、その圖と說の符號を合はせ考ふることは、取付き

デ　de (the).

ヘット　het (the, it, he, She.)

アルス・ウエルケ　als (as), welk (which).

フルヘッヘンド　verheffend (lifted up, raised).　高まる持ち上がる等の意。

やすかるべし。圖の初とはいひ、かたがた先づこれより筆を取り
始むべしと定めたり。即ち「解體新書形體名目篇」これなり。そのこ
ろは「デ」の、「ヘット」の、又「アルス」「ウエルケ」等の助語の類も、何れが何
やら心に落付きて辨へぬ事ゆゑ、少しづつは記憶せし語ありて
も、前後一向にわからぬ事ばかりなり。譬へば、「眉といふものは目
の上に生じたる毛なり」と有るやうなる一句、彷彿として、長き日
の春の一日には明らめられず。日暮るゝまで考へ詰め、互ににら
み合ひて、僅か一二寸の文章、一行も解し得る事ならぬことにて
有りしなり。

また或日、鼻の所にて「フルヘッヘンド」せしものなりとあるに
至りしに、この語わからず。これは如何なる事にてあるべきと考
へ合ひしに、いかにもせんやうなし。その頃「ウォールデンブック」
といふものなし。やうやく長崎より良澤求め歸りし簡略なる一

ウォールデンブック Woordenbook. (wordbook). 辭書。

連城の玉 秦の昭王が十五城と交換せんとしたりといふ趙の惠王所藏の名玉。

小册ありしを見合はせたるに、「フルヘッヘンド」の釋註に、木の枝を斷ちたる迹、その迹「フルヘッヘンド」をなし、また庭を掃除すれば、その塵土聚まり「フルヘッヘンド」すといふ樣によみ出だせり。これは如何なる意味なるべしと、又例の如くこじつけ考へ合ふに、辨へ兼ねたり。時に、翁思ふに、木の枝斷りたる跡癒ゆれば堆くなり、又掃除して塵土あつまればこれもうづたかくなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、「フルヘッヘンド」は堆といふことなるべし。然ればこの語は「堆」と譯しては如何といひければ、各之を聞きて甚だ尤もなり、「堆」と譯さば正當すべしと決定せり。その時のうれしさは、何にたとへんかたもなく、連城の玉をも得し心地せり。

此の如き事にて推して譯語を定めり。其の數も次第次第に增しゆく事となり、良澤のすでに覺え居し譯語書き留をも增補し

シンネン Zinnen. 精神。

けるなり。その中にも「シンネン」などいへる事出でしに至りては、一向に思慮の及びがたき事も多かりし。これらは亦往々は解くべき時も出來ぬべし。先づ符號を付け置くべしとて、丸の內に十文字を引きて記し置きたり。其の頃知らざることをば「轡十文字」と名づけたり。每會いろいろに申し合はせ、考へ案じても、解すべからざる事あれば、その苦しさの餘り、それもまた「くつわ十文字」「くつわ十文字」と申したりき。然れども「爲すべき事は固より人にあり、成るべきは天にあり。」の喩の如くなるべしと、此の如く思ひを勞し、精を研り、辛苦せしこと一ケ月に六七回なり。その定日は怠りなく、わけもなくして各相集り會議して讀み合ひしに、實に不昧者は心とやらにて、凡そ一年餘も過しぬれば、譯語も漸く增し、讀むに隨ひ自然と彼の國の事態も了解する樣にて、後々はその章句の疎き所は、一日に十行も、その餘も、格別の勞苦なく解し

得るやうにもなりたり。尤も毎春參向の通詞どもに聞き糺せし事もあり。又その間には解屍の事もあり。獸畜を解きて見合はせしも度々のことなりき。

この會業怠らずして勤めたりし中、次第に同臭の人も相加はり寄りつどふ事なりしが、各志す所ありて一樣ならず。翁は一たび彼の國の解剖の書を得、直ちに實驗し、東西千古の差ひあることを知り明らめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業にも、發明ある種にもなしたく、一日もはやくこの一部を用立つ樣になし見度しと志を起せし事ゆゑ、他に望む所もなく、一日會して解する處はその夜飜譯して草稿を立て、それに就きてはその譯述の仕かたを種々樣々に考へ直せし事、四年の間、草稿は十一度まで認めかへて板下に渡すやうになり、遂に「解體新書」飜譯の業成就したり。

抑江戸にてこの學を創業して、「腑分」といひ古りしことを新たに「解體」と譯名し、かつ社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し、我が東方闔州自然と通稱となるにも至れり。是れ今時のごとく隆盛となるべき最初嚆矢なり。今を以て考ふれば、これまで二百年來、彼の外科法は傳はりしなれども、直ちに彼の醫書を譯するといふ事は絶えてなかりしが、この時の創業不可思議にも、凡そ醫道の大經大本たる身體內景の書、その新譯の起始となりしは、不用意を以て得る所にして、實に天意とやいふべし。

（蘭學事始）

一外國語を曉得するは一新世界を發見することなり。

（ゲーテ）

闔屋事始　二卷。回想錄。杉田玄白が死歿の三年前八十三才の時の作。

森鷗外。名は林太郎。醫學博士。文學博士。大正十一年歿、年六十一。

高瀨舟　底扁平にして淺水に適する小舟。

高瀨川　賀茂川の分流。更に二つに分れ、一は鳥羽にて桂川に入り、一は伏見にて淀川に入る。

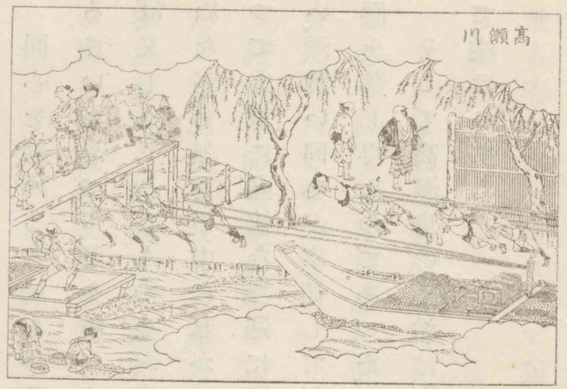
二六　高瀨舟

森鷗外

高瀨舟は京都の高瀨川を上下する小舟である。德川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀨舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にゐる同心で、此の同心は罪人の親類の中で、主立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた。默許であつた。

當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盜をするために人を殺し火を放つたといふやうな、獰惡な人物が多數を占めてゐたわけでは

ない。高瀨舟に乘る罪人の過半は、所謂心得違のために、思はぬ科を犯した人であつた。



高瀨舟の圖

さういふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕出された高瀨舟は、黑ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つゝ東へ走つて、賀茂川を横ぎつて下るのであつた。此の舟の中で、罪人と其の親類の者とは夜どほし身の上を語りあふ。いつもいつも悔んでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲慘な境遇を細かに知ることが出來た。所詮、町奉行の白洲で表向の口供を聞いたり、役

白河樂翁 松平定信。奥州白河の城主。寛政時代の名老中。文政十二年（一四八九）歿、年七十二。

所の机の上で口書を讀んだりする役人の夢にも窺ふことの出來ぬ境遇である。

同心を勤める人にも、いろいろの性質があるから、此の時只うるさいと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみじみと人の哀を身に引受けて、役柄ゆゑ氣色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲慘な境遇に陷つた罪人と其の親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになると、其の同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀨舟の護送は、町奉行の同心仲間で、不快な職務として嫌はれてゐた。

いつの頃であつたか、多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つて

寛政 光格天皇の御代。將軍德川家齊の時。（一四四九―一四六一）

知恩院 京都東山にあり。淨土宗の本山。

ゐた寛政の頃でもあつたであらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない、珍らしい罪人が高瀨舟に載せられた。

それは名を喜助といつて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類はないので、舟にも只一人で乘つた。

護送を命ぜられて、一しよに舟に乘込んだ同心羽田庄兵衛は、たゞ喜助が弟殺しの罪人だといふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、この痩肉の、色の蒼白い喜助の樣子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな、溫順を裝つて權勢に媚びる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乘つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の擧動に、細かい注意をしてゐた。

其の日は夕方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪廓をかすませ、やうやう近寄つて來る夏の溫かさが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、只舳に割かれる水のさゝやきを聞くのみである。

夜舟で寢ることは、罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に從つて、光の增したり減じたりする月を仰いで、默つてゐる。其の額は晴やかで、目には微かなかゞやきがある。

庄兵衛はまともには見てゐぬが、始終喜助の顏から目を離さ

ずにゐる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰返してゐる。それは喜助の顏が縱から見ても、横から見ても、いかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼がなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衛は心の中に思つた。これまで此の高瀨舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。しかし載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な樣子をしてゐた。それに此の男はどうしたのだらう。遊山船にでも乘つたやうな顏をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしや其の弟が惡い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い痩男が、その人の情といふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な惡人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。い

やいや、それにしては何一つ辻褄の合はぬ言語や擧動がない。此の男はどうしたのだらう。庄兵衛がためには、喜助の態度が、考へれば考へる程わからなくなるのである。

暫くして、庄兵衛はこらへ切れなくなつて呼掛けた。

「喜助、お前は何を思つてゐるのか。」

「はい。」

といつてあたりを見廻した喜助は、何事をかお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衛の氣色を伺つた。

庄兵衛は、自分が突然問を發した動機を明かして、役目を離れた應對を求める分疏をしなくてはならぬやうに感じた。そこでかう云つた。

「いや、別にわけがあつて聞いたのではない。實はな、己は先刻からお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。己はこれまで此の舟で大勢の人を島へ送つた。それは隨分いろいろな身の上の人だつたが、どれもどれも島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て一しよに舟に乘る親類のものと、夜どほし泣くに極つてゐた。それにお前の樣子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのかい。」

喜助はにつこり笑つた。

「御親切に仰しやつて下さつて、有り難うございます。なる程島へ往くといふことは、外の人には悲しい事でございませう。其の心持は私も思ひ遣つて見ることが出來ます。しかしそれは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私の致して參つたや

うな苦みは、どこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしやつらい所でも、鬼の栖む所ではございますまい。私はこれまで、どこといつて自分のゐて好い所といふものがございませんでした。今度お上で島にゐろと仰しやつて下さいます。そのゐろと仰しやる所に落着いてゐることが出來ますのが、先づ何よりも有り難い事でございます。それに私はこんなにか弱い體ではございますが、ついぞ病氣を致したことはございませんから、島へ往つてから、どんなつらい仕事をしたつて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それから今度島へお遣り下さるにつきまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。」

かういひ掛けて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百文を遣はすといふのは、當時の掟であつた。

喜助は語を繼いだ。

「お恥づかしい事を申し上げなくてはなりませぬが、私は今日まで二百文といふお足を、かうして懷に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで仕事に取附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりませんでした。それも現金で物を買つて食べられる時は、私の工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、又後を借りたのでございます。それがお牢に這入つてからは、仕事をせずに食べさせて戴きます。私はそればかりでも、お上に對して濟まない事を致してゐるやうでなりませぬ。それにお牢を出る時に、此の二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此の二百文は私が使はずに持つてゐるこ

とが出來ます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出來るかわかりませんが、私は此の二百文を島でする仕事の元手にしようと樂しんでをります。」

かういつて、喜助は口を噤んだ。庄兵衞は、

「うん、さうかい。」

とは云つたが、聞く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何もいふことが出來ずに、考へ込んで默つてゐた。

庄兵衞はかれこれ初老に手の屆く年になつてゐて、もう子供が四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇といはれる程の儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために着るものの外、寢卷しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意

はあるが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が滿足する程手元を引締めて暮して行くことが出來ない。動もすれば月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が內證で里から金を持つて來て帳尻を合はせる。それは夫が借財といふ事を毛蟲のやうに嫌ふからである。さういふ事は所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衞は五節句だからといつては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だといつては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を塡めて貰つたのに氣が附いては、好い顏はしない。格別平和を破るやうな事のない羽田の家に、折々波風の起るのは、是が原因である。

庄兵衞は今喜助の話を聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡してなくしてしまふと云つた。いかにも哀な、氣の毒な境

遇である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば算盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有り難がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其の心持はこつちから察して遣ることが出來る。しかしいかに桁を違へて考へて見ても不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で仕事を見つけるのに苦しんだ。それを見つけさへすれば、骨を惜しまずに働いて、やうやう口を糊することの出來るだけで滿足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつ

た食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生れてから知らぬ滿足を覺えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るにそこに滿足を覺えたことは殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。しかし心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようといふ疑懼が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取出して來て穴塡めをしたことなどがわかると、此の疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである。

一體此の懸隔はどうして生じて來るだらう。只上邊だけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだ

といつてしまへばそれまでである。しかしそれは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなれさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵衛は思つた。庄兵衛は只漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、此の病がなかつたらと思ふ。其の日其の日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又其の蓄がもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏み止まることが出來るものやら分らない。それを今目の前で踏み止まつて見せてくれるのが此の喜助だと、庄兵衛は氣が附いた。庄兵衛は今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。この時庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から毫光がさすやうに思つた。（鷗外全集）

島田三郎　政治家、評論家。大正十二年歿。年七十二。三田　東京市芝區。福澤諭吉邸及び慶應義塾の所在地。

二七　福澤先生を悼む

島田三郎

三田の高臺に長嘯して天下の瞻望を維ぎ、一管の筆を揮ひて泰西の文物を輸入し、三寸の舌を鼓して平民の氣焰をあげたる當代の巨人福澤先生逝けり。痛悼に勝ふべけんや。

先生は一代の師表にして、明治の社會、先生に負ふ所極めて大なり。曩に先生中風の症に惱み、一時世人を痛憂せしめたるも、其の後輕快に赴き、漸く健康に復するを傳ふ。聞く者愁眉を開きて之を祝せざるはなし。吾人謂へらく、先生齡六旬を超えて一旦大患に罹る、其の快談健筆以て社會を鞭撻啓發せる故態に復せんこと難かるべし。」と。然れども此の大平民の社會に存するは、後進の恃んで心を強くする所なり。卽ち其の悠々自適一日を永くし、以て吾人の志に酬いんを願ふこと甚だ切なりき。然るに天愁に

天慈に　天不ニ慈遺一老ヲ。（左傳）
本月　明治三十四年二月

中津　豐前國

天保五年　仁孝天皇の御代（一八四九）

安政元年　孝明天皇の御代（一八五四）

此の老を遺さず、遂に本月三日午後十時を以て白玉樓に徵し去る。嗚呼先生の音容また接すべからず。豈哀惜嘆嗟に勝へんや。

先生の出處・經歷と主義・功績とは、普く世人の知る所なり。其の社會に對する關係より家庭の生活に至るまで、著書と自傳とに詳かなり。吾人今之を繰返す必要なし。然れども其の梗概を約述し、吾人の所見を附記するは、亦敬慕追念の志を表する所以なり。

先生の嚴父は中津藩士にして、子女五人あり。先生は其の季子なり。天保五年十二月二日、大阪の中津藩邸に生る。三歲にして父を喪ひ、母子共に中津に歸る。幼時の教育は尋常の鄕學に漢籍を誦習せるに過ぎず。然れども、其の辨識の力は讀書の力に越えて、早く儕輩を凌駕したりといふ。安政元年二月、先生二十一歲、是より先、米使來航し、海內騷然たりしが、泰西兵術の講習を必要とするに至り、先生また砲術研究の志を懷きて長崎に赴けり。是、蘭書

緒方洪庵　備中國足守藩士文久三年（一八六三）歿。年五十四。

木村攝津守　名は毅、號は芥舟、明治三十四年歿、年七十二。
文久元年　孝明天皇の御代（一八六一）

讀習の機緣なり。明年大阪に來りて、緒方洪庵先生の塾に入る。これ、先生生涯の一轉機なり。蓋し其の初、蘭書そのものに意なく、これによりて砲術を解する媒となししもの、其の學漸く進むに至りて純乎たる蘭學研修者となれるなり。中ごろ病のために一旦中津に歸りしが、幾時ならずして再び緒方塾に復り、學益進み、塾頭に擧げらる。安政五年、藩の徵に遭ひ、江戸藩邸の蘭學教授となる。當時米人の交際よりして英語の用益多し。先生の烱眼早く轉學の必要を覺り、同學諸氏の說に反し、刻苦して英書を研修す。

安政六年十二月、幕府使臣を米國に派す。先生其の乘艦咸臨丸の艦長木村攝津守に乞ひ、從僕となりて米國に入り、其の文物を目睹し、明年五月を以て歸朝す。是、先生生涯の一大轉機にして、後來の事業此の觀光の時に得たるもの多し。文久元年十二月、幕府使節を遣はして歐洲諸國を歷訪せしむ。先生翻譯方を以て隨行

し、英・佛・獨・蘭・葡・露の諸都を觀て歸り、見聞益廣し。我が社會の暗黑の中に世界的光明を透したる「西洋事情」の一書は、實に此の行の產物なり。慶應三年、軍艦購入の件を以て再び米國に赴く。先生の意見はこれらの旅行每に轉進し、開國の必要を確信し、幕府舊來の階級制と勤王に伴ふ鎖國論とは、共に先生の信仰と背馳して到底相容るゝこと能はず、且先生は翻譯官たりしを以て、內外交涉の機事皆其の掌るところの文書によりて之を知るを得て、幕府の敗亡、國勢の變轉、早くも先生の眼底に映ぜり。而して先生は政權の推移を洞察せしのみならず、社會事物の變化を豫知せり。先生がその雙劍を鬻ぎて帶刀の風を棄てたるは、維新の際、士人長刀を佩びて殺氣天下に充てる間にあり。

既にして維新の業成り、政府大いに人材を登庸して、洋學通明の士多く徵用せられ、先生亦其の召命に遭へり。然れども固辭し

て就かず。其の得る所を以て社會を啓發せんと欲し、こゝに自ら天下開導の大任を負ひ、首として慶應義塾を設けて後進を教育し、又著述・翻譯を以て世人を誘發せり。爾來三十四年、藩邸に塾を立てしより四十五年、通じて學生一萬餘を養へり。其の人社會各般の階級に出身して一般の進步を助く。先生又明治十五年を以て時事新報を開刊し、政黨旺盛、政爭劇甚の間に、社會教育を主義として一般の知識を開き、又爭議を判するに任ぜり。

先生は教育家なり、時代思想の鼓吹者なり。學を長崎・大阪に修め、藩の教授となり、幕府の翻譯方となり、三回歐米に航せし外何の經歷あらず。其の後半の生涯は三田の高臺に逸居して三十餘年を經過す、波瀾なく、變化なし。然れども、其の言論・文章を以て一世を鼓動し、社會を陶冶したる偉大なる勢力は、獨り當世に匹なきのみならず、古今を通じて有數なりと評せざるべからず。蓋し

嘉永・安政以後、日本が海外諸國の大勢に刺戟せられ、新舊の思想相鬪ふに際し、先生は新思想誘引の先達となり、舊世界の殘壘を破りて一大勝利を博し、確かに先登の月桂冠を戴ける者なり。

先生の學專攻なし。故に一科の長所なく、又獨創の發明あらず。然れども思想博大、常識明敏、進歩の見解を一切の事物に應用して之を社會に弘布する能力に至りては、萬人に超絶せり。且其の識見は常に社會に先んぜり。先生幼時儒教の薫陶を受け、其の長崎に赴き、端なく蘭書を誦習するや、既に砲術の以て志を成すに足らざるを覺れり。其の江戸に來り、横濱に遊びて、英語の招牌を讀む能はざるや、忽ち蘭學を棄てて英語を學べり。其の海外に遊んで歸るや、幕府衰滅の免るべからざるを看取し、再び米國に入るや、兵器を購はず、書藉を買うて歸り、戊辰戰亂の間、冷然書を講じて顧みず。王政復古、士皆進仕を榮とするに際し、巷間に在りて

後進を誘掖し、戰餘の殺氣未だ收らざるに、兩刀を脱して市民と稱せり。漢儒が門人を食客と同視する時代に授業料を收むる學校組織を立て、政爭喧擾の間に社會的薫陶に力を致せり。これ皆時流に先だてる見にして、當世にぬきんづる眼を有するにあらざれば能はざるなり。

先生は百代を洞察し宇宙を解釋する哲學者に非ず。天人冥合、靈魂救濟を志とする宗教家に非ず。立言の不朽を期して造化の機祕を窺ふ科學者にもあらず。詞を修め句を錬る文士にも非ず。否、却て文字のために思想を犧牲にする陋習を打破せんとせる人なり。之を要するに、一代の著述・文章は崇高宏大深邃幽玄なる思想界に觸るゝに非ずして、每時眼前の程度より一等を高めんとするにあり。而して見解分明、信仰確實、平易大膽なる文を以てこれを宣傳す。其の多數を動かして偉大なる效果を收め、優に社

テイヌ Taine (1828—1893) 佛國の歴史家

ジョンソン S. Johnson (1709—1784) 英國の文學者

會改造の目的を達せしは之が爲なり。

先生の筆述、前後五十部百五册、收めて其の全集にあり。此の他時事新報に載するものを合せば更に多からん。佛人ティヌ、かつて英國文界の偉人ジョンソンの全集を研究して謂つて曰く、「そこに十九世紀に於て新に學ぶべき奇思妙想を發見せずと雖も、十八世紀の需要に應じて社會を裨益せしもの多し。」とジョンソンの勢力が當時に盛なりし所以、其の文書が一世に功ありし所以、茲に在り。後の讀者其の奇思妙想を發見せざるを以て其の功を小なりとするを得ず。先生の文界に於ける位置、蓋し之に近し。

先生の勢力を以て單に其の文章・識力に歸するは、よく先生を知る者に非ず。先生は確信・實行を大膽明快に筆に載す。これ能く世を動かす所以に非ずや。其の獨立自尊を說くや、口舌・文章に於てするのみならず、これを其の躬行に於てし、其の歐米の文明を

鼓吹するや、これを事物に應用し、其の自由平等を宣傳するや、階級隷屬の生活を破るに汲々とし、其の官尊民卑の弊を論ずるや、自身軒冕を泥塗にする概あり。其の家庭の尊貴を說示するや、先生まづ其の實例を置かんと努めたり。是、豈確信なき者の企て得る所ならんや。

先生を以て拜金宗の大和尙となし、節義を輕んずる者と爲すは、尤も先生と其の時代とを曉らざる者なり。蓋し先生が歐米の文物を輸入せんとするや、其の反面に於て鎖國の舊夢を一掃するに努めざるべからず。自主獨立の主義を宣べんとせば、其の反面に於て隷屬服從の慣習を打破せざるべからず。平民自活の生業を敎へんとせば、武士世祿の依賴心を棄てしめざるべからず。此の過渡の時機に會し、武士の理想的人物を罵倒して以て一世を警醒せしもの、卽ち有名なる楠公論にあらずや。是、楠公其の人

一休 室町時代の禪僧。文明十三年（一四一一）寂、年八十八。

ヴオルテール Voltaire (1694—1778) 佛國の文學者。

を擊つにあらずして武士の舊想を擊ちたるもの、恰も一休の、俗僧を破せんが爲に釋迦を罵りたる意に髣髴たり。其の金錢を貴ぶの說法は、「武士は食はねど高楊枝。」の氣習を破したるものに過ぎず。先生これがためには世の怒嘲を冒して戰へり。吾人却て先生の勇敢を稱せざる能はず。

先生の明治社會に於ける位置は、頗るヴオルテールが十八世紀の佛國に於けるものに似たり。先生が歐米の文物思想を總括して輸入せんとし、博大通達の材を以て盛に翻譯・著述に從事せし所、恰もヴオルテールが英國に博採せしに似たり。甲が儒教を說破せし所、恰も乙が羅馬加特力を破壞せんとせしものに類す。而して其の辯銳利、能く破壞の目的を達したれども、其の言奇矯、後進をして誤解せしめ、一は拜金宗といふ一派の信仰を形成し、他は羅馬教を擊破したるもの一轉して宗教そのものを擊破せ

荀卿 周代の哲學者。

李斯 秦の政治家、荀卿に學び始皇帝の客卿となる。

（一四五二）

生を知らず 季路問レ事ニ鬼神ニ。子曰、未レ能レ事レ人、焉能レ事レ鬼。曰、敢問レ死。曰、未レ知レ生、焉知レ死。（論語、先進篇）

性と天道 子貢曰、夫子之文章、可ニ得而聞一也。夫子之言ニ性與ニ天道一、不レ可ニ得而聞一也已矣。（論語、公冶長篇）

天爵 有ニ天爵一、有ニ人爵一。

しがごとき觀を呈せり。三田の末流に拜金の臭味あるは、荀卿の說によりて李斯の徒を出ししに類す。吾人は先生を以て此の宗派の大和尙と認むる能はざるなり。

先生は儒教を痛擊し、自活生業を唱道せしが、先生の行は却て儒教の旨に適へり。是、一見奇なるが如くなれども、決して奇ならざるなり。先生は形而上の考案に多くの思を凝さず、專ら實踐躬行を貴べり。是、「生を知らずして焉ぞ死を知らん。」との旨に合するにあらずや。先生の歐米の文物を輸入する、專ら制度・商業・工藝・科學の實物的傾向を有し、哲理・宗教の研究工夫を要せず。是、性と天道とを語らざる者に類するに非ずや。其の一方に武士的生活を攻擊するに拘らず、去就を嚴明にして處士自ら高うせる迹は、儒教の進退節義を言ふ者に類す。其の自尊といふ教訓を以て天爵を全くせんとするは、孟軻の「人々己に貴きものあり。」といふに合

者。仁義忠信、樂レ善不レ倦、此天爵也。公卿大夫、此人爵也（孟子、告子上篇）

人々己に貴きものあり 欲レ貴者、人之同心也。人々有レ貴二於己一者上弗レ思耳。（孟子、告子上篇）

晋楚の富 晋楚之富不レ可レ及也。彼以二其富一、我以二吾仁一、彼以二其爵一、我以二吾義一。（孟子、公孫丑下篇）

伊藤東涯 名は長胤、京都の碩儒、元文元年（一七三六）歿、年六十七。

し、其の軒冕を泥塗にして王公に屈下せざる所は、大人を藐視し、晋楚の富と爵とに對するに德と齒とを以てしたるに似たり。先生は知識を歐米に博採せしが、其の行實は蓋し幼時の儒學に涵養せられ、唯俗儒の範圍を脱したる者の如し。これを聞く、「先生の嚴父百助君儒學を修め、伊藤東涯の人と爲りを慕へり。」と。堀川の實踐學派、先生の心を養ひしものか。而して先生少時尤も春秋左氏傳を愛讀せりといへば、節義に嚴なる所、由來なしと言ふべからず。

先生晩年著す所、頗る壯年の思想に異なり。福翁百話中、往々形而上の問題に渉るものあり。然れども科學的研究の結果にあらず。先生は結局常識の人なり、實踐の人なり。博大なる思想家にして、精深なる考究家にあらず。大膽なる論辯家にして、懷疑の批評家にあらず。唯其の四十年間一貫の行徑を辿りて世の風濤に蕩

搖せられず、誠實に社會を薫陶し、諄々として倦まず、言行一致、平易の言を立てて人々行ふを得る道を宣べ、自ら善くし、兼ねて人を善くせる、其の大功誰か先生に比すべき者あらん。眞に常識の巨人、平民の典型なり。獨立自尊の四字は先生の躬行によつて社會に現示せられたり。先生の書は以て先生を評するに足らずして、唯其の行實を研究して始めて能く其の教育を會得すべし。今や此の巨人を失へり。明治社會の損失これより大いなるはなし。吾人、公に於ては平民の典型を奪はれたるを惜しみ、私に於ては敬慕する巨人を失へるを悲しむ。（福澤先生哀悼錄）

阿部次郎　山形縣の人。文學博士。東北帝國大學教授。明治十六年生。

二八　生活の中心

阿部次郎

自分は、凡ての人に勸めるのに、その生活の中心を拵へることを以てしたい。その中心を中心として日々の生活を調整することを以てしたい。若しその中心を發見することが容易でないならば、生活の中心を求めることを以てそれを發見するまでの生活の中心とすることを勸めたいと思ふ。

諸君が學校にゐる間は、學校の課程が諸君の生活に一種の中心を與へてゐる。諸君は諸君の生活を調整すべき具體的な秩序を手近に持つてゐる。從つて假令學校をつまらないもの、下らないものと見る人々と雖も、猶これによつて自分の生活に一種の具體的內容を與へられてゐることは爭ふことが出來ないであらう。併し諸君が學校を卒業して、授業時間や課題や練習や試驗

の束縛を脫れるとき、諸君は又一方に何となく日々の生活に具體的內容を缺いて、退屈と空虛とを覺えることを禁じ得ないであらう。學校に代つて諸君の生活の中心となるものが、直ちには諸君の手に落ちて來ないであらう。多くの人は、學校を卒業すると共に、何かをしなければならぬ義務を、他人から負はされるか若くは自らの感情の中に負ふを常とする。併し今日の社會は、我等の卒業を待受けてゐて、直ちに我等に適當なる活動の地を與へるやうな社會ではない。さうして自ら活動の地を造り出さうとするにも、我等は自己の內面に確かさの自信を缺き、我等の働きかけるべき社會に對する適當の知識を缺いてゐるが故に、內外兩樣の意味に於て、何處から手をつけていゝかがわからなくなる。かくて焦燥と空虛と、この二つの相反せるが如くにして相近似せる感情は、手を携へて我等の生活に迫つて來る。さうして

我等は焦れば焦るほど、益〻生活の中心を失つてゐるといふ感じに捉はれなければならない。自分は學校を卒業すると直ちにこの病に捕へられて、二三年のあひだはまるで何事も手につかなかつた。さうしてこの狀態を脱却するまでには、自分としては堪へ難いほどの忍耐と攝生とを積まなければならなかつた。故に自分は諸君の卒業を送るに當つても、特にこの點に關する注意を請はなければならない。凡そ人生は短く、人生は長い。爲すべき事を持つてゐる者には、六七十年の歳月は須臾にして流れ去るであらう。併し何事にも倦める心にとつては、五十年の壽命も長い退屈な旅と思はれるに違ひない。さうしてこの短い生涯を空しく過さないためにも、この長い一生を退屈せずに暮すためにも、我等には生活の中心が必要である。自分は中心を缺いた生活の中にある充實と幸福といふものを考へることが出來ない。

固よりこの中心は強ひて拵へられたものではなくて、自分の中から發見したものでなければならない。學生に對する學校の課程、成年に對する職業の義務の如きものは、唯我等の內心の寂寞を胡魔化すための一時的手段となるのみで、我等の一生を貫く眞の中心となることは出來ないであらう。さればといつて、眞正に內面的の意味に於て、自己の生活の中心を發見することはなかなか容易なことではない。茲に於て我等の問題は、更に一歩を進めて、如何にして生活の中心を發見すべきかといふことに移る。この問題に對する解答も亦固より容易ではないが、自分にはその具體的方法として一つの考案がある。

といつても、それは何も珍らしいことではない。最も自分に適しさうな人を選んで、その人の內面的發展を精細に跡付け、その通つた道を自分も內面的に通つて見ることである。約言すれば、

飯山　長野縣下水内郡飯山町。

白隱和尚　駿河の人、臨濟宗の高僧、明和五年（一七六八）寂、年八十四。

慧端和尚　信州の人。臨濟宗の僧、正受老人と號す。享保六年（一七二一）寂、年八十。

自らその「師」を擇んで、自己の鍛錬をその師に托することである。師の奴隷とならずに、而も師に信頼して、常に「師」に照して自己を發見する途を進むことである。我等の時代はあまりに師弟の關係の薄い時代である。我等の間には、十分の責任を帶びて他人の靈魂の教育を引受ける心持も、尊信と親愛とを傾けて自己の靈魂の訓練を長上に托する心持も――此等の崇高な、深入りした心と心との交渉が餘りに少い。自分は自分たちの受けて來た纏まりのない教育と、徒らに漠然として廣い知識とを思ふ毎に、古人の受けた鍛錬と訓育とを羨しいと思ふ。自分はこの春、信州の飯山に行つて、白隱和尚修行の地なる正受庵を訪うた。庵は高社の山を望み、千曲川を望む小丘の上にあつて、杉の老樹の生ひ繁つた幽邃な境にある。こゝで白隱は慧端和尚の鉗鎚の下にその大器を完成したのだ。或る時白隱が參來して見解を呈すると、慧端

高社　長野縣下高井郡。

は白隱を捉へ、嗔拳を加へること二三十、一蹴して堂から崖下に蹴落したといふ。しかし又或時白隱が、日頃の疑團が氷解して、欣然として托鉢から歸つて來ると、慧端は緣に出て「速く來い。速く來い。」と團扇を以て招いたといふ。自分はその話をきいて白隱と慧端との間が羨しくてならなかつた。自分にも、自分を崖から蹴落して吳れる師匠、緣側から自分を手招きして吳れる師匠があつたら、どんなに幸福なことであらう。師弟とは與へられるだけを與へ、受けられるだけを受けようとする、二個の獨立せる、而も相互に深く信頼せる靈魂の關係である。弟子をその個性の儘に一人の「人」とするところに師の師たる所以があり、その稟性に從つて一個の獨立せる人格となるところに弟子の最も多くその師に負ふ所以がある。「道」の傳統は、何等かの意味に於ける師弟の關係を經て、始めて內面的に生きるのである。

固より師に就くとは、自己の生活内容をその師の供給に仰ぐといふことではない。我等が愛し、憎み、努め、怒る心は我等自身の中に豫め持つてゐなければならぬところである。此等の愛憎や喜悲は我等の生活を刻々に新なる境涯に漂はしめ、往々にして、我等の生涯を困惑と雍塞と彷徨と昏迷との境に導く。この窮境を拓き、この關門を透過する努力に於て、我等は始めて師の忠言を必要とするに至るのである。我等が師に就いて學ぶべきところは、問題の解き方である。途の拓き方である。生活内容を流れ行かしむべき方向である。若し我等自身の中に豫め生活内容を有することなく、一定の傾向を有することなく、解決を要する問題を有することがないならば、師に就くことは全然無意味でなければならない。故に生活の中心を求めるために古人の著作を研究するといふとき、我等の生活の意味は、讀書にあるのではなくて、我等の内面的知覺を開拓して、これを正しき方向に導いて行くところにあることは、繰返すまでもないことである。書を讀むとは自ら生きることを停止することを意味するならば、又他人の著作を研究するとは自ら省ることを中斷することを意味するならば、我等は固より如何なる場合にも、書を讀むことを、他人の思想を研究することを、生活の中心とすべきではない。茲に讀書といひ、研究といひ、師に就くといふは、自ら生き、自ら省るための一つの途を意味するものであることは、明瞭に記憶して置く必要がある。我等が師に就いて學ぶことを要する第一義諦は、行往坐臥に師の言葉を讀誦することではなくて、何よりも先づ、師と同一の勇氣を以て人生に衝當ることでなければならない。自己の直接經驗を基礎として人生の疑に觸れ、人生の疑を解く途を求めることでなければならない。

自分は前に、最も自分に適しさうな人を選んでこれを師とすべきことをいつた。併し此處に「最も自分に適する」といふのは、現在の自分が最も親み易きもの――換言すれば現在の自分の程度を以ても容易に接近し得べきものといふ意味ではないのである。此の如き「師」は、唯我等を甘やかすもの、現在に於ける我等の偏局せる發展を更に一面的に偏局せしめるものに過ぎないであらう。現在の自分は自己の本質の一切ではない。我等の本質の中には無限の可能性がある。他日、我等の本質の中から、現在の自分には思ひも寄らぬ花が咲き出でる日がないことを、誰が保證することが出來よう。我等の「師」は、我等の本質の中から此等の數多き可能性をひき出す力あるものでなければならない。我等を鞭撻して、常により高き段階を望ましめる力を持つてゐるものでなければならない。約言すれば、我等を叱り、我等をひき上げ、我等

を打碎き、我等を改造するに足るほど、複雜で偉大なるものでなければならない。この意味に於て、我等に「無理」を強ひる力のないものは、我等の師と仰ぐに價せぬものである。

破壞は苦しく、努力は苦しく、緊張も亦苦しい。併し此等の苦しみを通してのみ眞正に生きることが出來るとすれば、この苦しみこそ、人生の最も深き幸福、我等の生活の最も深き自然でなければならない。我等を强ひるもの、我等を叱咤するもの、我等を鞭撻するものの聲に耳を塞いで、唯現在にとつて自然なる生活のみに生きんとするは、懶惰なる怯者のことに過ぎない。

（三太郎日記）

實業學校　國文新選　卷五　終

江戸時代	安土桃山	時代	室町	武中興・吉野時代
後水尾(二三七—二三八九) 明正(二三八九—二三〇二)	後陽成(二三四六—二三七一) 正親町(二三一七—二三四六)	後柏原(二二六〇—二二八六) 後奈良(二二八六—二三二七) 後土御門(二二二四—二二六〇)	後花園(二〇八八—二二二四) 稱光(二〇七二—〇八八) 後小松(二〇五二—二〇七二)	後亀山(二〇四三—二〇五二) 長慶(二〇二八—二〇四三) 後村上(二〇一九—二〇二八) 欽明(二一九九—二二三二) 敏達(二二三二—二二四五)

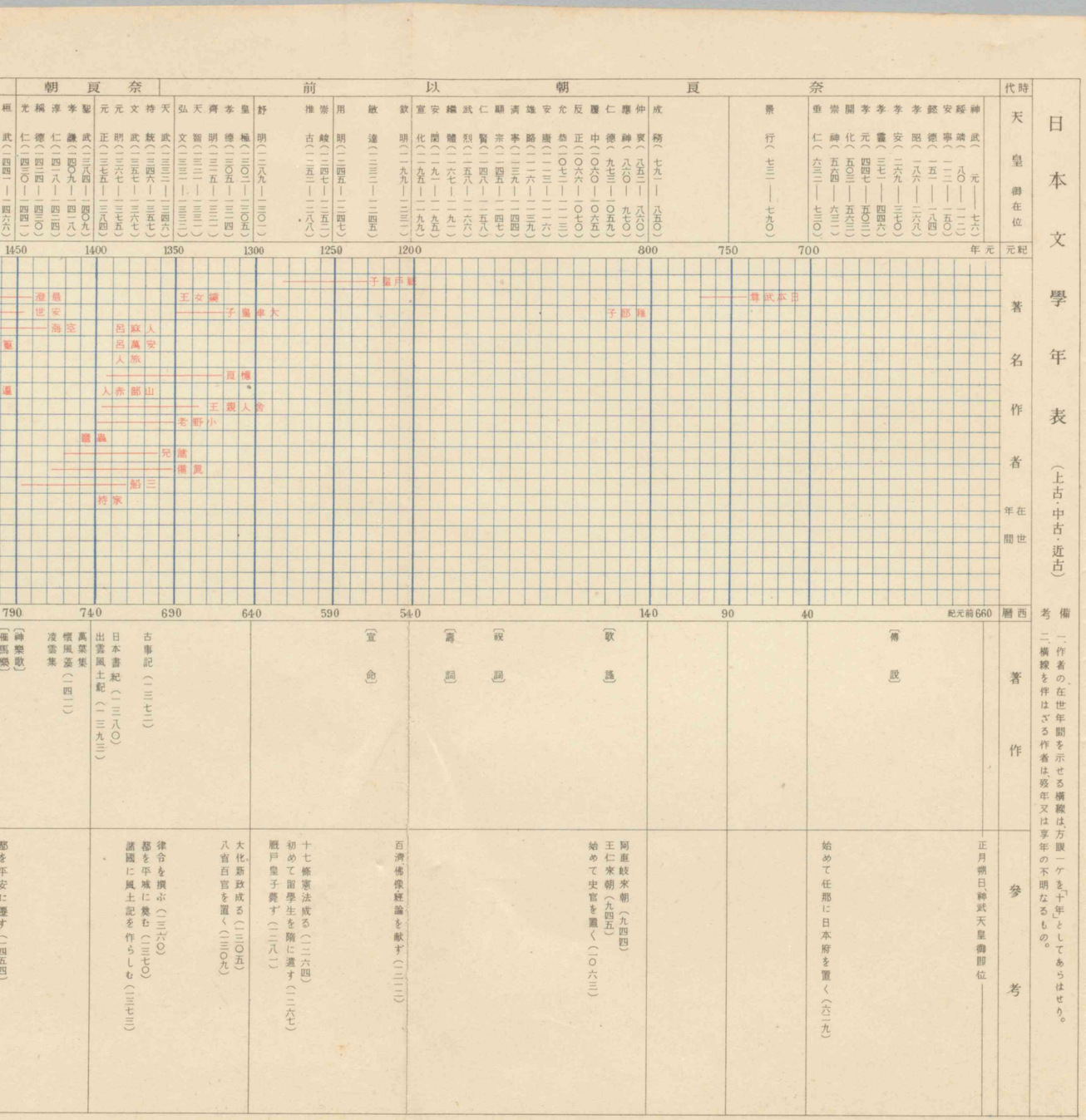
2300 2250 2200 2150 2100 2050 2000 1950

千鶴丸 戸籍 惠一 宗祇 肖柏 宗長 實隆 守武 宗鑑 紹巴 紹鷗 宗砌 慢長 宮瑞 子貞 德正 三山 正縣 因縣 紹季 玲長 流茂 鶴

1640 1590 1540 1490 1440 1390 1340 1290

〔宣命〕	風雅集。新千載集。新拾遺集。 増鏡 〔連歌〕菟玖波集。連歌新式。 新葉集。新後拾遺集。 太平記 〔謡曲〕 〔狂言〕新續古今集。	連歌新式追加 曾我物語 義経記 〔俳諧〕新菟玖波集(二一五五) 犬筑波集 御伽草子 守武千句(二二〇〇) 誹歌大概抄(二二四九) 犬子集(二二九三) 油糟(二二九三)	徳川家康幕府を江戸に開く(二二六三) 家康林羅山を幕府に召す(二二六六) 儒學振興 古書出版
百濟佛像經論を献ず(二二二)	足利義滿將軍となる(二〇二八)	足利義政將軍となる(二二〇九) 東常縁古今傳授を宗祇に傳ふ(二二三二) 東山時代の美術工藝	

日本文學年表（上古・中古・近古）



備考

一、作者の在世年間を示せる横線は、方眼一ケを「十年」としてあらはせり。

二、横線を伴はざる作者は、歿年又は享年の不明なるもの。

前 ／ 奈良朝 ／ 平安朝 ／ 鎌倉時代 ／ 建武中興・吉野時代 ／ 室町時代 ／ 安土桃山 ／ 江戸時代

天皇

用明(一二四五—一二四七)　崇峻(一二四七—一二五二)　推古(一二五二—一二八八)　舒明(一二八九—一三〇一)　皇極(一三〇二—一三〇五)　孝徳(一三〇五—一三一四)　齊明(一三一五—一三二一)　天智(一三二一—一三三一)　弘文(一三三一—一三三二)

天武(一三三二—一三四六)　持統(一三四六—一三五七)　文武(一三五七—一三六七)　元明(一三六七—一三七五)　元正(一三七五—一三八四)　聖武(一三八四—一四〇九)　孝謙(一四〇九—一四一八)　淳仁(一四一八—一四二四)　稱徳(一四二四—一四三〇)　光仁(一四三〇—一四四一)

桓武(一四四一—一四六六)　平城(一四六六—一四六九)　嵯峨(一四六九—一四八三)　淳和(一四八三—一四九三)　仁明(一四九三—一五一〇)　文徳(一五一〇—一五一八)　清和(一五一八—一五三六)　陽成(一五三六—一五四四)　光孝(一五四四—一五四七)　宇多(一五四七—一五五七)　醍醐(一五五七—一五九〇)　朱雀(一五九〇—一六〇六)　村上(一六〇六—一六二七)　冷泉(一六二七—一六二九)　圓融(一六二九—一六四四)　花山(一六四四—一六四六)　一條(一六四六—一六七一)　三條(一六七一—一六七六)　後一條(一六七六—一六九六)　後朱雀(一六九六—一七〇五)　後冷泉(一七〇五—一七二八)　後三條(一七二八—一七三二)　白河(一七三二—一七四六)　堀河(一七四六—一七六七)　鳥羽(一七六七—一七八三)　崇徳(一七八三—一八〇一)　近衛(一八〇一—一八一五)　後白河(一八一五—一八一八)　二條(一八一八—一八二五)　六條(一八二五—一八二八)　高倉(一八二八—一八四〇)　安徳(一八四〇—一八四五)

後鳥羽(一八四五—一八五八)　土御門(一八五八—一八七〇)　順徳(一八七〇—一八八一)　仲恭(一八八一—一八八一)　後堀河(一八八一—一八九二)　四條(一八九二—一九〇二)　後嵯峨(一九〇二—一九〇六)　後深草(一九〇六—一九一九)　亀山(一九一九—一九三四)　後宇多(一九三四—一九四七)　伏見(一九四七—一九五八)　後伏見(一九五八—一九六一)　後二條(一九六一—一九六八)　花園(一九六八—一九七八)　後醍醐(一九七八—一九九九)

後村上(一九九九—二〇二八)　長慶(二〇二八—二〇四三)　後亀山(二〇四三—二〇五二)

後小松(二〇五二—二〇七二)　稱光(二〇七二—二〇八八)　後花園(二〇八八—二一二四)　後土御門(二一二四—二一六〇)　後柏原(二一六〇—二一八六)　後奈良(二一八六—二二一七)

正親町(二二一七—二二四六)　後陽成(二二四六—二二七一)

後水尾(二二七一—二二八九)　明正(二二八九—二三〇三)

1250　1300　1350　1400　1450　1500　1550　1600　1650　1700　1750　1800　1850　1900　1950　2000　2050　2100　2150　2200　2250　2300

歌人・作家

鏡女王　大津皇子　人麻呂　安萬呂　旅人　憶良　山部赤人　舍人親王　小野老　蟲麿　諸兄　眞備　三船　家持

最澄　安世　空海　篁　貞香　業平　遍昭　行平　康秀　小町　道眞　友則　躬恒　長谷雄

忠岑　是則　貫之　順　元輔　好忠　能宣　匡衡　清少納言　紫式部　和泉式部　赤染衛門　伊勢大輔　小式部内侍　公任　實資　大貳三位　隆國

匡房　俊頼　基俊　顯輔　忠度　西行　俊成　長明　慈鎭　家隆　定家　實朝　爲家　日蓮

雅有　爲相　玄惠　兼好　親房　頓阿　良基　了俊　阿佛尼

宗祇　肖柏　宗長　實隆　守武　宗鑑　紹巴　幽齋　宗砌　正徹　心敬　觀世清次　觀世元清　兼良　道灌　東常緣

惺窩　長嘯子　貞德　正三　羅山　宗因　藤樹　季吟　長流　茂睡

590　640　690　740　790　840　890　940　990　1040　1090　1140　1190　1240　1290　1340　1390　1440　1490　1540　1590　1640

文學

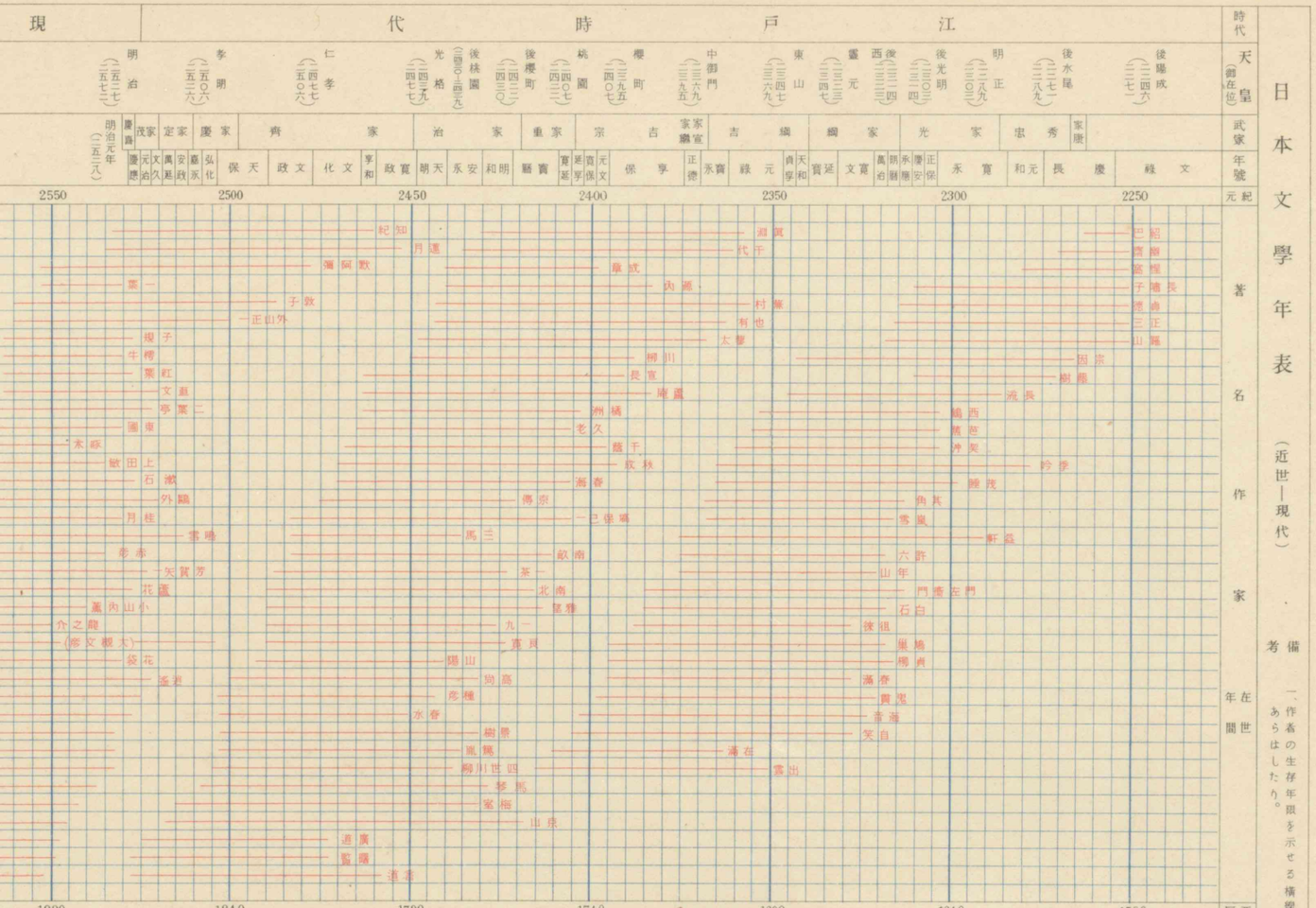
古事記(一三七二)
日本書紀(一三八〇)
出雲風土記(一三九三)
萬葉集
懐風藻(一四一一)
凌雲集
〔神樂歌〕
〔催馬樂〕
續日本紀(一四五七)
古語拾遺(一四六八)
文華秀麗集(一四七八)
經國集(一四八七)
日本後紀(一五〇〇)
續日本後紀(一五二九)
文徳實錄(一五三九)
竹取物語
伊勢物語
新撰字鏡　三代實錄(一五六一)
古今和歌集(一五六五)
延喜式(一五八七)
土佐日記
〔歌合〕
後撰和歌集(一六一一)
天徳歌合(一六二〇)
落窪物語
宇津保物語
枕草子　拾遺集
源氏物語　紫式部日記
和漢朗詠集
和泉式部日記
蜻蛉日記
狭衣物語
堤中納言物語
榮華物語
大鏡
今昔物語
後拾遺集(一七四六)
更級日記
本朝文粋
金葉集(一七八七)
詞花集
取りかへばや物語
千載集(一八四七)
〔歌論〕
山家集
千五百番歌合(一八六一)
新古今集(一八六五)
水鏡。方丈記。金槐集。
保元物語。平治物語。
平家物語。源平盛衰記。　新勅撰集。
詠歌大概。東關紀行。
宇治拾遺物語。十訓抄。　續後撰集。
續古今集。續拾遺集。
吾妻鏡(一九二七)
十六夜日記
中務内侍日記
新後撰集。玉葉集。
續千載集　續後拾遺集。
神皇正統記(一九九九)
徒然草
風雅集。新千載集。新拾遺集。
増鏡
〔連歌〕
菟玖波集。連歌新式。
新葉集。新後拾遺集。
太平記
〔謠曲〕
〔狂言〕　新續古今集。
連歌新式追加
曾我物語
義經記
新菟玖波集(二一五五)
〔俳諧〕
犬筑波集
御伽草子
守武千句(二二〇〇)
詠歌大概抄(二二四六)
犬子集(二二九三)
油糟

事項

十七條憲法成る(一二六四)
初めて留學生を隋に遣す(一二六七)
厩戸皇子薨ず(一二八一)
大化新政成る(一三〇五)
八省百官を置く(一三〇九)
律令を撰ぶ(一三六〇)
都を平城に奠む(一三七〇)
諸國に風土記を作らしむ(一三七三)
都を平安に遷す(一四五四)
勸學院創立(一四八一)
天台宗
眞言宗
遣唐使を廢す(一五五四)
和歌所創設(一六一一)
藤原道長關白となる(一六五五)
保元の亂(一八一六)　平治の亂(一八一九)
平氏亡ぶ(一八四五)
源頼朝幕府を鎌倉に開く(一八四六)
承久の亂(一八八一)
淨土宗
日蓮宗
禪宗
元寇(一九三四)
建武中興(一九九四)
足利尊氏將軍となる(一九九八)
足利義滿將軍となる(二〇二八)
足利義政將軍となる(二一〇九)
東常緣古今傳授を宗祇に傳ふ(二一三一)
東山時代の美術工藝
徳川家康幕府を江戸に開く(二二六三)
家康林羅山を幕府に召す(二二六六)
儒學振興
古書出版

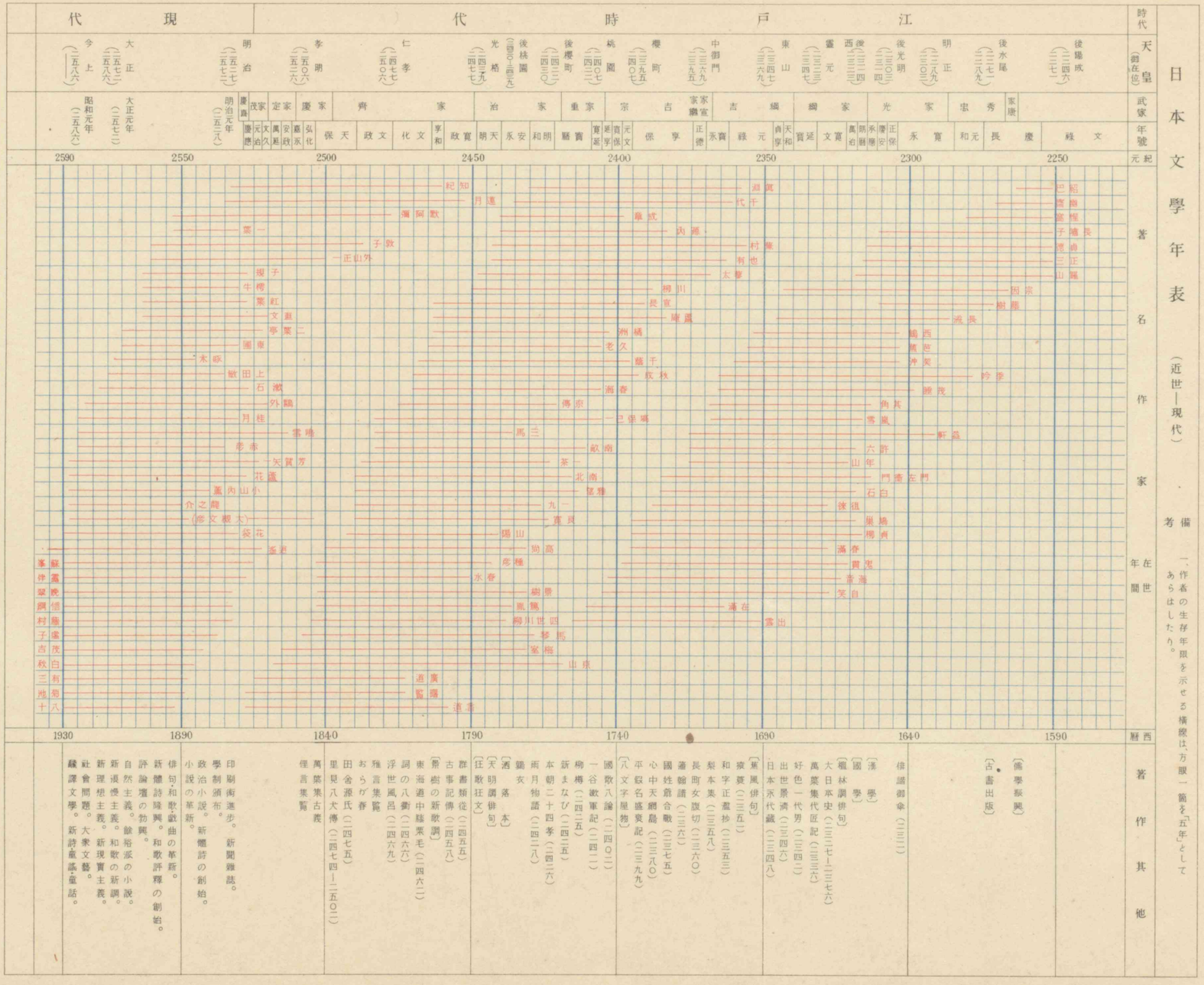
尸
三六九
吉
録元
23
16
〔蕉風俳包〕
猿蓑（一三五〇）
和字正濫抄（一三五三）

日本文學年表（近世—現代）


時代
現代
江戸時代
天皇（御在位）
後陽成（一五八六—一六一七）
後水尾（一六一七—一六二九）
明正（一六二九—一六三〇）
後光明（一六三〇—一六四四）
後西（一六四四—一六五四）
霊元（一六五四—一六六三）
東山（一六六三—一六八七）
中御門（一六八七—一七二一）
桜町（一七二一—一七三五）
桃園（一七三五—一七四七）
後桜町（一七四七—一七七〇）
後桃園（一七七〇—一七七九）
後光格（一七七九—一八一七）
仁孝（一八一七—一八四六）
孝明（一八四六—一八六七）
明治（一八六七—一九一二）
武家
後陽成
後水尾
明正
後光明
後西
霊元
東山
中御門
桜町
桃園
後桜町
後桃園
後光格
仁孝
孝明
明治元年（一八六八）
年號
文禄
慶長
元和
寛永
正保
慶安
承應
明暦
萬治
寛文
延宝
天和
貞享
元禄
宝永
正徳
享保
元文
寛保
寛延
宝暦
明和
安永
天明
寛政
享和
文化
文政
天保
弘化
嘉永
安政
萬延
文久
元治
慶應
慶應元年（一八六五）
元紀
2550
2500
2450
2400
2350
2300
2250
著名作家
在世年間
巴人
紹巴
齊藤
幽庵
盛誉
惺窩
子
隨長
窓
尚正
三
羅山
因
宗
樹
藤
流
長
鶴
西
鶴
西
馬
堂
沖
契
吟
季
睡
茂
角
其
雪
嶺
軒
益
六
許
山
年
門
番
左
門
石
白
狭
祖
巣
鳥
鳴
声
満
春
賀
鬼
音
海
笑
自
蕉
出
西暦
1890
1840
1790
1740
1690
1640
1590
著作其他
印刷術進歩。新聞雑誌。
學制頒布。
政治小説。新體詩の創始。
小説の革新。
俳句和歌戯曲の革新。
新體詩隆興。和歌評釋の創始。
評論壇の勃興。
萬葉集古義
俚言集覽
萬葉集古義（一七四七—一七〇二）
里見八犬傳（一七四七—一八〇二）
田舎源氏（一七七五）
おらが春
雅言集覽
浮世風呂（一七六九）
詞の八衢（一七六六）
東海道中膝栗毛（一七六二）
樹の新歌調
古事類従（一七五八）
群書類従（一七五五）
狂歌狂文
天明調俳句
酒落本
雨月物語（一七七八）
鶯衣
兩月物語（一七六二）
本朝二十四孝（一七五六）
新まなび（一七五五）
柳樽（一七五一）
一谷嫩軍記（一七四一）
國歌八論（一七四〇）
平假名盛衰記（一七三九）
八文字屋物
心中天網島（一七三八）
國姓爺合戦（一七三七）
藩館譜（一七三六）
長町女腹切（一七三六）
梨本集（一七三五）
和字正濫抄（一七三五）
蕉風俳句
寥蓼（一七三五）
日本永代藏（一七三四）
出世景清（一七三四）
好色一代男（一七三一）
萬葉集代匠記（一七三七—一七三七）
大日本史（一七三三—一七六）
槐林調俳句
國學
漢學
俳諸御傘（一七三二）
儒學振興
古書出版
備考
一、作者の生存年限を示せる横線は、方眼一箇を「五年」としてあらはしたり。

日本文學年表

（近世—現代）



備考

一、作者の生存年限を示せる横線は、方眼一箇を「五年」としてあらはしたり。

不許複製

昭和八年八月二十日印刷
昭和八年八月二十四日發行
昭和九年二月十八日訂正再版印刷
昭和九年二月二十二日訂正再版發行

著作者 垣内松三
西尾實

發行兼印刷者 東京市神田區榮士代町二丁目一番地
株式會社 文學社
代表者 小林竹雄

發売 東京市神田區榮士代町二丁目一番地
株式會社 文學社
電話神田三五一番
振替東京三八七八番

關西販賣所 大阪市西區靱北通二丁目十八番地
株式會社 盛文館
電話土佐堀一五二三番
振替大阪七四三番

實學業校 國文新選 全五册

第一卷	定價金	壹圓
第二卷	定價金	十錢
第三卷	定價金	九十錢
第四卷	定價金	八十錢
第五卷	定價金	八十錢

広島大学図書
2000302116